きたのはらいせき

北の原遺跡

（遺構編）

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

きたのはらいせき

北の原遺跡

（遺構編）

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

序

最近、新聞に考古学関係の記事がよく見受けられます。各地で発掘調査が行われていることの現れ、言い換えればそれだけ開発が進んでいるのだとも取れます。この飯田市においても公共事業や民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は年々増加しております。地域社会が発展することは喜ばしいことですが、今日まで伝承されてきた文化財を後世に残し伝えていくこともまた大切なことと考えます。

実施される発掘調査からは、先人たちの生活の様子を示す事実がつぎつぎと確認されております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが地域の歴史再構築に大きな役割を果たすことはいうまでもなく、破壊せざるを得なかった文化財を後世に伝える方法でもあるわけです。

今回発掘調査を実施した北の原遺跡は、古くから墓域として利用された土地でそのひとつのあらわれが古墳であったようです。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査は、その結果として文化遺産の破壊になるわけです。できることならば、現在までそうであったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だといえます。しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。地域社会の発展と文化財保護が調和のとれた地域にすることがこれからの重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた関係各位と、発掘作業・整理作業に従事した調査関係者の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成8年3月

飯田市教育委員会

教育長　小　林　恭之助

例　　言

1．本書は飯田市松尾地区における一般国道１５３号飯田バイパス（３工区）建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地北の原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は建設省中部地方建設局の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．試掘調査は平成３年９月～１０月に実施し、発掘調査は平成４年４月から平成７年１０月まで実施、整理作業及び報告書の作成作業は平成６、７年度に実施した。

4．調査実施にあたり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。なお、調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて行なった。詳しくは中村中平遺跡「土地改良総合整備事業に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」１９９４年３月長野県飯田市教育委員会を参照のこと。

5．発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号を北の原遺跡はＭＫＨ、茶柄山古墳群はＣＧＹ、上の城跡はＵＮＪとしたが、本書では調査箇所を示すものとした。

6　本書は今回調査した一般国道１５３号飯田バイパス（３工区）建設予定地内で確認された遺構のうち、城跡・古墳に関係したもの以外の遺構を掲載したものである。

7．本書の記載は、遺構ごとに一覧表とし遺構図は挿図に、写真図版は本文末に掲載した。

8．本書は吉川豊が執筆した。なお、本文については小林正春が加筆・訂正を行なった。

9．本書の編集は、調査員全員で協議により吉川豊が行ない、小林正春が総括した。

10．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序
例言
目次

Ⅰ　経　過
調査に至るまでの経過……1
試掘調査の経過
発掘調査の経過
整理作業の経過
調査組織
Ⅱ　遺跡の環境……7
自然環境
歴史環境及び周辺遺跡
Ⅲ　調査結果……9
・ＳＢ（住居址）……9
・ＳＭ（方形周溝墓）……15
・ＳＫ（土壙・土坑）……18
・ＳＩ（集石・集石墓）……58
・ＳＤ（溝址）……86
Ⅳ　まとめ……116

表　目　次

ＳＢ観察表……9　11　12
ＳＭ観察表……15
ＳＫ一覧表……18　20～22　30～38
ＳＩ一覧表……58～59　72
ＳＤ一覧表……86　97　104
弥生土器観察表……13

挿図図版目次

図版目次
ＳＢ（住居址）……10 11 12
ＳＭ（方形周溝墓）……16
ＳＫ（土壙・土坑）…18•19　23～29　39～57
ＳＩ（集石・集石墓）…60～68 70～71 73～82
ＳＤ（溝址）……87～96 98～103 105～115

写真図版目次

図版１　ＳＢ（住居址）ＳＭ（方形周溝墓）……119
2　ＭＫＨ……120
3　ＣＧＹ……121
4　ＵＮＪ……122
5　作業風景……123

報告書抄録……124

Ⅰ　調査の経緯と経過

1　発掘調査に至るまで

現在の一般国道１５３号は市街地を通過しているものの幅は狭隘で朝夕のラッシュ時にはしばしば渋滞を引き起こしていた。そのため、飯田インターチェンジをとおり市街地を迂回していく４車線の飯田バイパスが建設されることとなり、平成５年３月に２工区（鼎地区）までの共用を見た。

３工区建設工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査は飯田市松尾地区に入り、平成２年度に八幡原遺跡の調査を終了した。今回の調査対象になる遺跡は八幡原段丘の一段下位になる北の原段丘で、松尾北の原遺跡・茶柄山古墳群・上の城跡が登録されているため、保護協議を実施した。北の原遺跡のある段丘は、すこし前までは一面の桑畑であったが、市営北の原団地・雇用促進住宅等が建設され新興住宅地となり、さらに最近では前述の八幡原に市立病院が開業し、医療の中心地ともなっている。隣接する矢高原遺跡・猿小場遺跡は学校や営業所が建てられた時に発掘調査も実施され、縄文時代および平安時代の集落址が確認されている。茶柄山古墳群はこの段丘の縁部に連なる古墳群で、その中心は前方後円墳の御射山獅子塚古墳と見られるが、その範囲は下伊那史にも記されているように西は北の原古墳から東は上の城の突端まで続いていたとも考えられる。しかし、５基の古墳が現存しているだけであるが、煙滅したものもあると思われ実数はわからない。北の原段丘の東端は松尾城の出城とされる上の城があったといわれているが、その詳細はわかっていない。このような状況であるため、試掘を先行しその結果に基づき再協議をするものとした。

2　試掘調査の経過

保護協議の結果に基づき、平成３年９月２０日から遺構確認のための試掘調査を開始、１０月１９日まで実施した。まず、上の城地籍では上部の平坦地にトレンチをあけることにしたが、重機が入れないため人力による調査となった。この試掘では数本の溝と火葬墓を確認した。また、茶柄山においては墓地をさけながら、重機よりトレンチをあけた。さらにマウンドの残る箇所については人力により表土を剥いだ。その結果古墳の周溝や石組の水路を確認するとともに、遺物の出土もあった。北の原では、溝の確認ができたため、工事予定地全域を発掘調査の対象とすることとした。

3　発掘調査の経過

発掘調査は平成４年になってから北の原遺跡の買収の完了した箇所から実施することとした。続いて茶柄山へ移ったが用地内に墓地が多くあり、その移転交渉が手間取り、平成４年度には茶柄山５号墳、９号墳、２号墳、３号墳を調査したのみであった。さらに５年度も墓地移転の話がまとまらず、茶柄山のごく一部を調査したにとどまった。上の城跡の調査は重機搬入の手筈が整った６年度になってからで、約１年間の期間がかかった。この年には、墓地移転先の造成に先立ちバイパス用地に隣接した箇所の調査も実施した。７年度になってやっと墓地移転の交渉がまとまり、茶柄山１号墳・６号墳の調査が実施できた。結局４年間にわたる調査となった。

4　整理作業の経過

調査の進捗状況に併せて、平成６年度から飯田市考古資料館で整理作業に着手した。同じ遺跡を幾度かに別けて調査しているため、全体図の作成を先行させ、遺構分布図を重ねていった。遺物については、洗浄、注記、接合、復元、実測を順次行なった。小破片の遺物が多く、特に注記、接合には手間がかかったが、結局完形になる土器はあまりなく、主に廃棄された器であることがわかった。また、墓から出土した古銭・鉄器の錆落としにもかなりの時間を費やした。これらは副葬品であり、時代による墓制の変遷もわかった。遺構図の整理では、遺構毎の第二原図・エレベーションの作成は墓の数が多かったため、捗がいかなかった。遺構・遺物のトレースに併せて原稿を執筆し、報告書に掲載する写真の選考や遺物の写真撮影も行なった。

5　調査組織

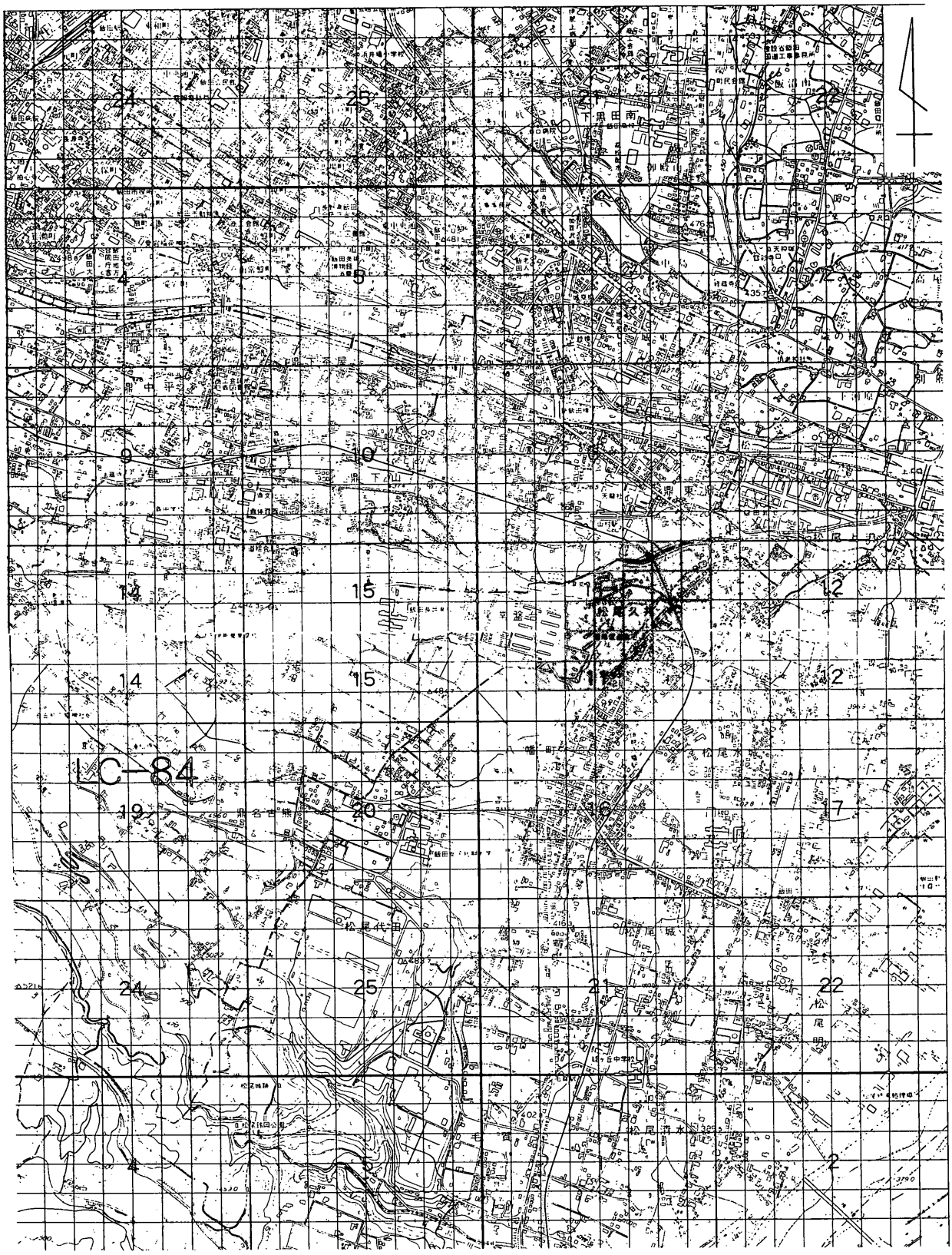
調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　福島　稔　（～平成 3年12月）
小林恭之助　（平成 3年12月～）

調査員	伊藤　友久	伊藤　尚志	上沼　由彦	小林　正春	佐々木嘉和	佐合　英治
	澁谷恵美子	馬場　保之	福澤　好晃	山下　誠二	吉川　豊	
作業員	新井　幸子	新井　幸子	新井ゆり子	伊坪　節	伊藤　禎七	伊藤　博紀
	井上　恵資	池田　幸子	池戸智恵子	市瀬　長年	市瀬　房吉	今村　勝子
	今村　春一	岩田　周子	小沢　信治	小沢　はな	太田　沢男	大原　久和
	岡島　旦	奥村　栄子	恩沢不二子	金井　照子	金子　裕子	唐沢古千代
	唐沢さかえ	川上みはる	木下喜代恵	木下　早苗	木下　貞子	木下　傳
	木下　当一	木下　義男	木下　力弥	木下百合子	木下　龍治	木下　玲子
	吉良　忠雄	北川　彰	北原たせ子	北原　裕	北原　森作	北村　重実
	櫛原　勝子	熊谷　義章	熊崎三代吉	小池千津子	小池金太郎	小島　妙子
	小平不二子	小西　広司	小林　定雄	小林　千枝	小林　世司	佐々木　阜
	佐々木　瞳	佐々木文茂	佐々木とよ	佐藤知代子	斉藤　徳子	斎藤　喜千
	久保田やよ	佐々木美千枝	佐々木真奈美	斎藤　実	坂井　勇雄	坂下やすゑ
	榊原　政夫	塩沢　澄子	清水　明	清水　三郎	下井　正俊	代田　佳代
	代田　和登	菅沼　庄三	菅沼和加子	鈴木　重雄	鈴木　尊子	鈴木　寛
	砂場　章二	瀬古　郁保	関島真由美	田中　勝彦	田中　薫	田中　恵子
	田中　利男	田中　富治	田中　博人	高橋収二郎	滝上　正一	竹本　常子
	塚原　次郎	遠山　駒吉	豊橋　宇一	中島佳寿子	中島　真弓	中島　律子
	中田　政良	仲田　昭平	中平　隆雄	仲村　信	鳴海　紀彦	丹羽　由美
	西尾　俊貴	西尾　茂人	西塚　洋子	萩原　弘枝	畠山　英夫	服部　光男
	林勢　紀子	林田　加代	原　礼三	原田四郎八	樋本　宣子	平栗　陽子
	平松　正子	福沢　章子	福沢　育子	福沢トシ子	福沢　幸子	古根　素子
	細井　良悟	細田　七郎	細田　光彦	牧内　修	牧内喜久子	牧内とし子

牧内　八代　牧内　優子　正木実重子　増田香代子　松井　明治　松下　清子
松下　成司　松下　直市　松下　真幸　松下　光利　松島　直美　松本　恭子
松山　良子　三浦　厚子　三石　久雄　溝上　清見　南井　規子　宮内真理子
宮下　裕子　村松　絹子　森　　章　森　　信子　森本かおり　森本　　幸
森藤美知子　森山　文枝　矢澤　博志　柳沢　謙二　山崎志ずゑ　山田　康夫
湯田　直人　依田　時子　吉川　悦子　吉川紀美子　吉川　正実　吉沢佐紀子
吉沢まつ美　吉村　節子　早稲田仁美　渡辺　直子

指　　導　国立奈良文化財研究所
国立歴史民俗博物館
長野県教育委員会文化課

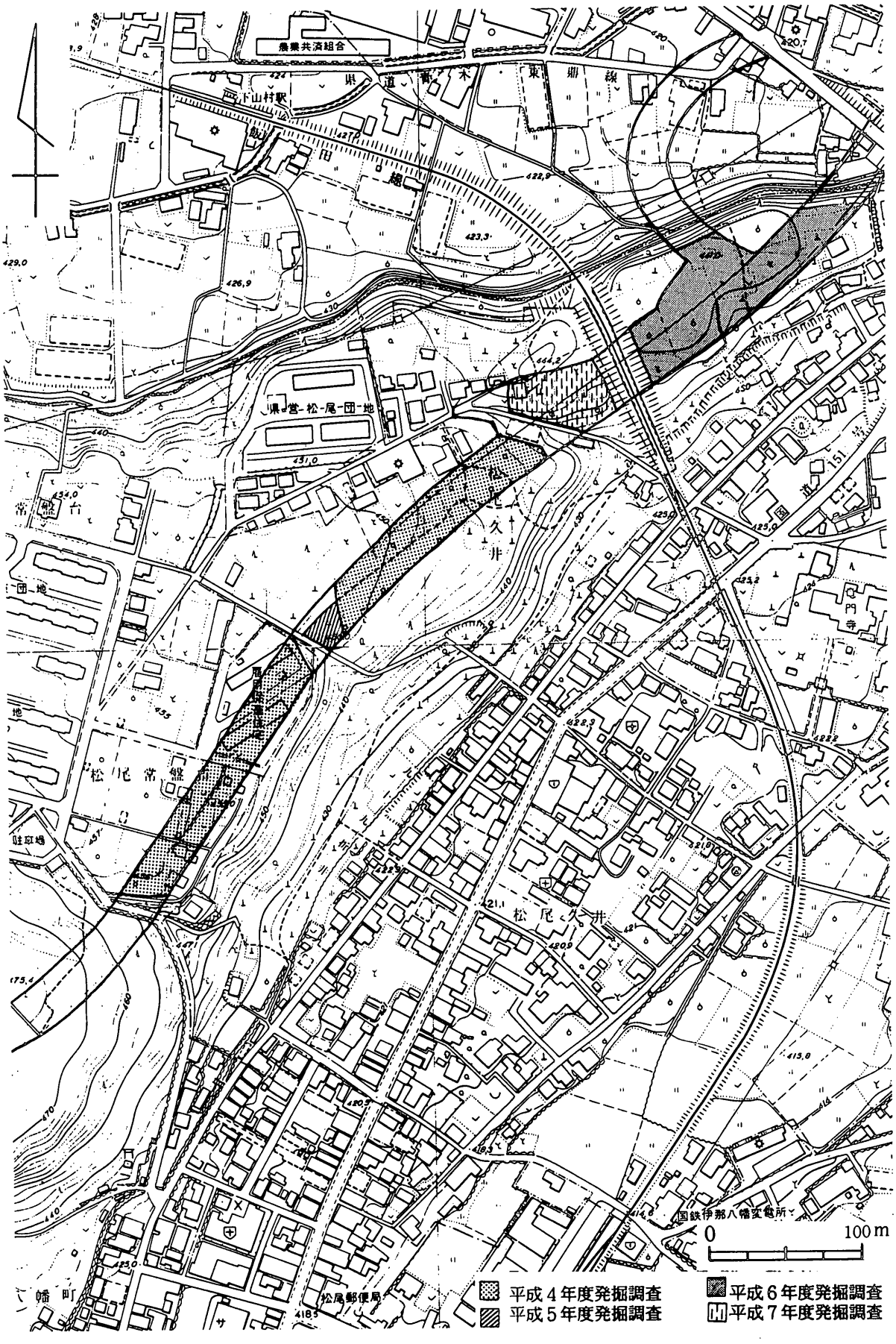
事　務　局　飯田市教育委員会社会教育課
安野　　節　（社会教育課長、～平成５年度）
横田　　穆　（社会教育課長、平成６年度～）
中井　洋一　（　〃　文化係長、　～平成３年度）
原田　吉樹　（　〃　文化係長、平成４・５年度）
小林　正春　（　〃　文化係、　～平成５年度、文化係長、平成６年度～）
山下　誠一　（　〃　文化係、平成６年度～）
吉川　　豊　（　〃　〃　）
馬場　保之　（　〃　〃　）
福澤　好晃　（　〃　〃　、平成４年度～）
渋谷恵美子　（　〃　〃　、～平成５年度）
吉川　金利　（　〃　〃　、平成５年度～）
下平　博行　（　〃　〃　、平成５年度～）
伊藤　尚志　（　〃　〃　、平成６年度～）
伊藤　友久　（長野県埋蔵文化財センター派遣　平成６年）
上沼　由彦　（長野県埋蔵文化財センター派遣　平成７年）
篠田　　恵　（　〃　〃　、～平成４年度）
岡田　茂子　（社会教育課　社会教育係、平成５年度～）



挿図１　遺跡分布図

下山遺跡
村沢遺跡
上の城跡
上溝４号墳
上溝天神塚古墳
御射山獅子塚古墳
おかん塚古墳
上溝遺跡
茶柄山古墳群
北の原遺跡
北の原古墳
妙見山古墳
八幡町遺跡
久井遺跡
八幡原遺跡
水城遺跡
八幡下遺跡
松尾城遺跡
0
200m

挿図２　周辺遺跡


農業共済組合
県道青木・東卯線
下山村駅
飯田線
県営松尾団地
松尾久井
松尾常盤台
松尾久井
国鉄伊那八幡変電所
松尾郵便局
幡町
0
100m
平成4年度発掘調査
平成5年度発掘調査
平成6年度発掘調査
平成7年度発掘調査

挿図3　年度別調査箇所

Ⅱ　遺跡の環境

1　自然環境

伊那谷の基本的な地形は、天龍川の流れに沿ったほぼ南北方向への段丘地形を特徴としている。松尾地区は天龍川の氾濫原から数えて５段の段丘面により形成されている。今回の調査範囲は最上段は八幡原・北の原段丘面で標高は４５０～４７０ｍで国道１５１号が通過する松尾の市街地との比高差は一段低い北の原で３０ｍ、最上段の八幡原で５０ｍほどある。この段丘は天龍川により形成された河岸段丘が造山活動で隆起した後、飯田松川に解析されたものである。

この段丘崖は断層により形成されたもので、天龍川に平行に南北に延びている。飯田松川以南では祝詞ヶ洞、祝井沢川等の小河川によりいくつかにわけられ、北から上の城、茶柄山、妙見山、八幡山、代田山と名前がついている。

さて、北の原段丘面は鼎大塚古墳付近を起点に広がるやや東へ傾斜した三角形の平坦地である。台地の規模は東西に１.１㎞、南北に０.２５㎞とごく狭いものであるが、さらに東へ４００ｍほど細長く延びている。前述したように一段上の八幡原段丘とは高低差約１５ｍ、また北側で一段低くなる鼎村沢地籍とは２０ｍの段差を持つ。埋蔵文化財包蔵地北の原遺跡の範囲はほぼＪＲ飯田線の軌道までとなっているが、発掘調査の結果、北の原遺跡の範囲を上の城跡突端いわゆる国道１５１号の掘割までと改めることとした。

松尾地区の比較的温暖で降水量も少ないものの、当該地は前記のとおり段丘突端部に位置するため、風当たりが強い。南側に段丘崖があるものの北風や西風をさえぎるほどの高さでもなく、したがって日照も妨げられない。しかし、この段丘面には自然水利がほとんどなく、湧水帯も段丘の直下のごく一部に見られるだけで、生活の場としては不向きであったのだろう。古墳をはじめとして現在でも墓地がまとまって存在しているのはそのあらわれであろう。

2　歴史環境と周辺遺跡

北の原およびその周辺においても、先人たちの生活した痕跡がいくつか確認されている。松尾・鼎地区の状況を時代順に概観してみる。

旧石器時代の遺物が採取された遺跡としては、八幡原遺跡よりマイクロブレイドが、また、その一段下で飯田長姫高校の敷地となっている猿小場遺跡よりナイフ形石器の出土が知られている。断片的な資料ではあるが八幡原および矢高原一帯にその頃から人々の生活があったと見てよい。

縄文時代早期の遺跡としては、ごくわずかな遺物が出土しているのみで、この地における当該時期の様相はつかめていない。

前期としては松川河岸段丘の上位の段丘上にあたる八幡原遺跡および田井座遺跡において複数の竪穴住居址・集石炉・落し穴が確認されており、集落のあった可能性が指摘されている。

中期になると日向田遺跡、柳添遺跡、猿小場遺跡において良好な資料が確認できている。

後期・晩期の資料は、遺構に伴う土器の出土がなく、断片的でしかない。遺跡としては六反畑遺跡等があるが、いずれの遺跡も鼎地区に限られており、松尾地区では確認されていない。

弥生時代は多くの発掘例がある。清水遺跡・田井座遺跡・一色遺跡等で住居址および方形周溝墓を確認している。この時代の生活中心域は、当八幡原段丘面東方及び北方に位置する低位の段丘上へと広がった。

現存する古墳の数から見れば松尾地区は、座光寺地区・竜丘地区と並んで多い地区である。八幡原には、飯田市立病院建設に先立ち発掘調査した物見塚古墳と妙見山古墳の２基の存在が知られている。八幡山中には前方後円墳である八幡山古墳が現存している。これらの古墳は崖の縁部に構築されている。また、北の原には前方後円墳である御射山獅子塚と今回の調査対象となった茶柄山古墳群がある。さらに下段にあたる久井・八幡町には八幡町公民館の用地内には町古墳があり発掘調査を実施した。さらに上溝地区には前方後円墳である天神塚・姫塚・おかん塚古墳等をもつ古墳群が広がっている。

これまでに調査した遺跡から判断すれば、これらの古墳を構築した人々は、北側に広がる鼎地区の人々よりはむしろ東側の下段に広がる松尾地区に居住していた人々と考えられる。それを示す集落遺跡としては、城遺跡・寺所遺跡・清水遺跡などがある。その中でも清水遺跡や城遺跡では、古墳時代前期の集落址が確認できた。鼎地区にも古墳時代の集落址はあるが、六反畑遺跡、柳添遺跡、黒河内遺跡であり、これらの古墳からはかなり離れている。

奈良・平安時代の遺跡としては、集落址として確認できた猿小場遺跡（飯田長姫高校敷地）と隣接する矢高原遺跡の調査では２７軒の住居址を調査し大規模な集落址であることがわかっている。また、久井遺跡では掘り方のしっかりした掘立柱建物址が２棟確認できたが、調査範囲が限られており性格まではつかめなかったものの、駅舎の可能性もある。さらには、八幡原遺跡や少し距離がへだてるが、日向田遺跡でも平安時代の住居址が確認されている。

中世の遺構の調査例としては、田井座遺跡において竪穴遺構が確認され中から常滑の大甕が出土している。状況から見て一般の住居址とは考えられないものの性格は不明であった。猿小場遺跡で確認した建物址は高床式の倉庫の可能性が高い遺構であった。その他の発掘例でも意向は確認されているもののまとまった資料ではない。

今回の調査地点の南東側段丘崖には鳩ヶ嶺八幡宮があり、鎌倉時代の文献によりすでにその存在が明らかである。本尊として奉られている誉田別尊坐像は重要文化財に指定されている。松尾が門前町として発展したのはこの頃であろう。さらに南にある松尾城は小笠原貞宗により１４世紀後半に建てられたものとされている。小笠原氏は信濃守護職に着くものの、相続争いで松尾城と鈴丘城に分裂する。この松尾城は１６世紀末に廃城になってしまい下伊那の中心も松尾から飯田へと変わっていった。なお、松尾城跡と鈴丘城跡は県の史跡に指定されている。今回の調査対象となる北の原の東端の「上の城」は松尾城の出城との記述があるのみで詳細は知られていない。

また八幡町は古来から交通の要所であり市街地には旧街道が２本通っている。一本が秋葉街道、現在の国道２５６号であり、この街道は武田信玄の信州侵略により整備されたものである。もう一本は遠州街道、現在の国道１５１号であり、中馬道として江戸時代に発達した。この２本の街道の分岐を示す道標が鳩ヶ嶺八幡宮の前に立っている。

Ⅲ　調査の結果

ＳＢ（住居址）

今回の調査では、弥生時代の後期のもののみ。

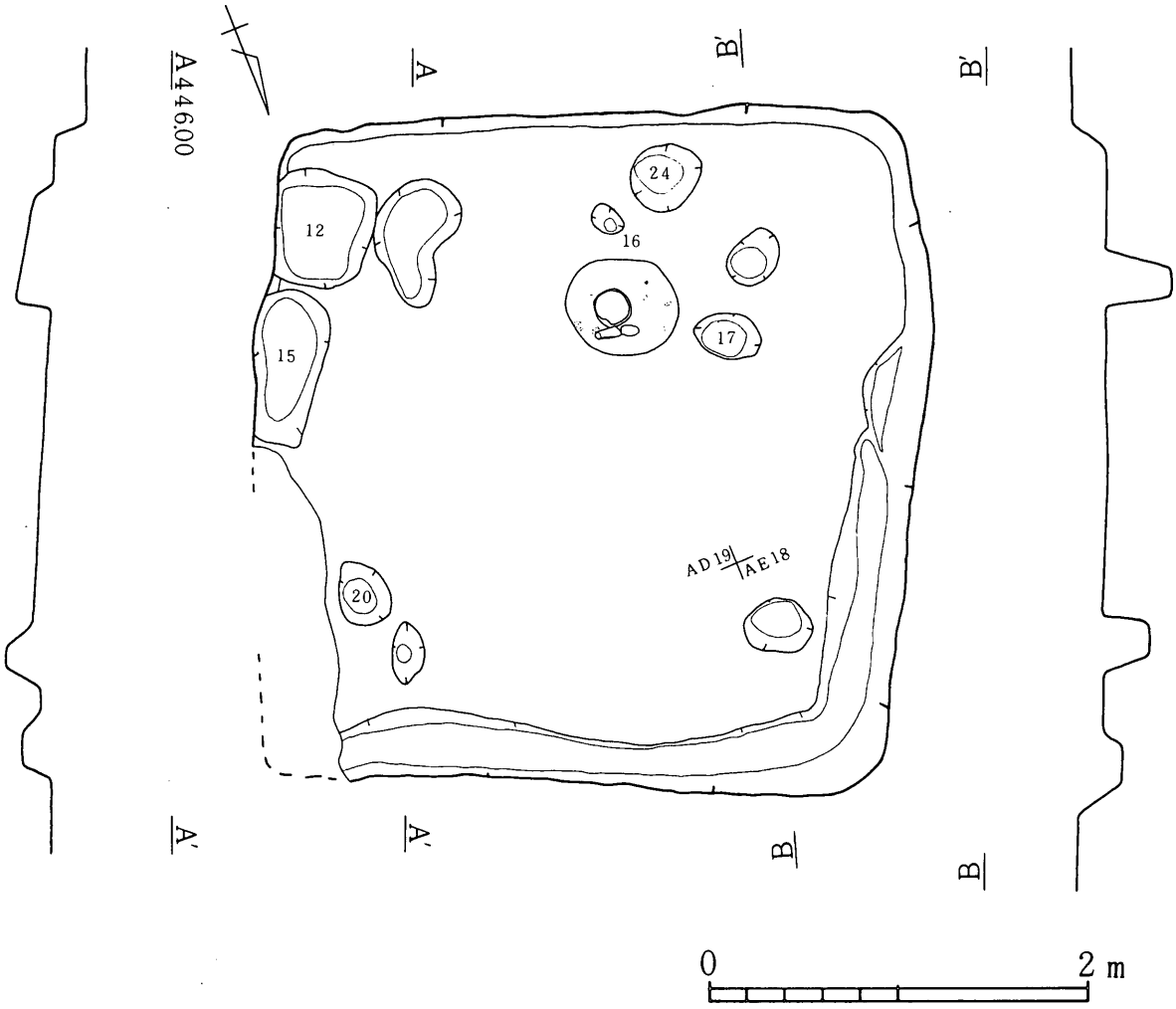
ＳＢ－０１

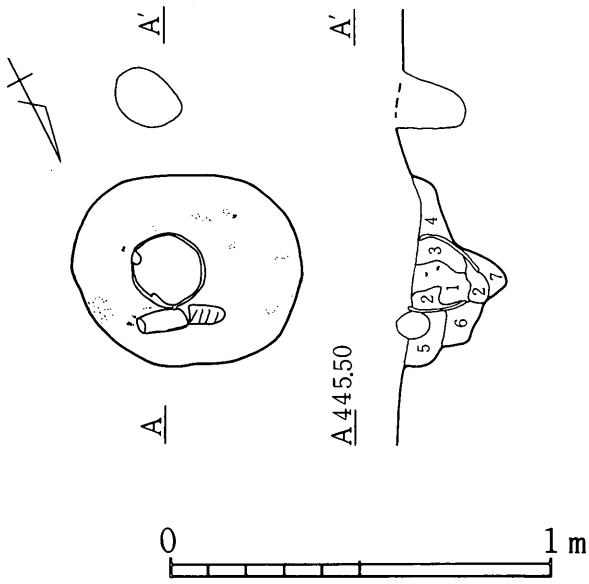
検出位置		Ａｂ１９他	覆土			黒褐色
切合	切る	ＳＫ－０４（落とし穴）	床面			貼床
	切られる	攪乱	住居内施設	主柱穴		４個（Ｐ－１～Ｐ－４）
規模・形状	プラン	隅丸方形		貯蔵穴		Ｐ－５
	規模	３．６×３．５ｍ		入口		なし
	主軸	Ｎ１６０°Ｗ		炉・竈	形状	土器埋設炉
	壁高	２３㎝			規模	６０×５０㎝
	形状	急角度に立ち上がる。			特記事項	炉縁石を持つ

出土遺物　波状紋のある甕の口縁他
壺の底部がある。
口縁部の切られた甕は炉に使用されていたもので、

特記事項　北側の壁直下にのみ周溝が認められる。深さ１４㎝　幅３０㎝

時期	弥生時代後期終末	根拠	出土遺物





1．炭、焼土泥暗褐色土
2．黄褐色粘土
3．炭、焼土混黒褐色土
4．黒褐色土
5．褐色土
6．暗黄褐色土
7．黄土混暗褐色土

挿図4　ＳＢ01

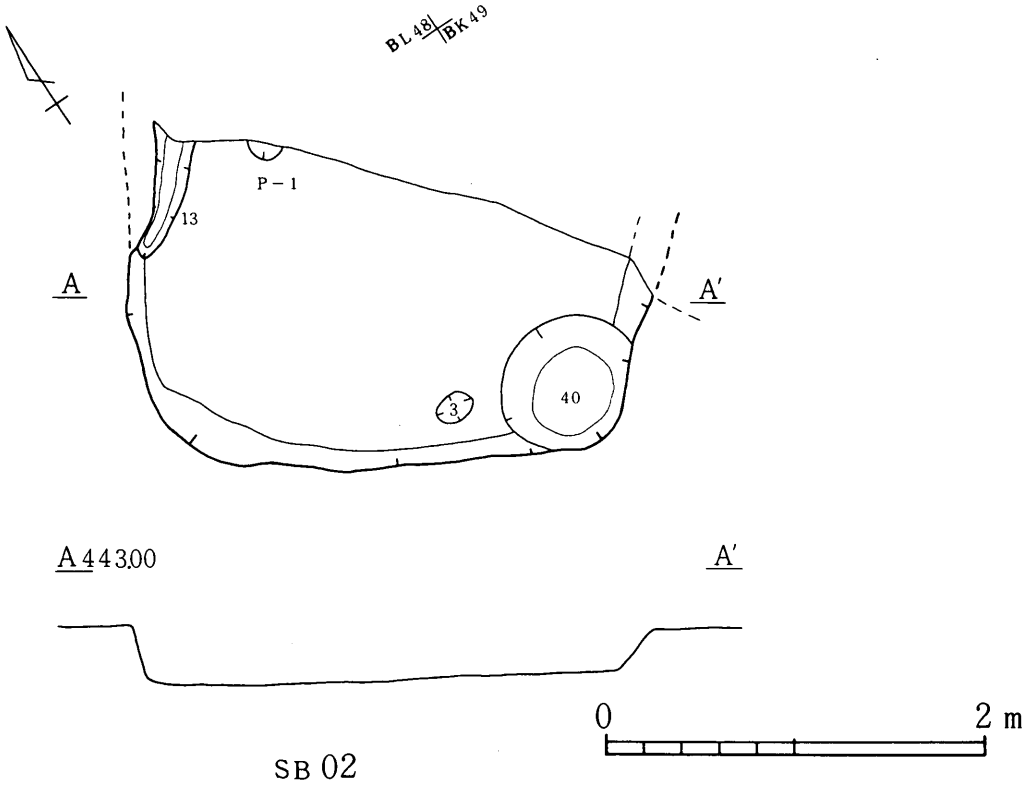
ＳＢ－０２

検出位置		ＢＫ４８他	覆土			黒褐色
切合	切る		床面			不明瞭
	切られる	Ｋ－６	住居内施設	主柱穴		確認できず
規模・形状	プラン	隅丸方形		貯蔵穴		確認できず
	規模	２．８×（１．６）ｍ		入口		確認できず
	主軸	不明		炉・竈	形状	
	壁高	３２cm			規模	
	形状	ほぼ垂直に立ち上がる。			特記事項	確認できず

出土遺物　床面・覆土からの出土はほとんどないが、箆磨きの甕の破片が出土

特記事項　北側の壁際に幅２０cmの周溝あり
Ｐ－１には焼土あり、炉（地床炉）の可能性もあり

時期	弥生時代後期終末	根拠	出土遺物



挿図５　ＳＢ02

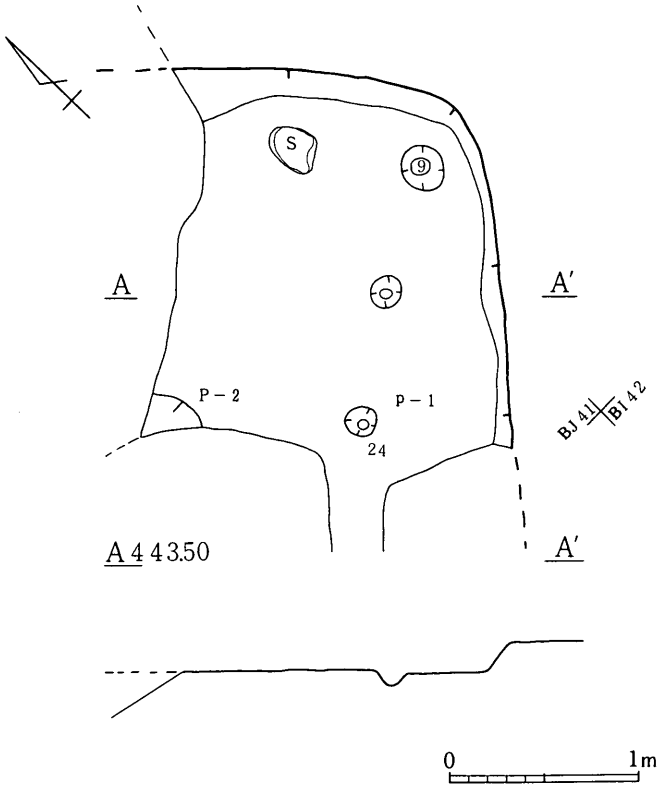
ＳＢ－０３

検出位置		Ｂｊ４１他	覆土			黒褐色
切合	切る		床面			比較的良好な貼床
	切られる	近世の墓	住居内施設	主柱穴		Ｐ－１のみ
規模・形状	プラン	隅丸方形と考えられる。		貯蔵穴		確認できず
	規模	（３．２）×（１．８）ｍ		入口		確認できず
	主軸	不明		炉・竈	形状	
	壁高				規模	
	形状				特記事項	攪乱に切られ確認できず

出土遺物　床面・覆土からの出土はほとんどないが、波状紋のある壺の破片が出土した。

特記事項　Ｋ－６の盛土の下で検出
Ｐ－２には焼土あり、炉（地床炉）の可能性がある。

時期	弥生時代後期終末	根拠	出土遺物



挿図６　ＳＢ03

松尾北の原遺跡における弥生時代後期の集落形成について

今回の調査において３軒の住居址が確認された。いずれも弥生時代後期後半のものである。その内２軒は古墳（茶柄山６号墳）の盛土の下からであった。集落と呼ぶには少ない数である。しかし、今回発掘した場所が崖の縁部によっていたことと、弥生時代以降の遺構（古墳・城）が大規模な土木工事を伴うものである事を考えれば、この北の原段丘の東端に弥生時代後期の集落があったと考えられる。住居址の分布状況からみれば発掘調査した箇所が集落中心でないことは判断できる。

しかし、松尾北の原段丘面（矢高原遺跡・猿小場遺跡）ではこれまでに飯田長姫高校(S53,S54)・矢高運動公園(S57)・ジャステック(H2)・市道下山線(H3)・三菱ふそう(H4)と５回の発掘調査が行なわれているが、確実に弥生時代の遺構、遺物を確認したものは、飯田長姫高校敷地内での住居址２軒のみである。住居址の出土遺物から後期前半と後期後半のものであることがわかっている。しかし、周囲にはこれ以外に住居址や土坑・方形周溝墓の確認例はなく、集落址とは捕らえられなかった。これに対し平安時代の集落は段丘のほぼ中央にあたる三菱ふそう敷地内・飯田長姫高校敷地内を中心とした地点で確認できている。この集落は南側にある段丘崖（八幡原面）直下の湿地（いわゆる後背湿地）を生産域として利用し、その北側の微高地を居住域としていたものと考えられている。

今回確認した弥生時代の住居址が北の原段丘の東よりの段丘縁部にあるのは多少特異な感じを受ける。周辺の調査がなされていないというものの、水利も不便でありかつ湿地を持たない場所であり、大集落（殿原遺跡｛伊賀良殿岡｝・田井座遺跡｛鼎一色｝・丹保遺跡｛上郷飯沼｝のような）は形成できるはずもなく、小規模な単位（４～５軒）で集落を形成したものであろう。

出土遺物からみる限りでは３軒の住居址は同時に存在していた可能性が高く、古墳の盛土から出土した土器もごく一部の遺物を除けば弥生時代後期終末期のものである。（表１参照）

表　1

弥生式土器観察表

図版No.	No.	出土位置	器形	模様もしくは調整痕	時期
	1	ＳＢ－１　床	甕	櫛描波状紋	弥生時代後期終末
	2	ＳＢ－１　床	甕	櫛描斜走短線	弥生時代後記終末
	7	ＳＢ－１　炉	甕	箆磨き	弥生時代後期終末
		ＳＢ－２　床	甕	箆磨き	弥生時代後期終末
		ＳＢ－３　床	壺	櫛描波状紋と横線紋の組合わせ	弥生時代後期終末
		ＳＢ－３　床	甕	箆磨き	弥生時代後期終末
		Ｋ－６　盛土	甕	ハケメ	古墳時代前期
		Ｋ－６　盛土	壺	櫛描波状紋と横線紋の組合わせ	弥生時代後期終末
	8	Ｋ－６　周溝	台付壺	ハケメ	古墳時代前期
		Ｋ－１３盛土	甕	２段の斜走単線	弥生時代後半前半
		ＣＧＹ遺構外	壺	櫛描波状紋	弥生時代後半

人口が爆発的に増加する弥生時代後期には、集落にも変化が現れている。周辺に湿地を持たない地域においても住居址が確認されている。(例、伊賀良大瀬木細田北遺跡は標高６５０ｍを越える山の尾根で弥生時代後期の住居址が２軒確認され小規模な集落が営まれていたものと判断した。)

松尾北の原においても、松川の氾濫原を見下ろすことのできるこの地を居住域と選び住んだものであろう。その範囲も茶柄山周辺のごくせまい箇所に限られているため、食物の生産量に見合った人数しか住むことはできなかったはずである。周辺の調査が進めば耕作された畑地が確認される可能性もある。

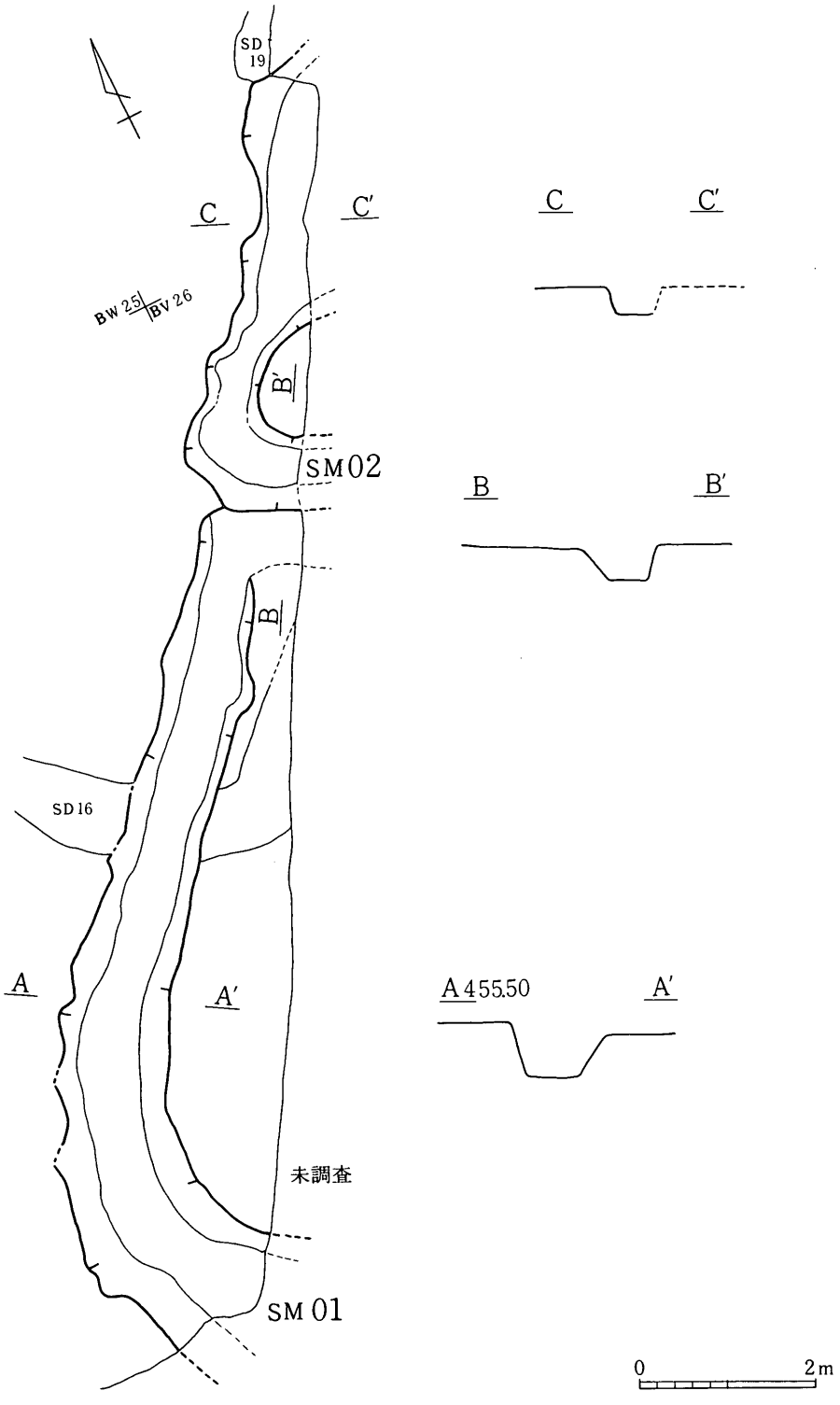
ＳＭ（方形周溝墓）

ＳＭ－０１

検出位置		ＢＳ－２３（さらに未調査区へ広がる）、西コーナーと北西の周溝を確認			
切合	切る		周溝の形態	周溝の覆土	暗褐色
	切られる	ＳＤ－１６			
規模	プラン	推定隅丸方形		周溝の形態	断面でＵ字形
	規模	一辺１０ｍ			
	主軸	不明		周溝の規模	幅　１００cm 深さ　６２cm
	主体部	未調査区か			
出土遺物　高坏の脚部					
特記事項　北東側の周溝をＳＭ－０２と共有している。 一段上の八幡原遺跡で確認できた方形周溝墓群と同様崖縁部に周溝を共有して複数存在する可能性がある。					
時期	古墳時代		根拠	出土遺物	

ＳＭ－０２

検出位置		ＢＷ－２６（未調査区へ広がる）　西側のコーナーのみ確認			
切合	切る		周溝の形態	周溝の覆土	暗褐色
	切られる	ＳＤ－１９			
規模	プラン	推定隅丸方形		周溝の形態	断面でＵ字形
	規模	一辺５ｍ			
	主軸	不明		周溝の規模	幅　６０cm 深さ　２８cm
	主体部	未調査区か			
出土遺物　混入品と見られる硬砂岩製の打製石斧の基部があるだけ。					
特記事項　南西側の周溝をＳＭ－０１と共有するものと見られる。 ＳＭ－０１と同様に周溝墓群の中のひとつであろう。					
時期	古墳時代		根拠	確認状況	



挿図7　SM01　SM02

方形周溝墓群の存在

平成２年度発掘調査を実施した八幡原遺跡は、今回発掘調査を実施した北の原遺跡の南側に位置する上位段丘上に広がる包蔵地であり標高は４７０ｍほどある。八幡原遺跡内には２基の古墳（物見塚古墳・昭和６３年度調査実施、妙見山古墳・平成２年度調査実施）が残存していたが、開発により現在は残っていない。方形周溝墓群が確認できたのは古墳が構築された場所と同じ段丘崖縁部である。

周溝墓は周溝を共有した格好で３列に２４基が段丘の縁に並んでいるのが確認できた。また、古墳の周溝に切られたものもあった。時期は出土遺物から弥生時代後期中島式土器の最終段階あたりから須恵器出現したあたりの期間でおおよそ４世紀後半から５世紀中頃になる。

今回の調査は、比高差が約２０ｍある一段下位の段丘ではあるが、方形周溝墓が２基確認できた。この周溝墓の時期を判断できる遺物はＳＭ－２の周溝から出土した５世紀代の高坏の脚部のみであるため、断定はできないが、これらの周溝墓も八幡原遺跡のそれと同時期に造られたと考えられる。しかし、位置的には段丘崖の斜面にはかかっておらず平坦な部分に構築されている。八幡原遺跡の周溝墓群を造られた場所（構築位置）により、３時期にわけることができる。それは出土遺物や、周溝の切り合いから判断し、ほぼ下記のようになる。

１期は、段丘縁部の斜面をさけた平坦部を選んで造られている。（４世紀後半）

２期は、段丘縁部の斜面に１期の周溝を共有するように造られている。（５世紀初頭）

３期は、１期よりさらに段丘面内部の平坦面に造られる。（５世紀前半から中葉）

今回検出された北の原遺跡の２基の周溝墓は、八幡原遺跡の分類にあてはめると３期に含まれる。また、出土遺物からみてもほぼ５世紀代と判断できることから、最終段階の周溝墓であろう。これらの周溝墓が造られた後の墳墓の形態は古墳へと変わっていったものと考えられる。周溝墓が確認できたこの場所にも北の原古墳があったとされるもののやや東に離れた茶柄山古墳群は５世紀後半のものとみられるがその範囲内では周溝墓が一基も確認できていないことから、周溝墓から古墳へ墓の形態をかえた可能性がたかい。

この地に現れた埋葬の形態や変化は、支配体制を含めた社会的な変化の現れと言えよう。

ＳＫ（土坑）

平面検出においては、土坑・土壙墓と判断したものを一括して掲載。そのため完掘時にＳＩと判断されるべきものも含まれている。

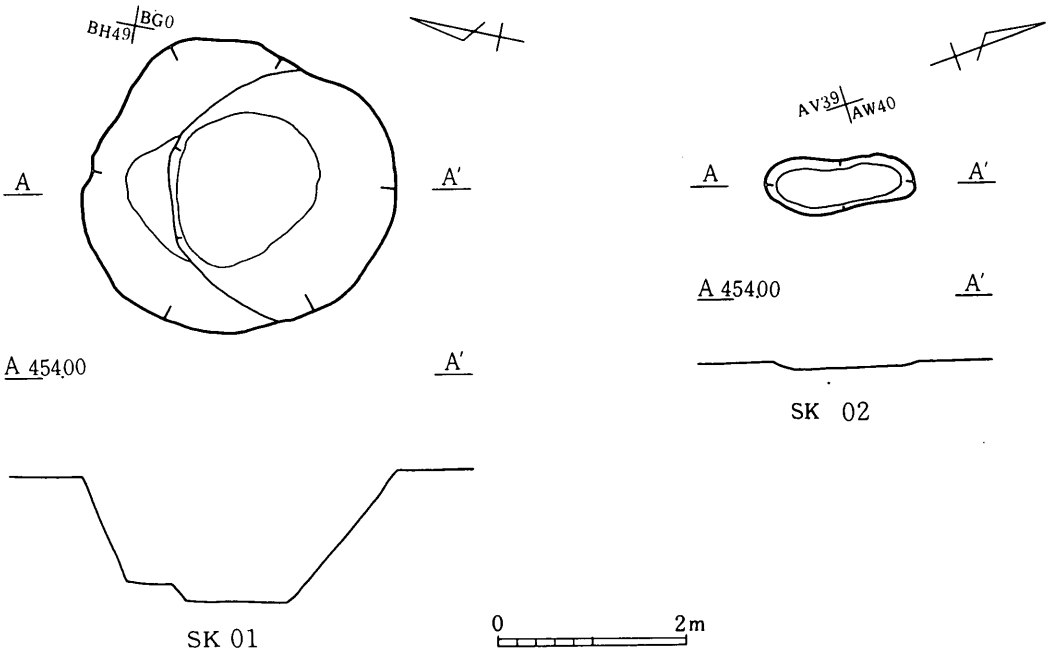
ＭＫＨ地籍の土坑について

宅地や畑地の造成による削平が行なわれたため、遺構の残存状況はあまり良くなかった。したがって、土坑として確認できたのは９基にとどまった。

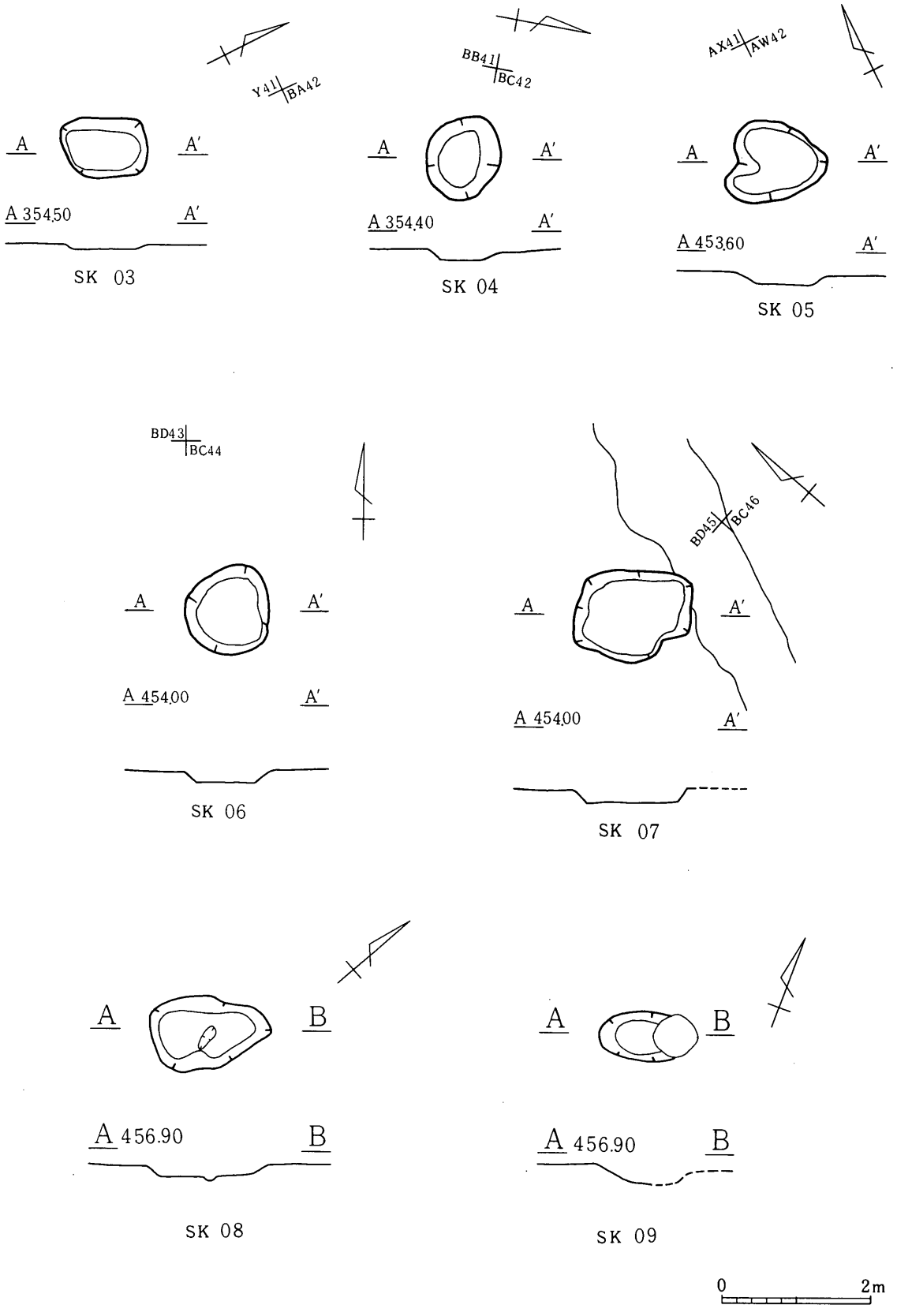
そのうち性格の把握できたのは３基で、いずれも墓（土壙墓：遺骸を直接埋葬したもの）であり、まとまって確認できたことからこの付近は墓域なっていたとも考えられる。性格不明の土坑の中の幾つかは墓である可能性が高い。

ＭＫＨ地籍の土坑観察表

No.	図	位 置	平 面 形	(長×短×深)	覆 土	時 期	出土遺物	備 考
1	8-1	BG-49	円形	332 308 136	黒褐色	不明	なし	礫が入る
2	-2	AV-40	楕円形	156 60 6	暗褐色	江戸時代	人骨	土壙墓
3	9-1	AX-41	隅丸方形	116 76 8	暗褐色	江戸時代	人骨・銭	土壙墓
4	-2	BB-42	円形	112 100 16	褐色	不明	なし	性格不明
5	-3	AX-41	不整円形	116 108 16	暗褐色	江戸時代	人骨	土壙墓
6	-4	BB-44	円形	120 112 16	褐色	不明	なし	礫が入る
7	-5	BC-45	楕円形	160 120 21	褐色	不明	なし	覆土に礫が入る
8	-6		不整楕円形	160 100 24	暗褐色	不明	なし	中央に落ち込み
9	-7		楕円形	120 64 20	暗褐色	不明	なし	攪乱に切られる



挿図８　SK01・02



挿図9　SK03・04・05・06・07・08・09

ＣＧＹ地籍の土坑について

調査地区のおおむねは山林であり、所々に墓地が点在していた。今回の道路建設に先立つ墓地移転のための改葬が行なわれたため、遺構にかなりの破壊が加わったと見られる。

今回は検出時に確認できた、穴・落ち込みをＳＫとしたため、掘りあがりで土坑でないと判断できるものもかなりあった。また、近世の墓はその上部に石を置く風習があるため、検出時には集石としたが、掘り上がってみて墓穴という場合や土坑と判断したが集石墓（火葬墓）ということもあった。

改葬が行なわれた墓はせいぜい３世代前程度（１００年前）のもので、それ以前のものについてはそのままになっていたため、土坑のほとんどは近世（江戸時代）の墓であった。

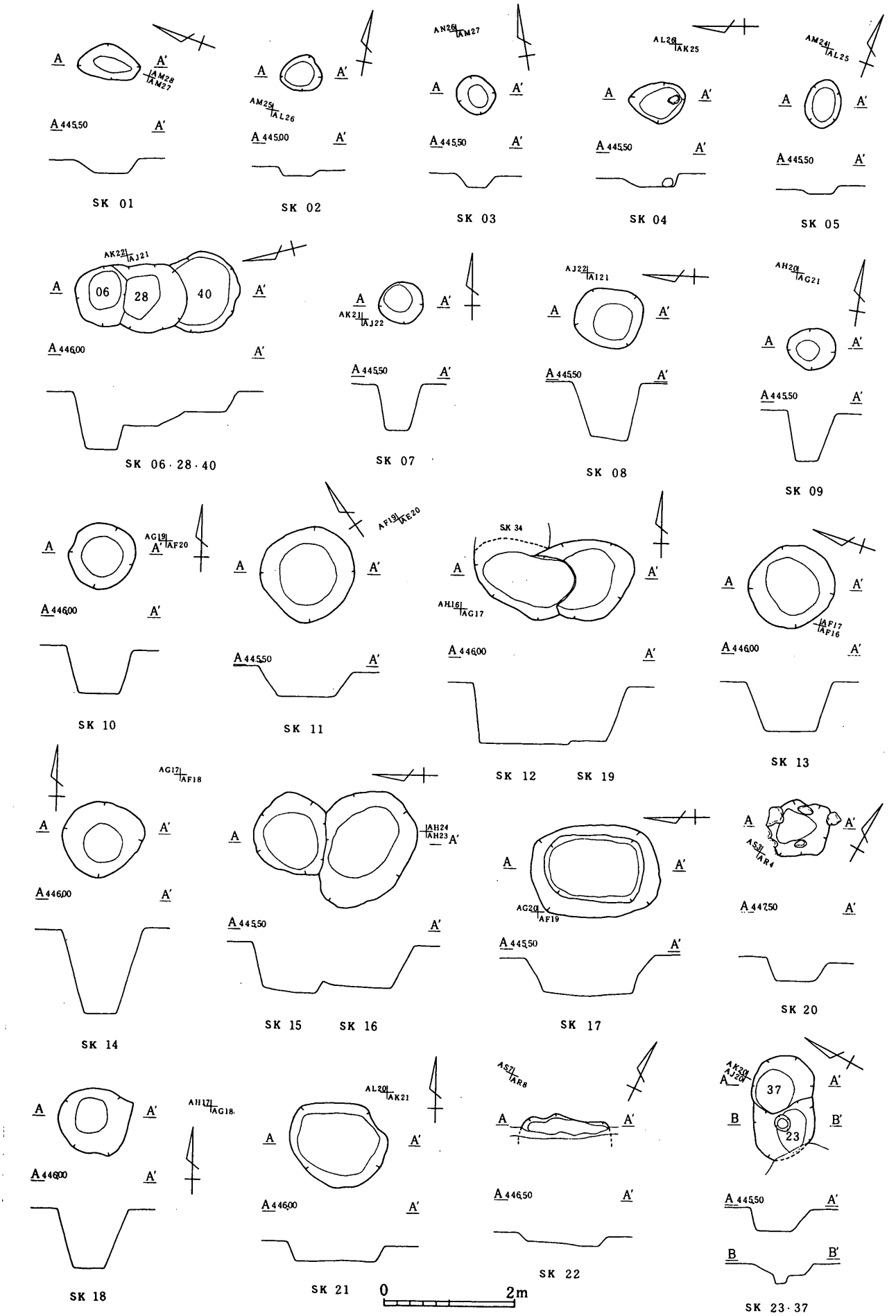
墓以外でＳＫとしたものからは、遺物も出土せず時期・性格とも不明としたものが多い。

ＳＫ観察表　ＣＧＹ（茶柄山地籍）

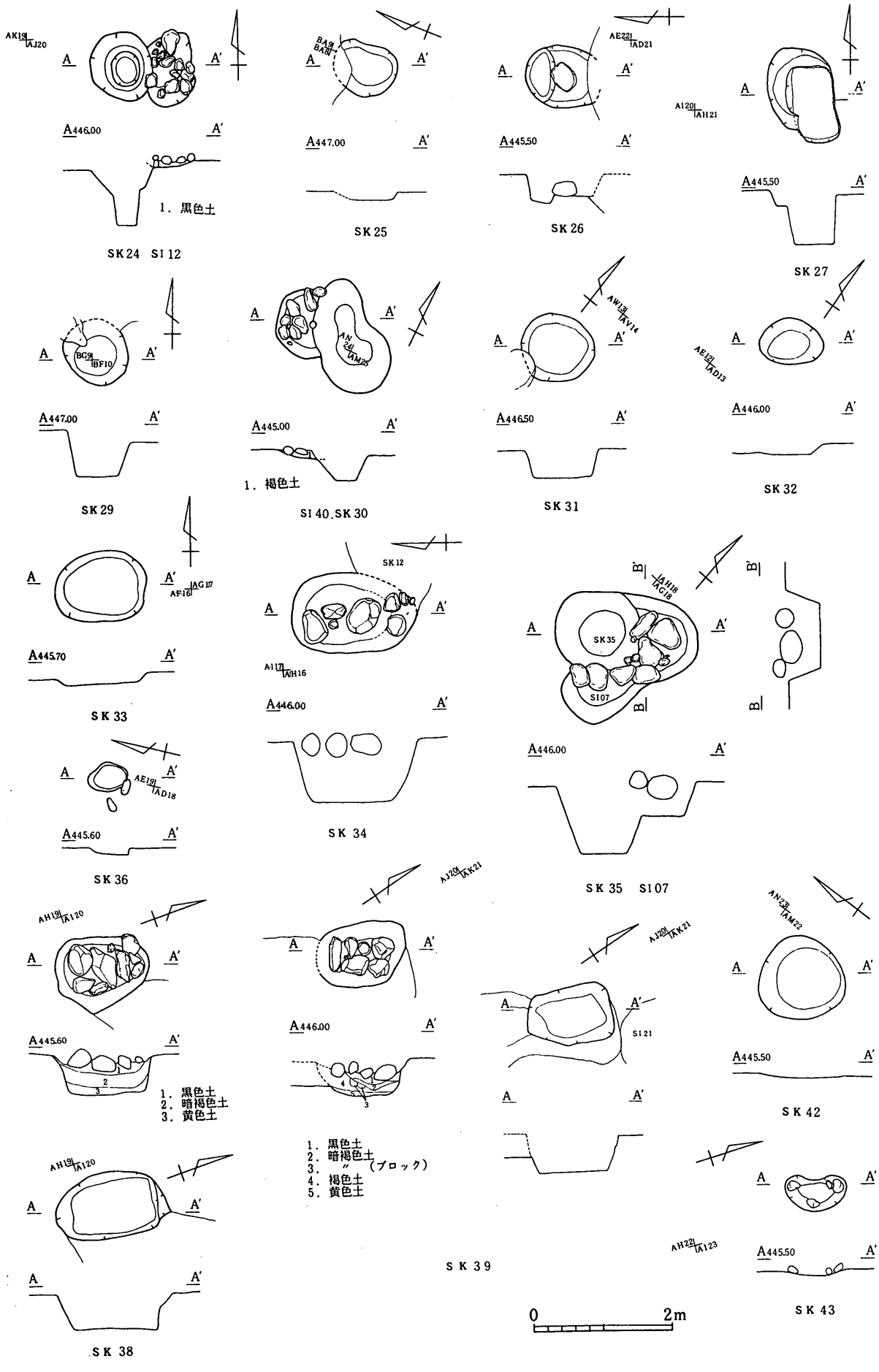
No.	図版	位 置	平面形	規模Ｌ＊Ｗ＊Ｄcm	出土遺物	時代	性格	切合及び備考
1	10	AM-27	不整楕円	95 × 55 × 23			不明	
2	10	AM-26	不整円	63 × 57 × 14			不明	
3	10	AM-27	円	60 × 58 × 21	六道銭	江戸	墓	一般のものより小規模
4	10	AL-25	不整楕円	86 × 62 × 20			不明	
5	10	AL-25	楕円	73 × 53 × 13			不明	
6	10	AK-21	円形	(90)× 90 × 85	江戸		墓	SK-28　形態から判断
7	10	AK-22	円形	68 × 62 × 70	煙管・六道銭	江戸	墓	１８世紀代
8	10	AI-21	円形	106 × 100 × 85	煙管・六道銭	江戸	墓	１８世紀代
9	10	AG-21	円形	73 × 61 × 76			墓	
10	10	AF-19	円形	102 × 98 × 75			墓	
11	10	AE-19	円形	143 × 141 × 48	六道銭	江戸	墓	
12	10	AH-17	楕円形	(168)× (96) × 91	副葬品	江戸	墓	S19,S50　鈴・刀・硯・煙管・六道銭
13	10	AG-17	円形	130 × 122 × 77	六道銭	江戸	墓	
14	10	AF-17	円形	122 × 112 ×131			墓	
15	10	AI-24	円形	131 × 120 × 77			墓	馬墓9 茶柄山古墳群編へ掲載
16	10	AI-23	楕円形	145 × 186 × 65			墓	SK-15
17	10	AF-20	隅丸方形	196 × 140 × 64	天目茶碗		墓	
18	10	AG-17	不整円	110 × 98 × 89	六道銭	江戸	墓	
19	10	AH-17	不整楕円	(152)× 120 × 83			墓	SK-12
20	10	AS-4	不整円	102 × 92 × 36			不明	
21	10	AK-20	不整円	148 × 127 × 30			墓	
22	10	AR-8	不定	不明× 132 × 20	渡来銭	中世	墓	火葬墓
23	10	AJ-19	楕円	(153)× 93 × 30	六道銭	江戸	墓	SI22　底部中央に穴

24	11	AJ-21	円	100 × 89 × 79			墓	SI12
25	11	AY-9	楕円	(92)× 75 × 9	渡来銭	中世	墓	
26	11	AE-21	楕円	108 × 88 × 40	副葬品	江戸	墓	方鏡・六道銭・煙管・茶碗 １８後半
27	11	AI-21	不整方	150 × 90 × 78		江戸	墓	火打金・煙管・六道銭 １８中頃
28	10	AJ-21	不整円	(117)× 101 × 55			墓	SK-6,-40
29	11	BF-10	円	184 × 87 × 65	煙管	江戸	墓	１９前半
30	11	AM-25	瓢形	165 × 75 × 35			不明	SI-40
31	11	AV-13	円	105 × 96 × 42			不明	
32	11	AE-13	不整円	75 × 72 × 15			不明	
33	11	AG-16	楕円	130 × 100 × 15			不明	
34	11	AH-17	楕円	180 × 113 × 85			墓	棺桶上部に人頭大の石
35	11	AG-17	円	124 × 109 × 96	煙管		墓	SI-7 １９前半
36	11	AE-18	不整楕円	58 × 42 × 10			不明	
37	11	AJ-20	不整円	85 × 82 × 34			墓	SK-23
38	11	AI-20	不定	163 × 104 × 50			墓	人頭大の石が並べられている。
39	11	AJ-21	楕円	123 × 85 × 50	煙管・六道銭	江戸	墓	人頭大の石が並べられている。１７後半
40	10	AJ-21	円	(122)× 121 × 32			墓	SK-28
41	欠番							
42	11	AM-22	円	123 × 120 × 7			不明	
43	11	AI-22	不定	88 × 44 × 8			不明	
44	12	AL-23	楕円	112 × 108 × 15			不明	
45	12	AG-23	楕円	130 × 100 × 55			墓	SI-29 棺桶上部に人頭大の石
46	12	AH-24	不整楕円	142 × 110 × 24	煙管・六道銭		墓	１７中頃
47	12	AI-24	楕円	170 × 120 × 57			墓	上部に人頭大の石
48	12	AO-24	不定	135 × 100 × 10			不明	
49	12	AP-24	不整円	119 × 110 × 16			不明	
50	12	AP-25	楕円	60 × 42 × 23			不明	
51	12	AM-24	不定	150 × 137 × 24			墓	
52	12	AJ-30	不定	135 × 56 × 32	渡来銭	中世	墓	火葬墓
53	12	AN-32	隅丸長方	200 × 150 × 68	渡来銭	中世	墓	瓦質火鉢 人頭大の石を並べてある。火葬墓
54	12	AI-32	楕円	165 × 107 × 22			墓	
55	12	AI-33	円	65 × 60 × 20	渡来銭	中世	墓	火葬墓
56	12	AI-34	不整楕円	140 × 115 × 97			墓	
57	12	AF-35	不整円	85 × 70 × 67			墓	
58	12	AF-36	不整円	76 × 75 × 63			墓	
59	12	AF-36	円	90 × 85 × 80			墓	
60	12	AH-38	楕円	102 × 81 × 77			墓	SI-37 棺桶の上部に人頭大が置かれている。

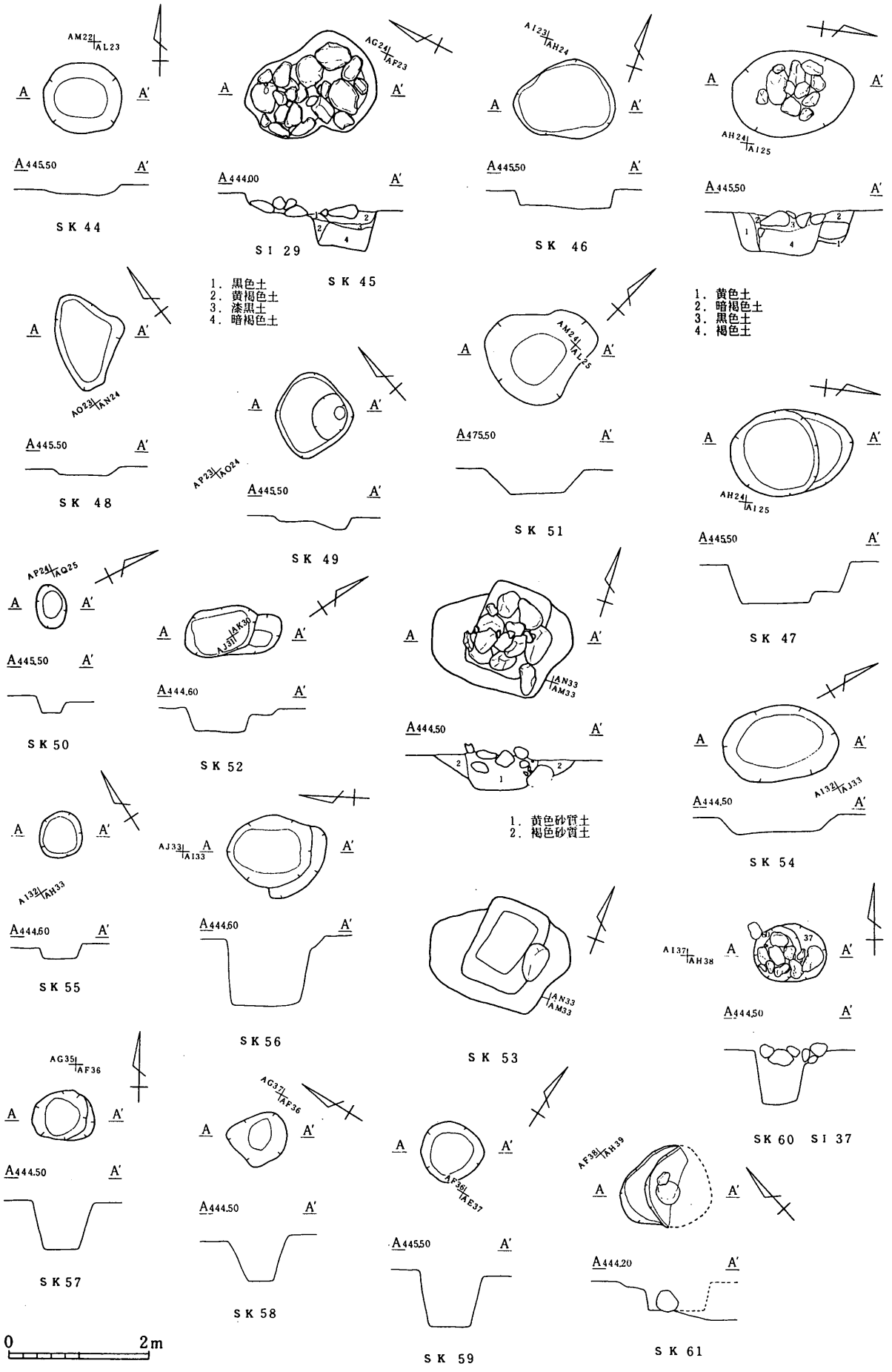
61	12	AH-39	不定	(130)× 115 × 37			墓	
62	13	AB-19	楕円	154 × 147 × 64			墓	
63	13	AG-22	不整円	196 × 153 × 48			墓	火葬墓　人頭大の石が並べられている。
64	14	BG-46	不定	540 × 410 × 40	土師器(甕)		不明	
65	14	BI-47	不定	330 × 210 × 60			不明	南側の楕円形の穴は墓の可能性も
66	13	BN-46	不定	342 × 108 × 36	土師器		不明	
67	14	AD-18	楕円	162 × 132 × 66		縄文	落穴	SB-1　住居址の貼床の下で確認、中央に穴
68	13	AF-22	不定	130 × 62 × 11			不明	攪乱
69	15	BR-4	不定	1024× 344 × 90			不明	攪乱の可能性も
70	13	AE-28	楕円	120 × 84 × 26		中世	墓	火葬墓　人頭大の石が並べられている。
71	13	AD-26	隅丸方	120 × 80 × 24		中世	墓	火葬墓　覆土中に礫が混入
72	13	BY-26	円	104 × 100 × 20		中世	墓	火葬墓　人頭大の石が並べられている。
73	14	AA-30	不整楕円	565 ×(220) × 78		古墳	不明	２号墳の盛土の下で確認
74	13	BP-21	不整円	186 × 184 × 23			不明	
75		AL-30	不整楕円	237 × 109 × 36			不明	
76	15	AG-19	不整楕円	182 × 115 × 25			不明	摺鉢状の掘込み
77	13	AF-24	方	97 × 82 × 35	六道銭	江戸	墓	上部に人頭大の石が置かれている。平棺
78	13	AI-25	不整楕円	105 × 85 × 36	煙管・六道銭	江戸	墓	覆土上部に礫が混入
79	15	BH-11	円	(121)× 100 × 76			墓	３号墳前方部　南半分削平
80	15	BK-12	不定	139 × 84 × 43			不明	覆土中に拳大の礫が混入
81	15	BL-13	楕円	170 × 125 × 16			不明	西壁に礫まとまる。
82	15	BK-00	円	119 × 110 × 36			墓	形態から判断
83	15	BE-44	不整楕円	371 ×(284) × 44			不明	
84	16	BE-46	不整円	346 × 310 × 33			不明	
85	16	BD-48	楕円	(290)× 221 × 41			不明	
86	16	AG-28	楕円	208 ×(170) × 95			墓	形態から判断
87	16	AG-29	楕円	(194)× 156 × 82			墓	形態から判断
88	16	BJ-49	不定	318 × 270 × 63			不明	覆土中に礫が混入



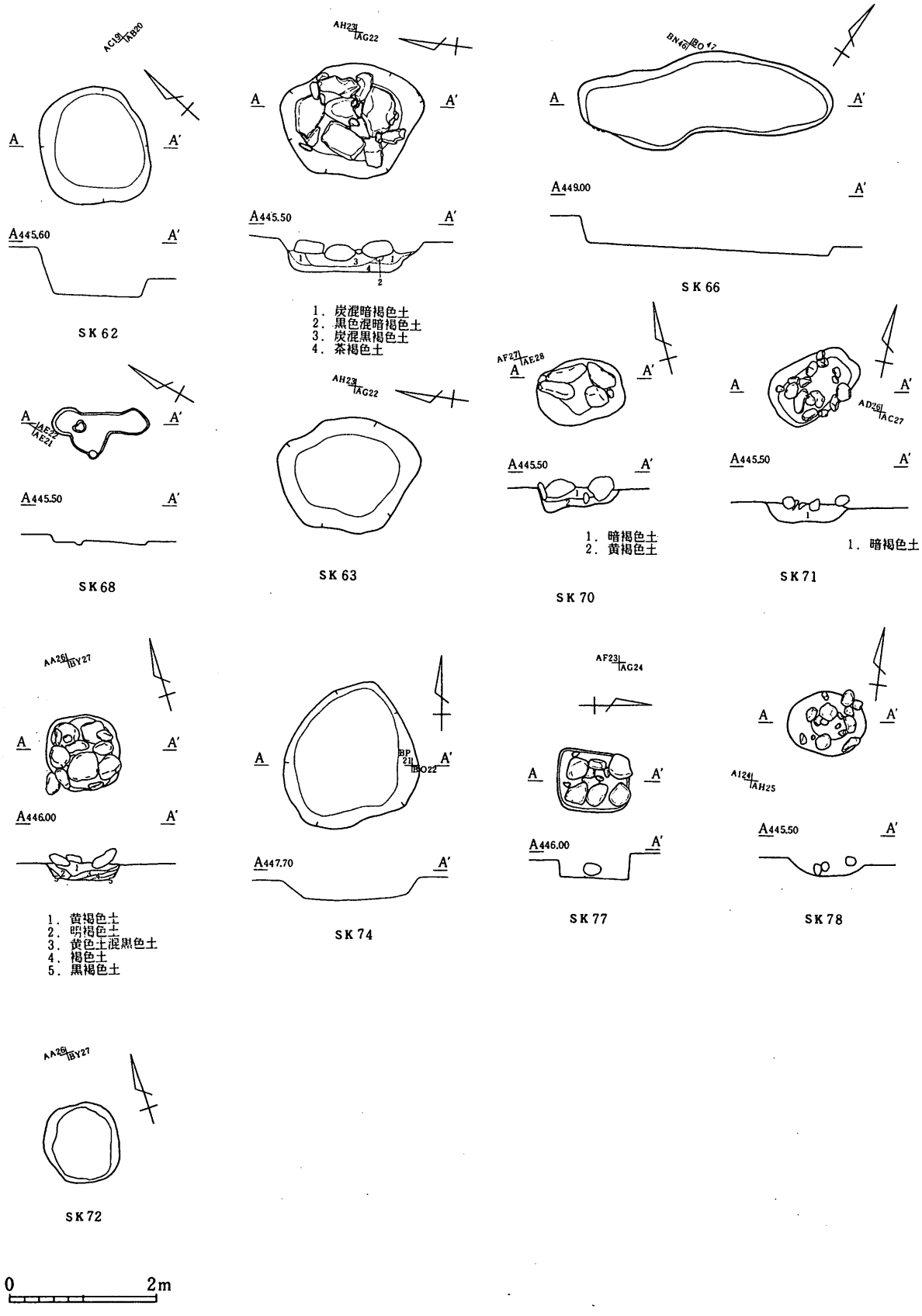
挿図10　SK01～23・37



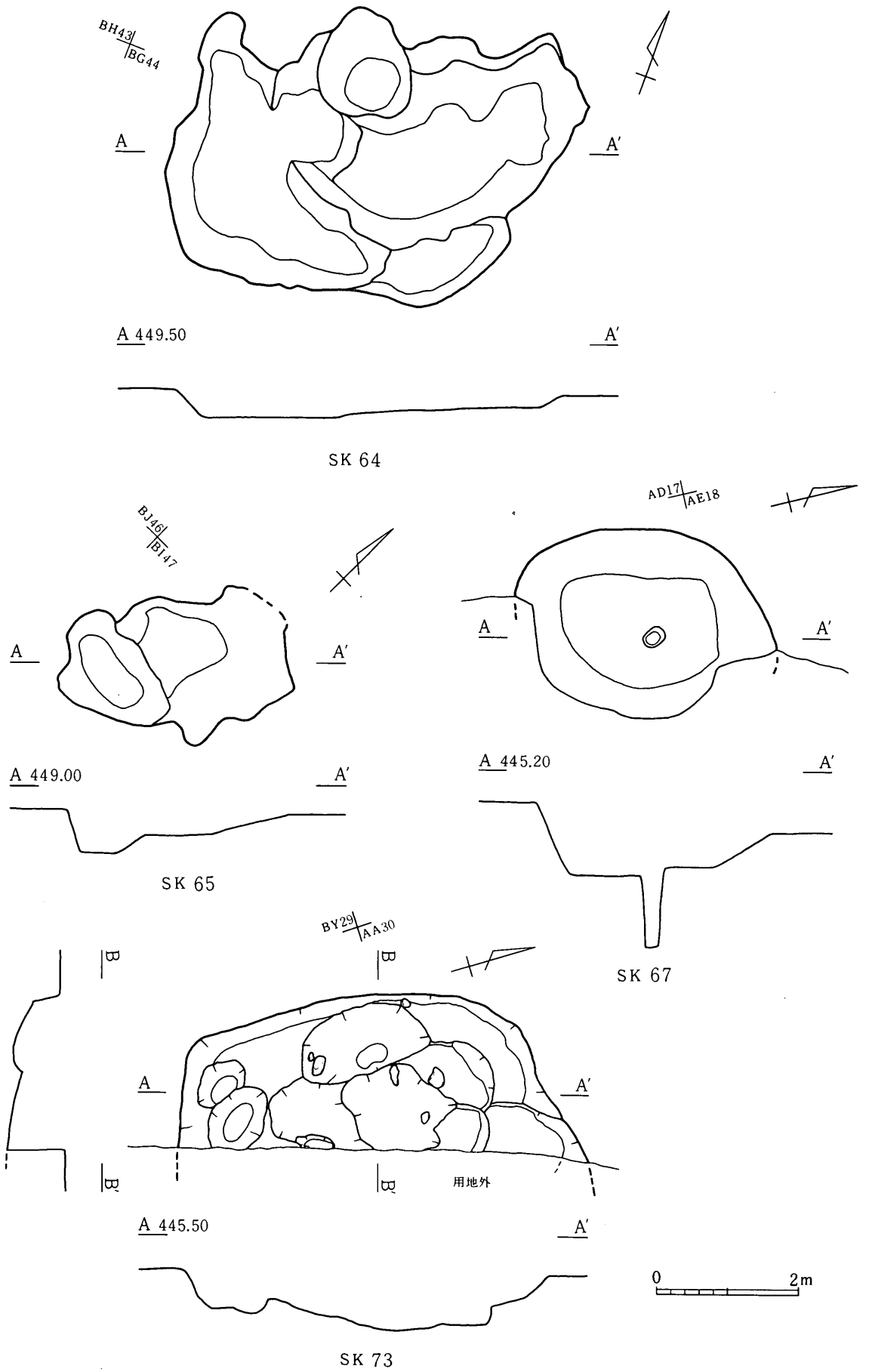
挿図11 SK24・25・26・27・29～39・42・43 SI7・12・40



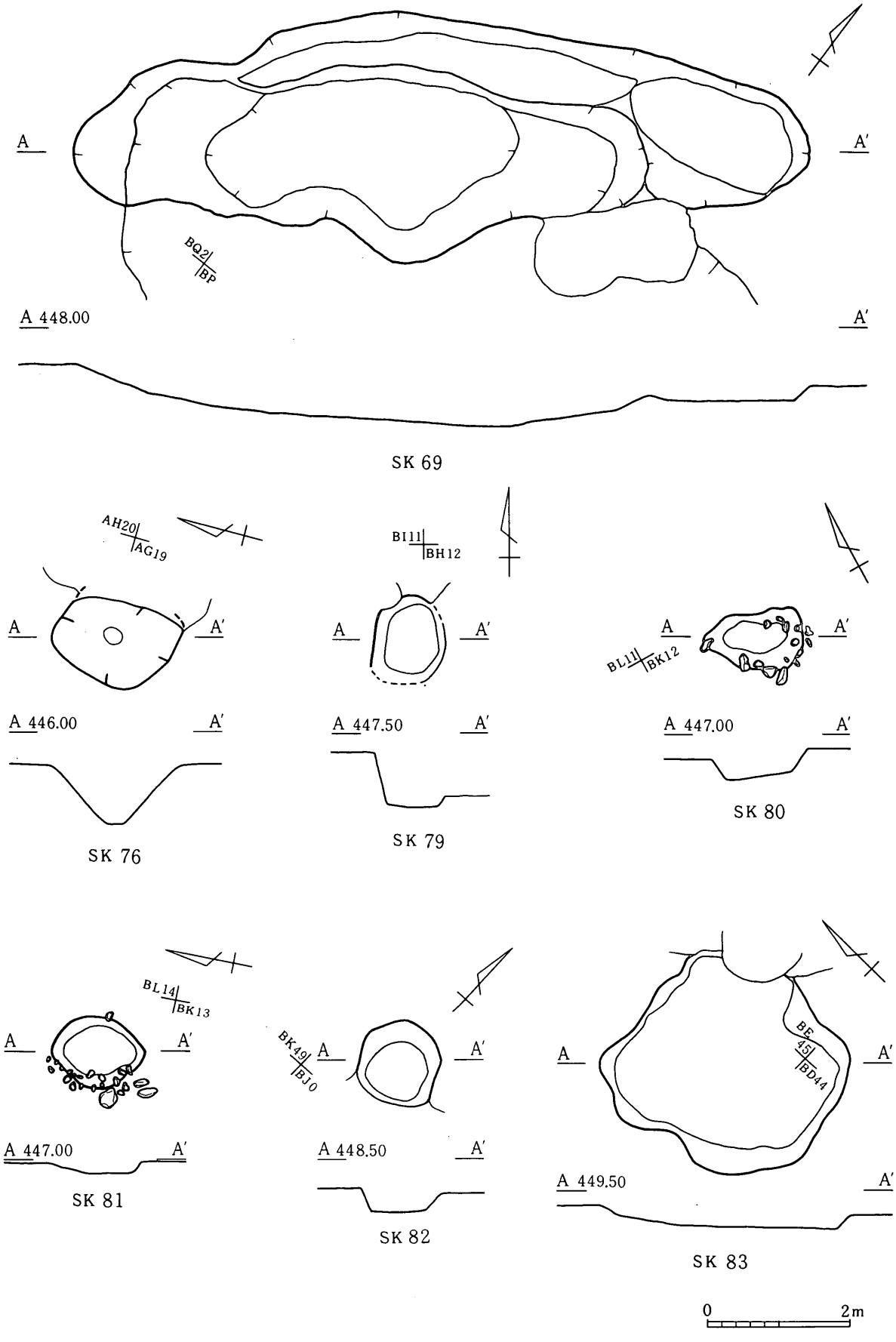
挿図12　SK44～61　SI29・37



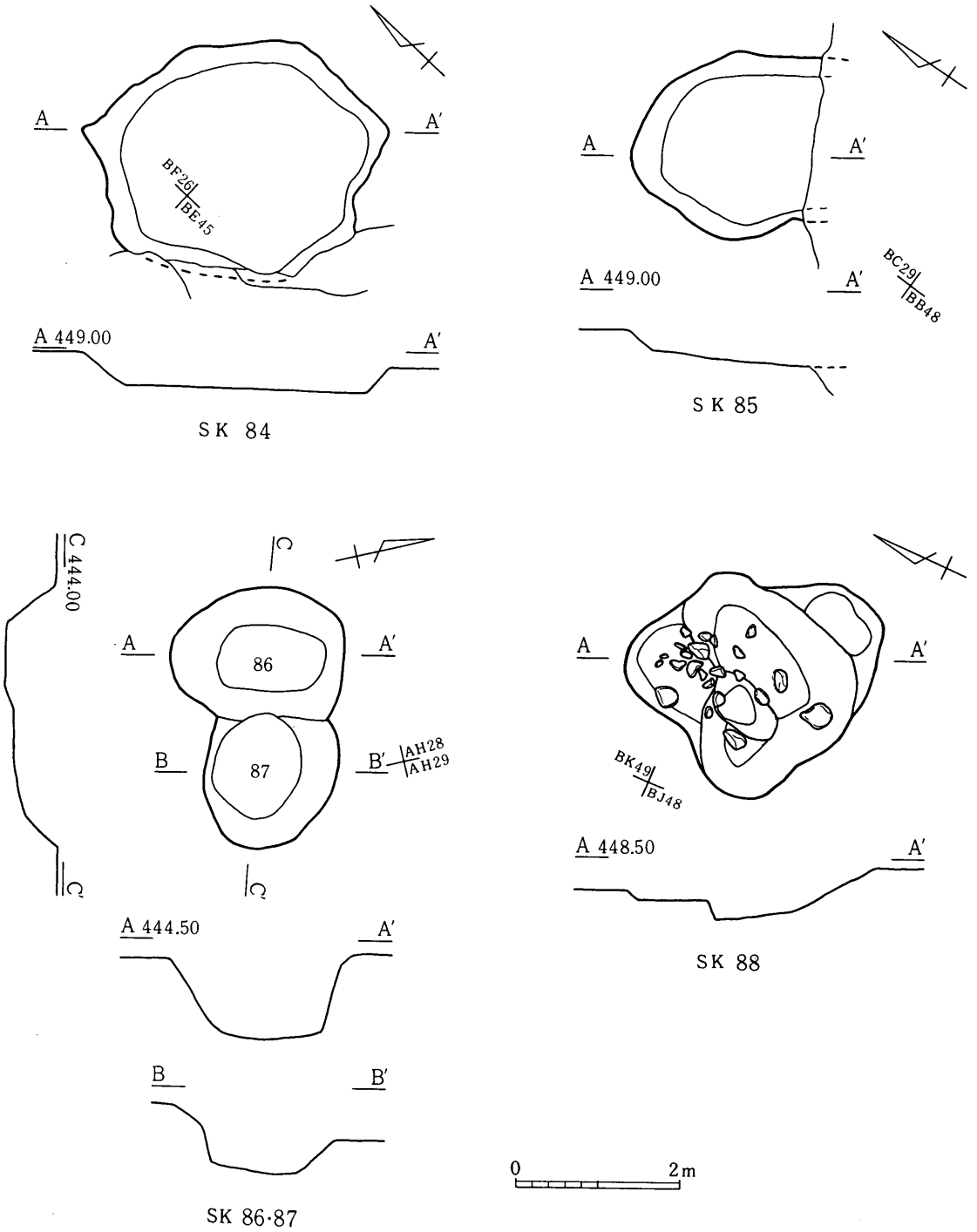
挿図13　SK62・63・66・68・70・71・72・74・77・78



挿図14　SK64・65・67・73



挿図15　SK69・76・79・80・81・82・83



挿図16　SK84・85・86・87・88

ＵＮＪ地籍の土坑について

ＪＲ飯田線の軌道を挟んで所在するこの地籍でも、茶柄山地籍の状況とほとんど同じある。確認できたＳＫは回葬をやり残した近世の墓がほとんどであった。ＪＲの北西側ではその傾向が著しく、墓穴が列をなして参道をはさむ格好で、北東から南西へ幾筋も並んでいた。

それに対し、ＪＲの南東側の台地上では、調査時点まで墓地の残っている箇所は、やはり１００年ほど前の墓穴が切り合って確認できたが、それ以外の場所では時期・性格が不明のＳＫが目立ち、近世の墓穴は確認できなかった。

ＳＫ観察表　ＵＮＪ－Ａ（上の城）

No.	図版	位 置	平面形	規模Ｌ＊Ｗ＊Ｄcm	出土遺物	時代	性格	切合及び備考
1		BA-15	不整楕円形	332 × 140 × 80	鉄鏃	古墳	土坑	土壙墓の可能性が茶柄山古墳群編へ掲載
2	17	AR-12	不整円形	222 × 172 × 32			不明	
3	17	AV-09	不整楕円形	203 × 126 × 33			墓	覆土に人頭大の礫が入っていた。
4		AU-10	不整楕円形	288 × 151 × 60	須恵器	古墳	土坑	大甕一個体が出土、茶柄山古墳群編へ掲載
5	17	BB-07	不整円形	133 × 105 × 27			不明	
6	17	BF-15	不定形	394 ×(280)× 21			不明	SK-8
7	17	BF-16	不定形	210 × 140 × 14			不明	SK-6.8
8	17	BF-15	不整楕円形	158 ×(130)× 19			不明	SK-7
9	17	AW-48	方形	290 × 255 × 42			不明	住居址の可能性も
10	17	AU-02	不定形	1030× 819 × 43			不明	暗褐色覆土が広範囲に広がる。攪乱の可能性も
11	17	AN-00	不定形	80 × (80)× 26			不明	SK-12
12	17	AN-00	不整円形	82 × 71 × 31			不明	SK-11.13
13	17	AM-00	不整円形	133 × 122 × 53			不明	SK-12
14	18	AM-01	円形	105 × 90 × 33			墓	
15	18	AM-01	円形	105 ×(100)× 50			墓	SI-24
16	18	AA-13	方形	220 × 158 × 13			不明	ごく浅いが住居址の可能性も
17	18	BD-14	不定形	235 × 125 × 33			不明	
18	18	BE-17	不定形	190 ×(150)× 43			不明	SK-19
19	18	BE-18	隅丸方形	175 × 167 × 27			不明	SK-18
20	18	AH-01	円形	120 × 115 × 77		江戸	墓	東半分は削平される
21	18	AG-00	円形	113 × 100 × 117		江戸	墓	
22	18	AS-39	不整楕円形	238 × 114 × 54			不明	
23	18	AH-35	隅丸方形	140 × 102 × 28		中世	墓	覆土中に拳大の石、集石墓とみられる
24	18	BU-34	不整楕円形	394 × 170 × 29			不明	SI-02,05
25	18	AS-04	不整楕円形	115 × (80)× 13			不明	

26	19	AE-26	不整楕円形	240 ×(100)× 69			墓	切合う3つの穴をひとつとして捉えた。
{〃	中	AE-27	不定形	(340)× 330 × 33 }				中央のものが一番古い。
{〃	東	AE-28	楕円形	270 × 180 × 76 }				
{〃	西	AF-26	不整楕円形	290 × 190 × 109 }				上部に掘り込みがあった。
27	18	AR-03	不定形	98 × 95 × 19			不明	攪乱か
28	19	AQ-04	不定形	113 × (75)× 66	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-31 墓地に隣接する場所に14基
29	19	AQ-04	不定形	94 × 82 × 110		江戸	墓	SK-31
30	19	AQ-03	不整楕円形	(100)× 78 × 67	煙管・(鋏)	江戸	墓	SK-35,41
31	19	AQ-04	不定形	110 × (50)× 60		江戸	墓	SK-28,29
32	19	AQ-02	不整円形	100 × (82)× 110	煙管	江戸	墓	SK-40 GP
33	19	AQ-04	不整楕円形	130 × 98 × 105		江戸	墓	SK-42(36)
34	19	AQ-03	不定形	(88)× (64)× 25		江戸	墓	SK-36,42, 35 GP
35	19	AQ-03	不整楕円形	65 × (40)× 48		江戸	墓	SK-30,36,34
36	19	AQ-03	不定形	(95)× 80 × 50		江戸	墓	SK-33,34, 35,42
37	19	AQ-04	不整楕円形	90 × 80 × 67	六道銭	江戸	墓	SK-46
38	19	AR-04	不整楕円形	127 × 108 × 114		江戸	墓	形態から墓と判断
39	18	AP-03	不整楕円形	(233)×(110)× 37	六道銭・煙管	江戸	墓	北端の楕円形のものが墓の本体
40	19	AQ-02	不定形	100 × (40)× 45		江戸	墓	SK-32 GP
41	19	AQ-03	不定形	(85)× (32)× 19		江戸	墓	SK-30 GP
42	19	AQ-03	不整楕円形	85 × (60)×不明		江戸	墓	SK-33,34,36
43	19	AP-04	円形	50 × 48 × 28			不明	
44	29	AP-04	(円形)	(25)× (25)× (20)	蔵骨器(茶入)	中世	墓	試掘トレンチで確認。茶入の上に石がのる。
45		AP-04		100 × 83 × 7			不明	遺構として確認できず
46	19	AP-05	不定形	115 × (95)× 20		江戸	墓	SK-37
47	19	AO-02	不整楕円形	185 ×(135)× 12			不明	東半分削平され、壁なし
48	20	AO-02	不定形	132 × 110 × 10			不明	攪乱か
49	20	AO-03	円形	114 × 95 × 19			不明	
50	20	AL-35	不明	不明× 140 × 82		中世	墓	区外へ広がる。覆土中に拳大の石。集石墓
51		BF-01	卵形	97 × (85)× 20	馬の歯	古墳	馬墓	SK-66 茶柄山古墳群編へ掲載
52	20	BF-08	不明	(122)×(72)× 23	六道銭・煙管	江戸	墓	方形の可能性も
53	21	BD-00	隅丸方形	58 × 55 × 12			不明	
54	21	BD-01	不定形	134 ×(100)× 12			不明	SD-15
55	21	BI-01	楕円形	96 × 56 × 43			不明	
56		欠番						
57	20	BH-01	円形	87 × (80)× 51			不明	SK-221
58	20	BI-01	不整方形	100 × 69 × 48	宋銭		不明	SK-221
59	20	BF-49	楕円形	105 × 86 × 33	宋銭	中世	墓	SK-60人頭大の石が意図的に並ぶ。集石墓

60	20	BF-49	不整楕円形	(100)× 95 × 14			墓	
61		欠番						
62		欠番						
63		欠番						
64		欠番						
65	20	BF-01	円形	75 × 70 × 40			不明	SK-74 上部に拳大の石
66	20	BF-01	不定形	130 × 98 × 30	宋銭		不明	SK-51
67					宋銭		不明	遺構として確認できず
68	20	BH-03	不定形	146 × 84 × 66	六道銭・煙管	江戸	墓	SD-21
69	20	BF-00	楕円形	120 × (90)× 8			不明	上部に火葬墓
70		欠番						
71		欠番						
72	20	BE-49	方形	100 × 83 × 52	六道銭・煙管	江戸	墓	
73	20	BG-04	不定形	186 × 115 × 30			不明	SK-76
74	20	BF-01	不整円形	(100)× 96 × 42			不明	SK-65
75		欠番						
76	20	BF-04	楕円形	88 × 56 × 45	煙管・宋銭		墓	SK-73
77	20	BH-06	不整長方形	145 × 80 × 40	六道銭・煙管	江戸	墓	平棺
78	22	BK-00	円形	98 × 95 × 115		江戸	墓	SK-79 形態から墓と判断
79	22	BK-00	楕円形	(204)× 122 × 66			不明	SK-78
80	22	BK-00	長方形	(137)× 80 × 55		江戸	墓	西側は削平されている。平棺
81	22	BK-01	長方形	110 × 70 × 72		江戸	墓	平棺
82	22	BG-09	円形	116 × 112 × 82	煙管	江戸	墓	
83	22	BE-48	円形	76 × 75 × 59	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-228
84	22	BJ-00	隅丸長方形	111 × 66 × 46	六道銭	江戸	墓	平棺
85		欠番						
86	21	BG-03	隅丸長方形	115 × 76 × 36	宋銭		不明	
87	22	BF-48	円形	(142)× (124)× 105		江戸	墓	SK-88
88	22	BF-48	円形	(130)× (112)× 10	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-87
89	22	BE-01	長方形	113 × 81 × 13				
90	22	BE-49	長方形	108 × 76 × 54	六道銭・煙管	江戸	墓	平棺
91	21	BG-02	楕円形	62 × 48 × 15			不明	
92		欠番						
93	22	BI-43	円形	107 × 99 × 58		江戸	墓	
94	22	BJ-43	楕円形	(145)× 113 × 63		江戸	墓	SK-153.117
95	22	BK-47	円形	116 × 108 × 36		江戸	墓	
96		欠番						

97	22	BG-46	円形	107 × 101 × 100	六道銭・煙管	江戸	墓	
98	23	BH-47	円形	(130)× 119 × 96	煙管	江戸	墓	SK-109
99	23	BL-44	円形	123 × 103 × 103	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-111
100	23	BK-44	円形	124 × 110 × 120	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-111
101	23	BM-49	円形	111 × 92 × 60	煙管	江戸	墓	SK-110
102	23	BH-44	円形	86 × 84 × 30	宋銭	中世	墓	
103					宋銭			遺構として確認できず
104	23	BM-48	楕円形	(140)× 85 × 15	煙管	江戸	墓	
105	23	BH-41	円形	136 × 127 × 128	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-192.193
106	23	BJ-42	隅丸長方形	110 × 83 × 56	六道銭	江戸	墓	
107	23	BG-47	隅丸方形	88 × 58 × 33	煙管	江戸	墓	SK-116
108	23	BM-49	円形	(104)× 93 × 56	煙管	江戸	墓	SK-115
109	23	BH-48	円形	122 × 116 × 104	煙管	江戸	墓	SK-98
110	23	BM-49	隅丸方形	60 × 48 × 10			不明	SK-101
111	23	BK-44	不定形	(108)× (70)× 14			不明	SK-99.100
112	22	BK-44	楕円形	(96)× 76 × 52	煙管		不明	SK-117
113	23	BK-45	不整楕円形	95 × 76 × 17	六道銭・煙管	江戸	墓	
114		欠番						
115	23	BM-49	円形	(85)× 85 × 46	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-108
116	23	BG-47	円形	113 × 112 × 147	六道銭	江戸	墓	SK-107
117	22	BJ-44	円形	135 × 110 × 108		江戸	墓	SK-153.94.112
118	23	BL-49	円形	95 × 84 × 61	六道銭・煙管	江戸	墓	
119	24	BG-39	不整楕円形	98 × (87)× 90	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-260.266
120	23	BF-46	円形	124 × 100 × 66			墓	SK-233
121	24	BK-46	円形	120 × 117 × 68	六道銭・煙管	江戸	墓	
122	24	BK-43	円形	(120)× 120 × 126	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-186
123	24	BA-48	不整円形	132 × 122 × 32	宋銭	中世	墓	
124	24	BA-46	隅丸長方形	69 × 45 × 54			墓	形状から平棺
125	24	BH-48	円形	(117)× 113 × 66	煙管	江戸	墓	SK-145
126	24	BM-49	不整円形	71 × 68 × 38	六道銭	江戸	墓	かなり小規模
127	24	BJ-48	円形	113 × 107 × 104	六道銭	江戸	墓	SK-141
128	24	BH-47	円形	130 × 125 × 80	六道銭・煙管	江戸	墓	
129	24	BB-46	円形	91 × 90 × 15	六道銭	江戸	墓	上部削平のため浅い
130	24	BA-47	不整楕円形	109 × 71 × 50			墓	
131	24	BH-40	円形	(125)× 125 × 115	煙管	江戸	墓	SK-185.266
132	24	BJ-47	不明	不明×不明 × 62			墓	SK-139
133	25	BF-41	不明	不明×不明 × 96			墓	SK-211.246.247

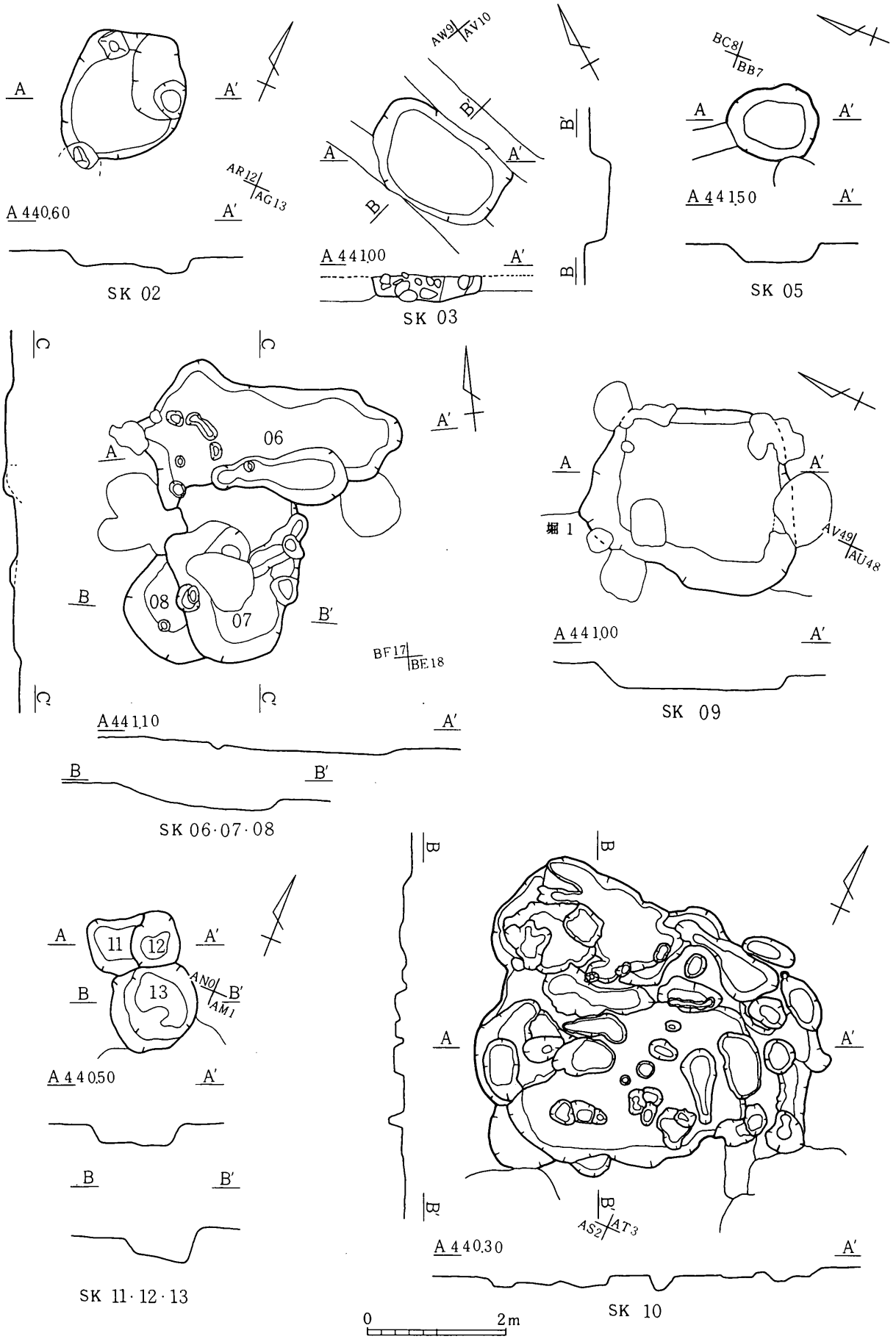
134	25	BH-39	不整楕円形	140 × 120 × 108	煙管	江戸	墓	
135					宋銭		不明	遺構として確認できず
136					六道銭		不明	遺構として確認できず
137	24	BI-48	不整楕円形	102 × (90)× 63			不明	SK-145
138	25	BI-35	不整楕円形	(195)× 109 × 21			不明	SK-168
139	24	BJ-47	不明	(81)× 65 × 89			不明	SK-152.141
140	25	BI-44	不整円形	140 × 120 × 80			不明	
141	24	BJ-47	不定形	(144)× 115 × 66			不明	SK-127.139
142	25	BI-43	不整楕円形	125 × 90 × 80	六道銭	明治	墓	
143	25	BH-46	不整円形	94 × 86 × 35	六道銭・煙管	江戸	墓	
144	25	BH-45	円形	126 × 120 × 98	宋銭・煙管	江戸	墓	
145	24	BI-48	不整円形	103 × 93 × 81	煙管	江戸	墓	SK-125.137
146		欠番						
147	25	BI-39	不整楕円形	146 × 101 × 32	人頭大の石	中世	墓	
148	25	BJ-39	不整円形	108 × 105 × 30	宋銭	中世	墓	
149	25	BH-42	瓢形	257 × 120 × 33	六道銭・煙管	江戸	墓	2基
150					宋銭			遺構として確認できず
151	25	BK-38	不整円形	135 × 120 × 16			不明	SK-166
152	24	BI-47	不整円形	122 × 104 × 78	煙管	江戸	墓	SK-139.132
153	22	BJ-43	円形	112 × 98 × 114	煙管	江戸	墓	SK-94.117
154	26	BH-43	不整楕円形	154 × 121 × 25	六道銭	江戸	不明	
155	26	BG-43	不整楕円形	94 × 72 × 27			不明	
156	26	BI-41	不明	不明× 120 ×不明			不明	SK-194
157	26	BJ-45	不整円形	118 ×(107)× 84	六道銭・煙管	江戸	墓	
158	26	BK-45	楕円形	(120)× 105 × 65	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-170
159	26	BG-44	不整楕円形	143 × 110 × 31			不明	SK-160
160	26	BF-44	不整楕円形	157 × 123 × 30	宋銭	中世	墓	SK-159
161	26	BE-45	円形	116 × 115 × 46	宋銭	中世	墓	
162	23	BH-41	不整楕円形	101 × 89 × 51	宋銭	中世	墓	SK-193
163	27	BG-41	不整円形	110 × 106 × 105	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-201.261
164	26	BH-45	不整楕円形	115 × 79 × 75			不明	SK-252
165	26	BH-38	不整円形	133 × 126 × 105	六道銭	江戸	墓	
166	25	BK-38	不整楕円形	120 × 90 × 27			不明	SK-151.187
167	27	BI-38	不整楕円形	122 × 91 × 26	六道銭	江戸	墓	
168	25	BI-35	不整円形	107 × 87 × 42	煙管	江戸	墓	SK-138
169	27	BJ-45	円形	116 × 115 × 55	六道銭	江戸	墓	
170	26	BK-44	不整円形	100 × 90 × 134	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-158

171		欠番						
172	27	BC-39	不整楕円形	123 × 95 × 18	六道銭	江戸	墓	SK-218
173	27	BE-47	不整楕円形	115 × 77 × 65	六道銭	江戸	墓	SK-174.205
174	27	BE-47	不整楕円形	(153)×(125)× 50	六道銭	江戸	墓	SK-173.182
175	27	BH-38	円形	108 × 95 × 20	六道銭	江戸	墓	
176	27	BI-38	不整円形	58 × 53 × 31	六道銭	江戸	墓	
177	28	BG-42	不整円形	136 × 130 × 76	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-178.195
178	28	BG-42	不整円形	133 × 124 × 218	宋銭・煙管	江戸	墓	SK-239.238.177
179	27	BF-43	隅丸長方形	133 × 114 × 33	宋銭	中世	墓	SK-195　火葬墓
180	25	BJ-38	不整円形	97 × 94 × 87	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-187
181	27	BE-46	不整円形	104 × 86 × 30	宋銭	中世	墓	火葬墓
182	27	BE-47	不整円形	100 × 90 × 96	煙管	江戸	墓	SK-174
183	27	BG-48	不整楕円形	(182)× 146 × 71			不明	SK-199.200
184	27	BG-41	不整円形	114 × 99 × 126	煙管	江戸	墓	SK-261
185	24	BH-40	不明	(94)× (85)× 32		不明	不明	SK-131.266
186	24	BJ-43	不整楕円形	114 × 95 × 112	煙管	江戸	墓	SK-122
187	25	BJ-38	不整楕円形	160 × 116 × 41	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-166.180
188	28	BJ-39	不整円形	89 × 83 × 123	煙管	江戸	墓	
189	28	BK-40	不整円形	95 × 90 × 111	煙管	江戸	墓	SK-209
190	26	BI-40	円形	154 × 105 ×120			墓	SK-194を切る
191	24	BH-39	円形	146 × 122 × 23	宋銭	中世	墓	比較的浅い、SK-266
192	23	BH-41	円形	(123)× 97 × 43			不明	SK-105に切られ.193を切る
193	23	BH-41	楕円形	(172)× (95) × 26			不明	SK-105.162.192に切られる
194	26	BI-40	楕円形	230 × 98 × 40			不明	SK-190に切られる.156と重なる
195	28	BF-42	方形	158 × 125 ×106	六道銭	江戸	墓	壁の中間に稜があるSK-177に切られる
196	27	BF-47	不定形	106 × (75) × 28			不明	SK-200に切られる
197	28	BA-40	円形	107 × 107 × 43			不明	底が傾斜している
198		欠番						
199	27	BH-48	円形	(130)× 104 × 29			不明	SK-183に切られる
200	27	BF-48	円形	82 × 79 × 90			墓	SK-183.196を切る
201	27	BG-40	円形	(107)× 103 × 59	六道銭	江戸	墓	SK-163.208を切る
202				× ×	六道銭			遺構確認できず
203				× ×	六道銭			遺構確認できず
204	28	BL-39	隅丸長方形	115 × 79 × 41			墓	平棺
205	27	BE-47	不定形	(72)× 32 × 8			不明	SK-173,174攪乱か
206	28	BG-46	円形	114 × 100 × 20	六道銭	江戸	墓	比較的浅いSK-207を切る
207	28	BF-45	円形	(100)× 80 × 20			墓	SK-206と同形態

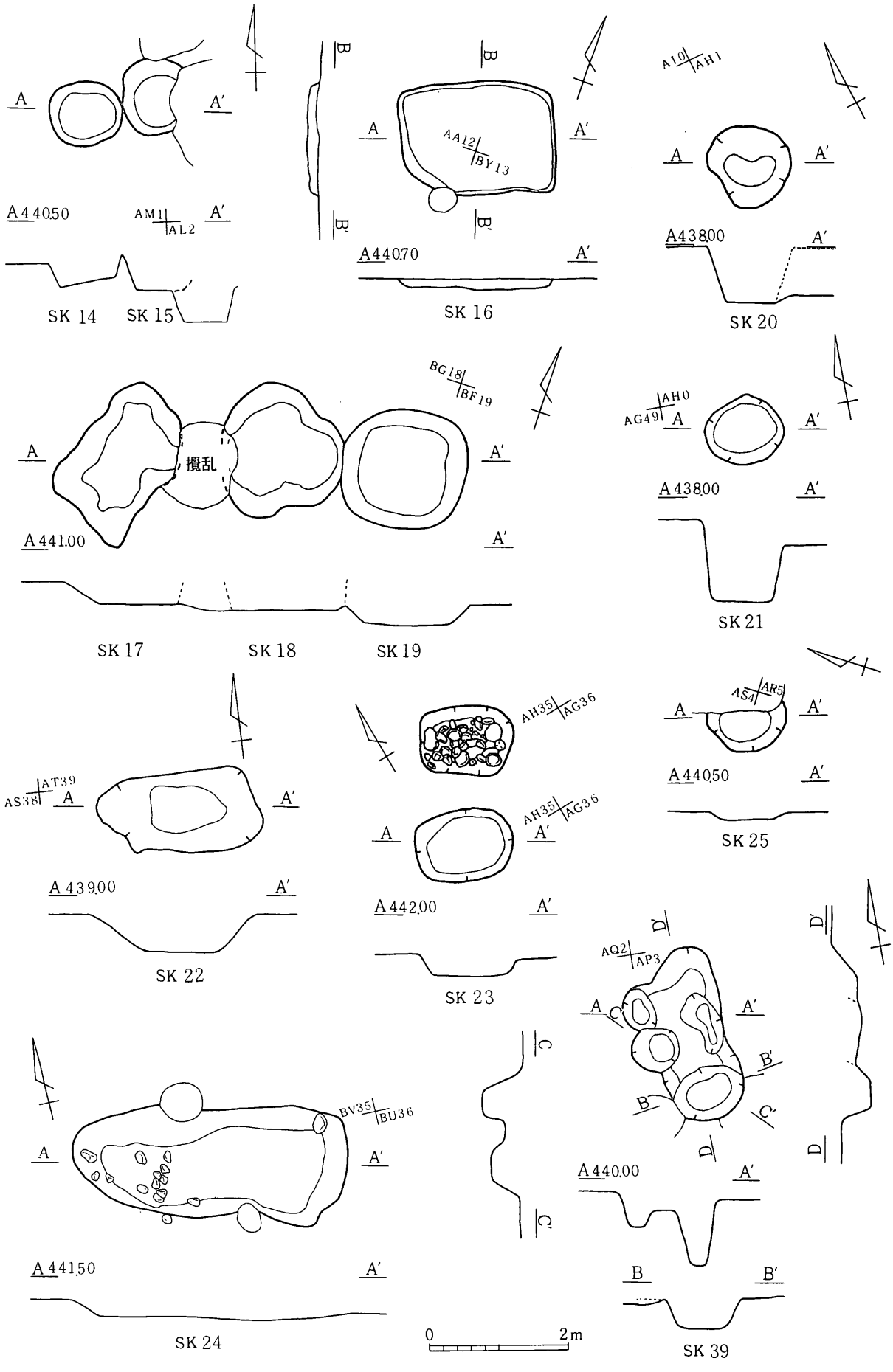
208	27	BG-40	不明	(81)×不明　×不明	宋銭	中世	墓	SK-201攪乱　明確に確認できず
209	28	BK-41	不定形	115 × 110 × 69			不明	壁の中間に稜がある、SK-189
210	25	BF-41	円形	104 × (58) × 62			不明	SK-247に切られる。明確に確認できず
211	25	BE-41	円形	130 ×(100) ×100	煙管	江戸	墓	SK-133を切る
212	25	BF-41	隅丸長方形	91 × 74 × 57			墓	SK-247　形状から平棺
213	28	BC-46	楕円形	162 × 111 × 56			不明	
214	21	BA-46	不整楕円形	141 × 109 × 51	宋銭	中世	墓	覆土中に礫が並ぶ。底部北側に穴2つ
215	28	BB-40	方形	170 × 127 × 17			不明	浅い、攪乱か
216	29	BB-40	楕円形	122 × 70 × 18			不明	壁ほとんど残っていない
217	27	BC-40	円形	124 × 121 × 61	煙管	江戸	墓	SK-218を切る
218	27	BC-39	円形	87 × (50) × 38	六道銭・煙管	江戸	墓	浅い。SK-172を切る、-217に切られる
219	28	BK-02	方形	143 × 60 × 64			墓	形態から平棺
220	30	BE-46	円形	75 × 60 × 37			墓	比較的小さい。SK-234.248を切る
221	20	BI-01	円形	126 × 116 ×126			墓	SK-57.58を切る。
222		欠番						
223		欠番						
224	28	BJ-00	円形	98 × 78 × 21			不明	攪乱か
225	30	BJ-01	不定形	112 × 70 × 22			不明	攪乱か
226		欠番						
227		欠番						
228	22	BD-48	円形	90 × 73 × 51			墓	SK-83
229	30	BN-49	円形	77 × 57 × 67			墓	小型
230	30	BG-44	円形	65 × 56 × 23			不明	浅く、小さい
231	30	BG-43	円形	68 × 66 × 22			不明	浅く、小さい。壁の中間に稜
232	30	BE-43	楕円形	180 × 96 × 22			不明	底部に段あり
233	23	BF-46	楕円形	(85)× 67 × 15			不明	SK-120に切られる。攪乱か
234	30	BE-46	楕円形	(105)× 80 × 9			不明	SK-220.248に切られる。攪乱か
235	30	BB-46	楕円形	(96)× 67 × 48			不明	SK-236に切られる。
236	30	BB-46	円形	84 × 66 × 67			墓	SK-235.237を切る。
237	30	BB-45	隅丸長方形	131 × 74 × 50			墓	平棺、SK-236に切られる。
238	28	BG-42	円形	(137)× 106 × 48			墓	SK-178.239に切られる。
239	28	BG-42	円形	(114)× 95 × 54			墓	SK-178に切られ、-238を切る。
240	30	BF-43	円形	96 × 85 × 41			墓	SK-259を切る。
241	29	BB-39	円形	88 × 78 × 13			不明	浅い。人頭大の礫が入る。
242	30	BA-38	円形	56 × 50 × 39			不明	SK-255を切る。
243	30	BM-37	楕円形	61 × 52 × 13			不明	攪乱か
244	30	BA-36	楕円形	132 × 71 × 90			不明	底部傾斜している。

245	29	BC-35	円形	50 × 48 × 33			不明	地山削平のため、東西の壁の高さ異なる
246	25	BE-41	円形	158 × 117 × 92			墓	SK-133
247	25	BF-41	方形	(140)×(132) × 74			墓	SK-133.210.212
248	30	BD-46	隅丸長方形	(116)× 94 × 27			墓	平棺。SK-220に切られる。-234を切る。
249	30	BD-45	隅丸長方形	131 × 94 × 59			墓	平棺。
250	30	BD-47	楕円形	124 × 101 × 26			不明	北側の壁削平されている。
251	29	BN-46	不定形	66 × 42 × 11			不明	攪乱か
252	26	BG-45	円形	66 × (59) × 38			不明	SK-164に切られる。
253	29	BA-44	円形	70 × 60 × 36			墓	上部に礫が並ぶ
254	30	BH-38	円形	85 × 82 × 24			不明	攪乱か
255	30	BA-37	楕円形	(138)× (52) × 30			不明	SK-242に切られ、-256を切る。底部傾斜する。
256	30	BA-37	楕円形	(70)× 40 × 12			不明	SK-255に切られる。攪乱か
257	31	BF-03	方形	122 × 83 × 26			不明	比較的浅い
258		欠番						
259	30	BE-43	円形	100 ×不明 × 25			不明	SK-240に切られる。
260	24	BG-40	円形	113 × (50) × 45			不明	SK-119.266に切られる。
261	27	BG-41	隅丸長方形	(131)× 100 × 55			墓	SK-163.184に切られる。平棺
262		欠番						
263	31	BK-48	円形	79 × 75 × 49			墓	小型
264	29	BG-49	不定形	64 × 59 × 25			不明	東側に穴。攪乱か
265		欠番						
266	24	BH-40	円形	(121)×(108) × 76	六道銭・煙管	江戸	墓	SK-119に切られる。-185を切る。
267	31	BF-44	円形	129 × 113 × 87			墓	形態から判断
268	31	BG-21	円形	205 × 168 × 25			不明	底部中央に穴あり。G.P に切られる。
269	31	BH-20	不定形	172 × 165 × 20			不明	浅い、攪乱か
270	31	BH-20	不定形	180 ×(160) × 13			不明	ごく浅い、攪乱か
271	31	BI-20	方形	90 × 78 × 15			不明	ごく浅い、攪乱か
272	31	BH-23	長方形	175 × 118 × 44			墓	形態から判断、SK-273.274に切られる。
273	31	BH-23	不定形	310 × 170 ×(40)			不明	SK-272.274.277を切る。覆土に拳大の石入る。
274	31	BH-22	不定形	155 × (95) × 30			不明	G.P SK-272.273に切られる。攪乱か
275	31	BH-22	方形	(100)× 80 × 20			不明	東側の壁ほとんど確認できずG.P SK-274.276
276	32	BG-22	不定形	150 ×(110) × 22			不明	SK-273.275.277に切られる。
277	32	BF-23	不明	542 × 455 × 47				G.P SK-273.276.278.SD-5 3つに分けられる。
(-1)		BG-23	楕円形	72 × 58 × 15			不明	ごく浅い落ち込みとなっている。
(-2)		BF-23	楕円形	80 × 55 × 39			不明	
(-3)		BF-24	円形	89 × 82 × 47			不明	壁は残っていない
278	32	BG-22	不定形	174 ×(160) × 15			不明	攪乱かG.P SK-276.277に切られる。

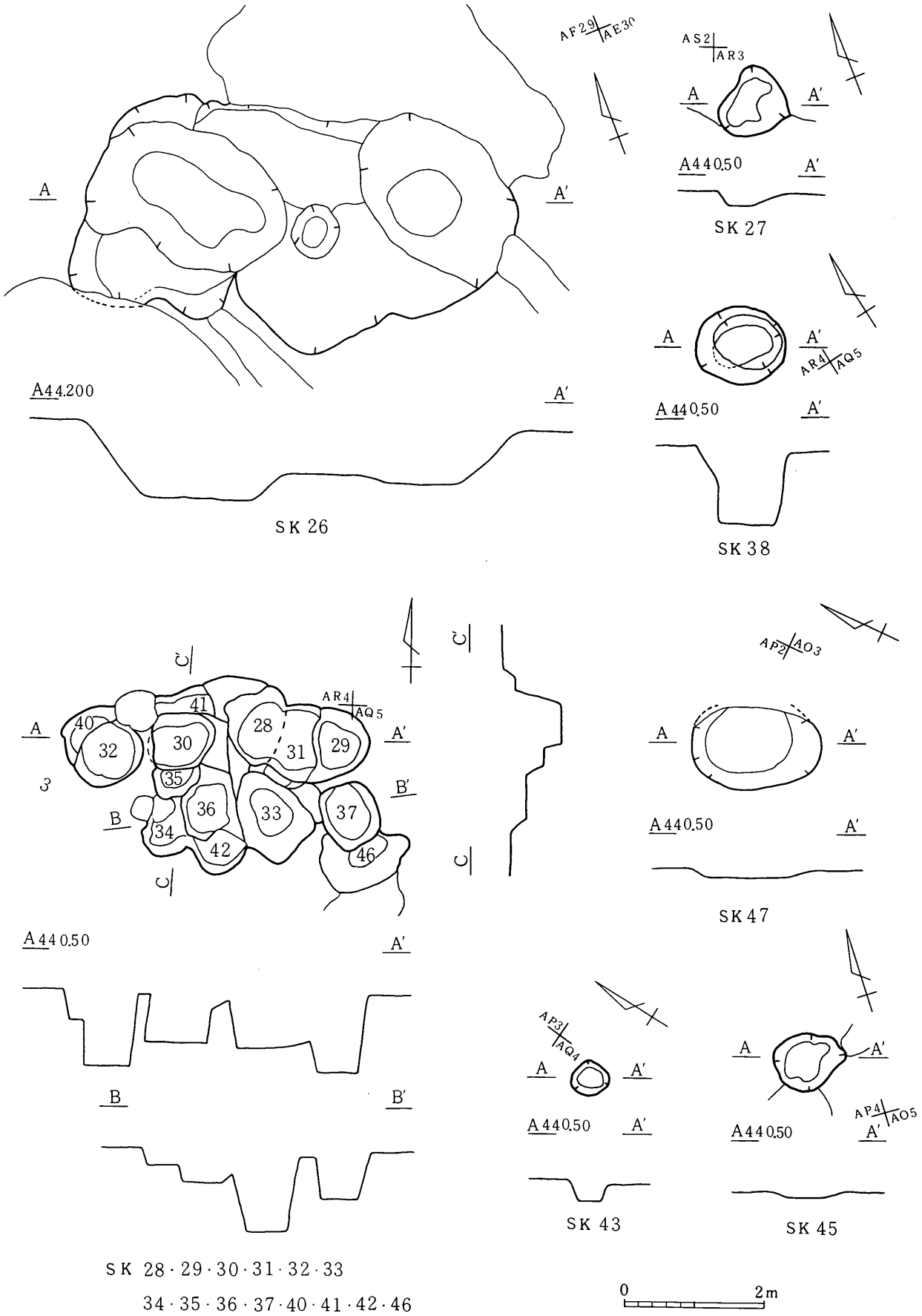
279	32	BF-21	不定形	300 ×(270) × 18			不明	ごく浅い落ち込み。G.P に切られる。
280	32	BD-22	不定形	315 × 215 × 20			不明	ごく浅い落ち込み。G.P SD-5に切られる。
281	32	BE-25	不定形	200 × 150 × 69	宋銭	中世	墓	SK-282を切る。底部傾斜している。
282	32	BE-25	長方形	(160)× 93 × 45	六道銭	江戸	墓	平棺。SK-281に切られる。
283	33	BD-25	不定形	205 × 158 × 30			不明	SK-284.285.286
284	33	BC-24	不正楕円形	103 × 87 × 45			不明	SK-283.285
285	33	BC-24	不定形	(230)× 165 × 24			不明	SK-283.284.286
286	33	BD-24	不定形	105 × 105 × 27			不明	SK-283.285
287	33	BI-31	円形	212 × 196 × 11			不明	ごく浅い落ち込み
288	33	BI-33	不定形	184 × 116 × 26			不明	底部に穴あり
289	33	BG-33	楕円形	130 × 97 × 39			不明	SK-290を切る。
290	33	BH-33	円形	165 × 153 × 38			不明	SK-289に切られる。
291	33	BF-34	円形	180 × 152 × 22			不明	G.P.STに切られる。
292	33	BG-35	不定形	480 ×不明 × 16			不明	攪乱か
293	34	BG-36	楕円形	(244)×(164) × 18			不明	浅い。SK-294に切られる。
294	34	BG-37	方形	230 × 150 × 52			不明	SK-293.295を切る。
295	34	BH-38	不定形	(220)×(190) × 12			不明	ごく浅い落ち込み。SK-294に切られる。
296	34	BI-37	円形	462 × 428 × 30			不明	底部に4つピットあり。
297	34	BK-38	楕円形	315 × 200 × 12			不明	ごく浅い落ち込み。底部北隅にピット
298	34	BJ-39	不定形	327 × 293 × 24			不明	攪乱か
299	35	BG-39	不定形	(340)×(300) × 56			不明	底部に落ち込みあり。SK-300
300	35	BH-40	不定形	400 × 242 × 45			不明	底部中央にピットあり。SK-299
301	34	BK-41	円形	112 × 95 × 40			不明	北側の壁は削平により高さ異なる。
302	34	BJ-41	円形	132 × 113 × 20			不明	南側に段あり。
303	35	BH-43	円形	136 × 125 × 18			不明	ごく浅い。SK-306に切られる。
304	35	BK-42	不定形	470 × (68) × 20			不明	攪乱か。堀3 に切られる。
305	35	BI-43	方形	125 × 84 × 62			墓	形態から平棺。SK-306を切る。
306	35	BH-43	不定形	(310)×(110) ×112			不明	SK-305に切られ、-303を切る。
307	31	BH-21	円形	70 × (70) × 15			不明	SK-269に切られる。



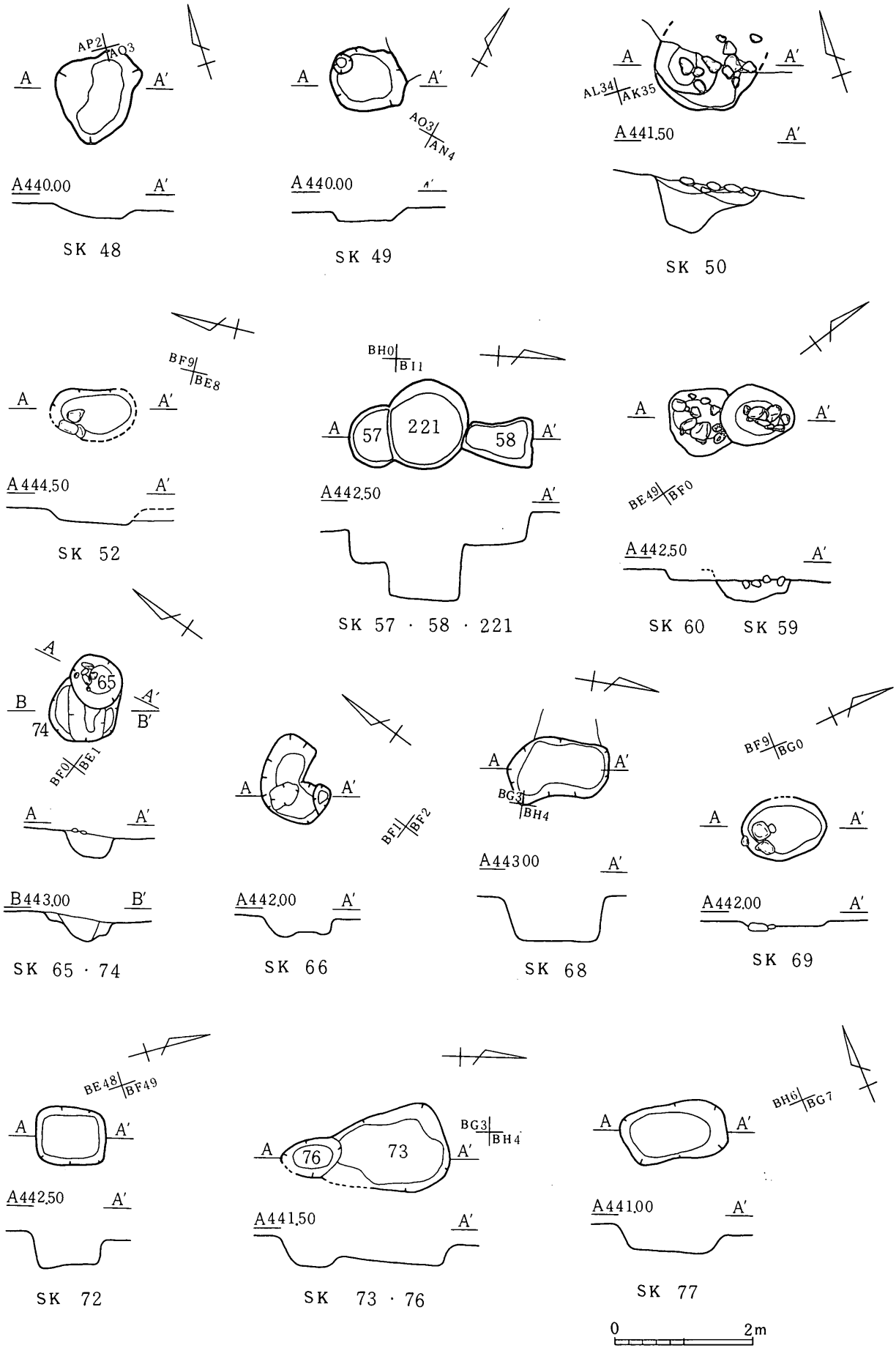
挿図17　ＳＫ２・３・５・６・７・８・９・10・11・12・13



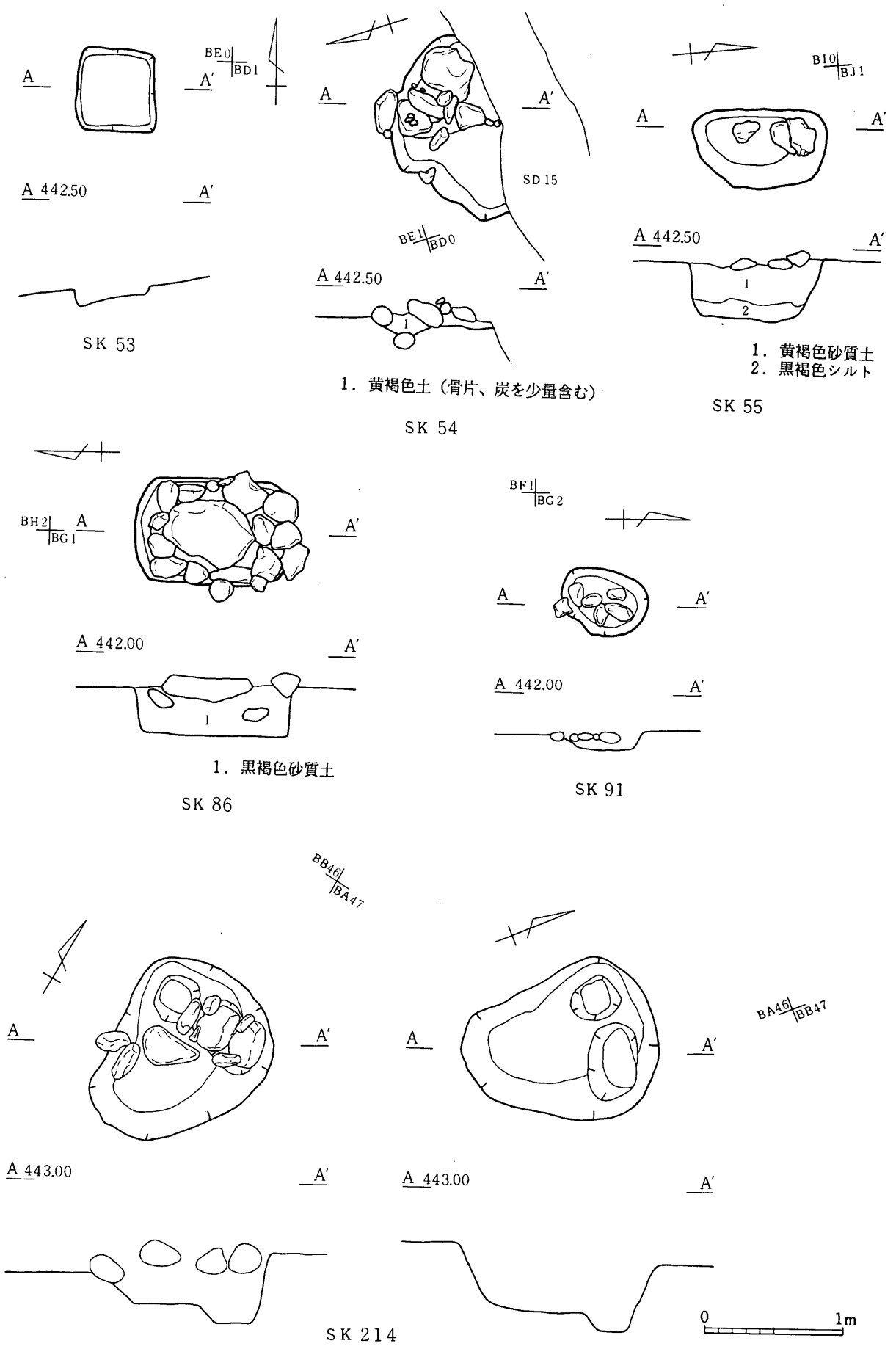
挿図18　ＳＫ14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・39



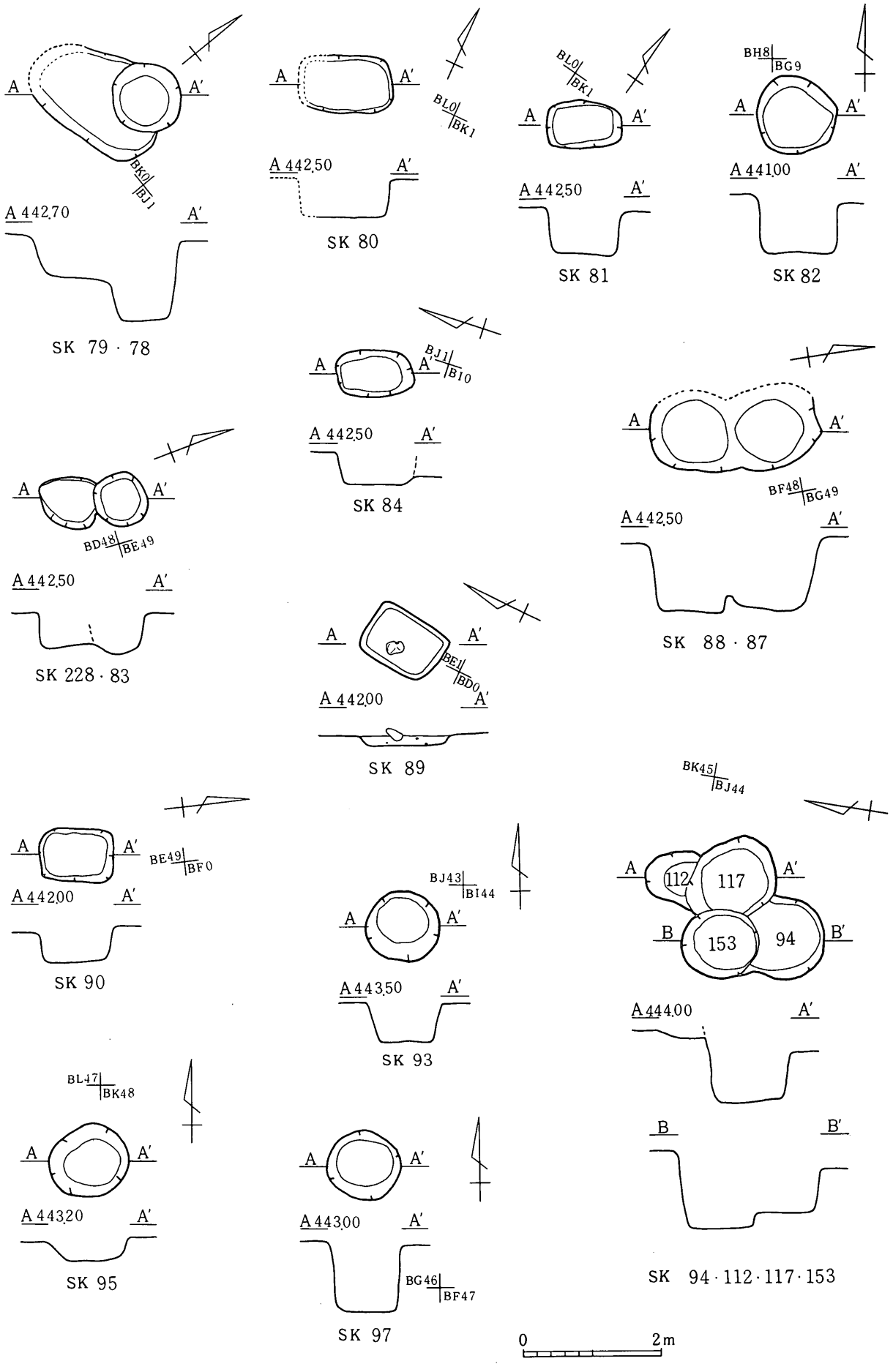
挿図19　ＳＫ26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・40・41・42・43・45・46・47



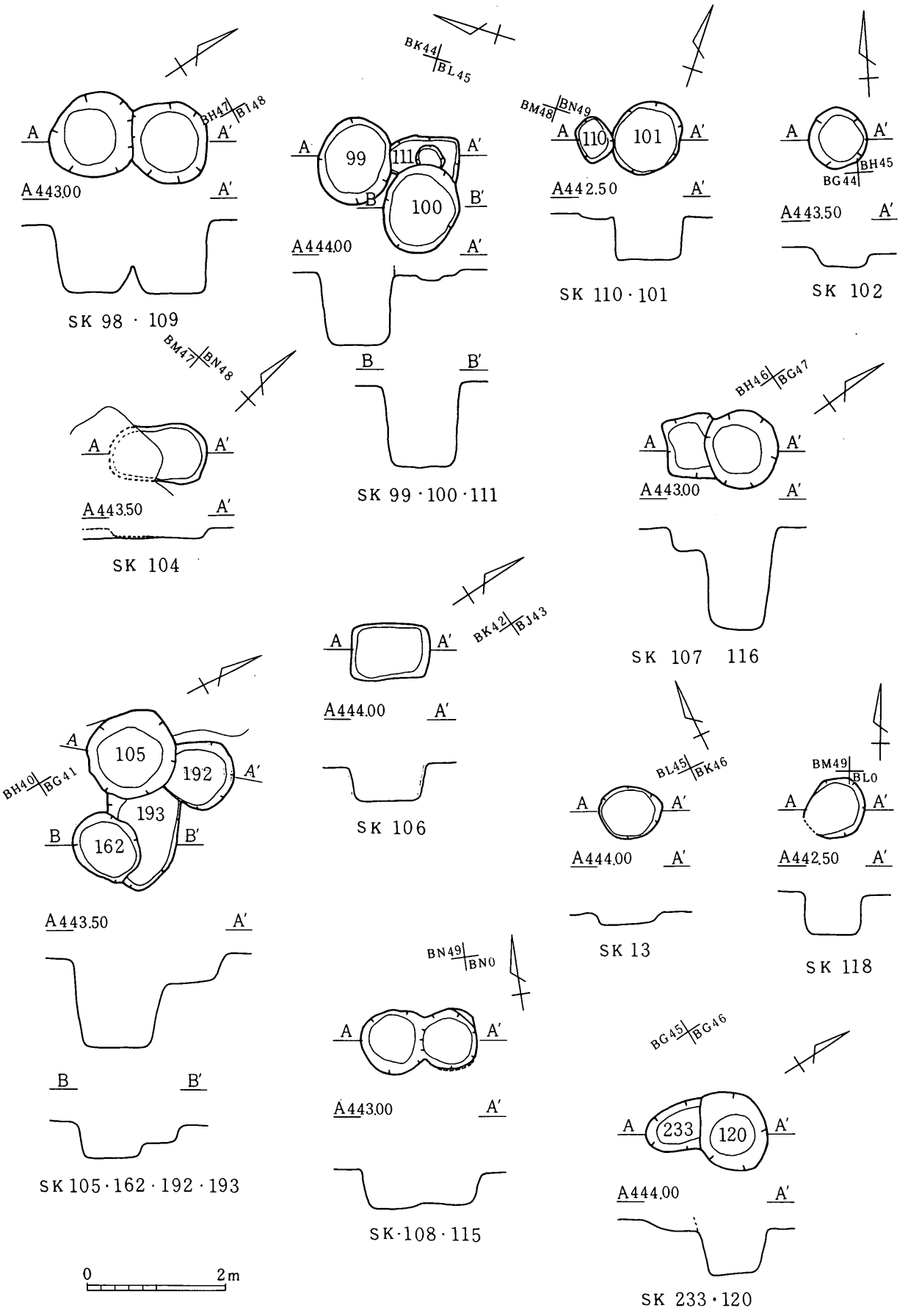
挿図20　ＳＫ49・50・52・57・58・59・60・65・66・68・69・72・73・74・76・77・221



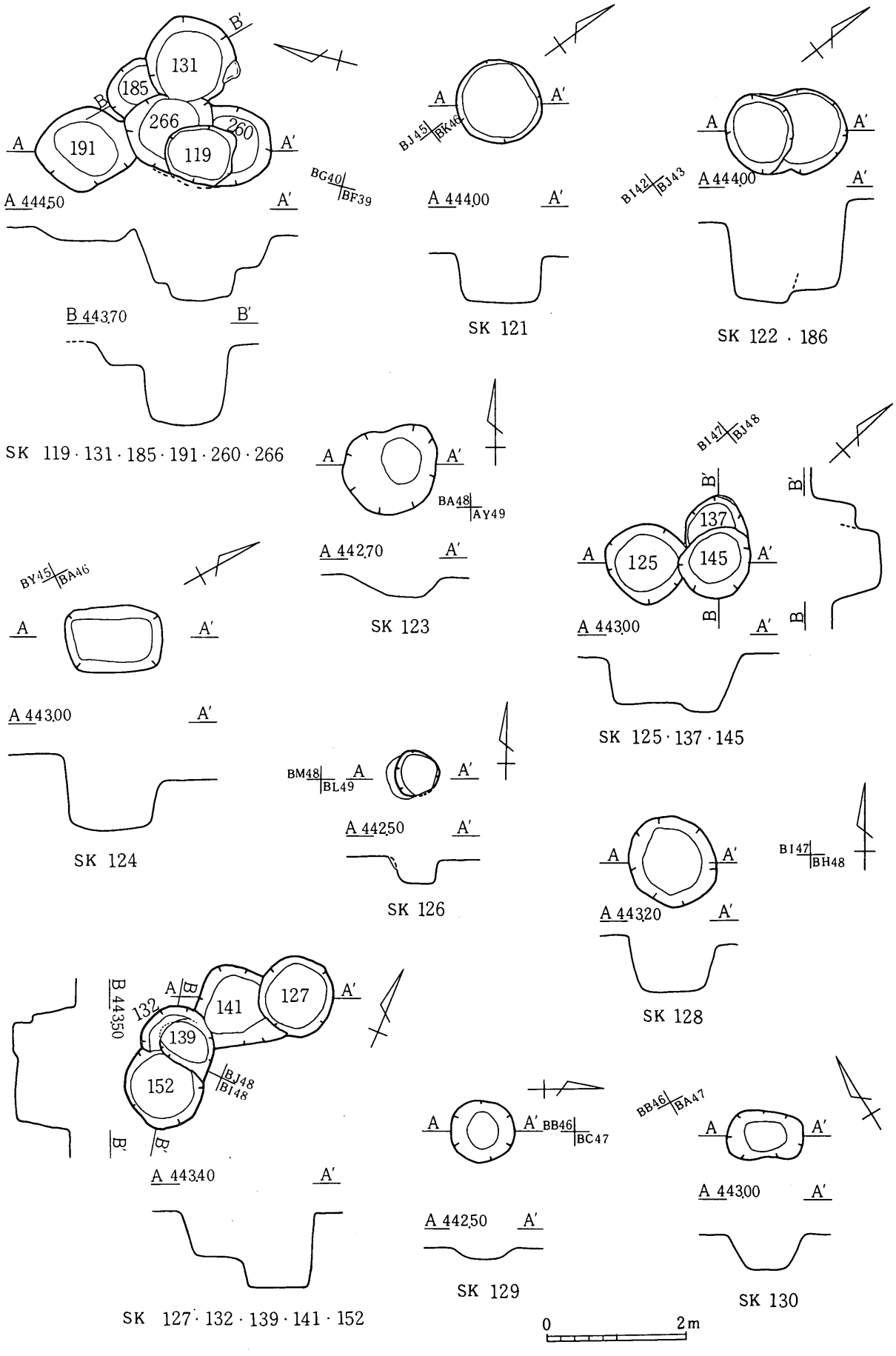
挿図21　ＳＫ53・54・55・86・91・214



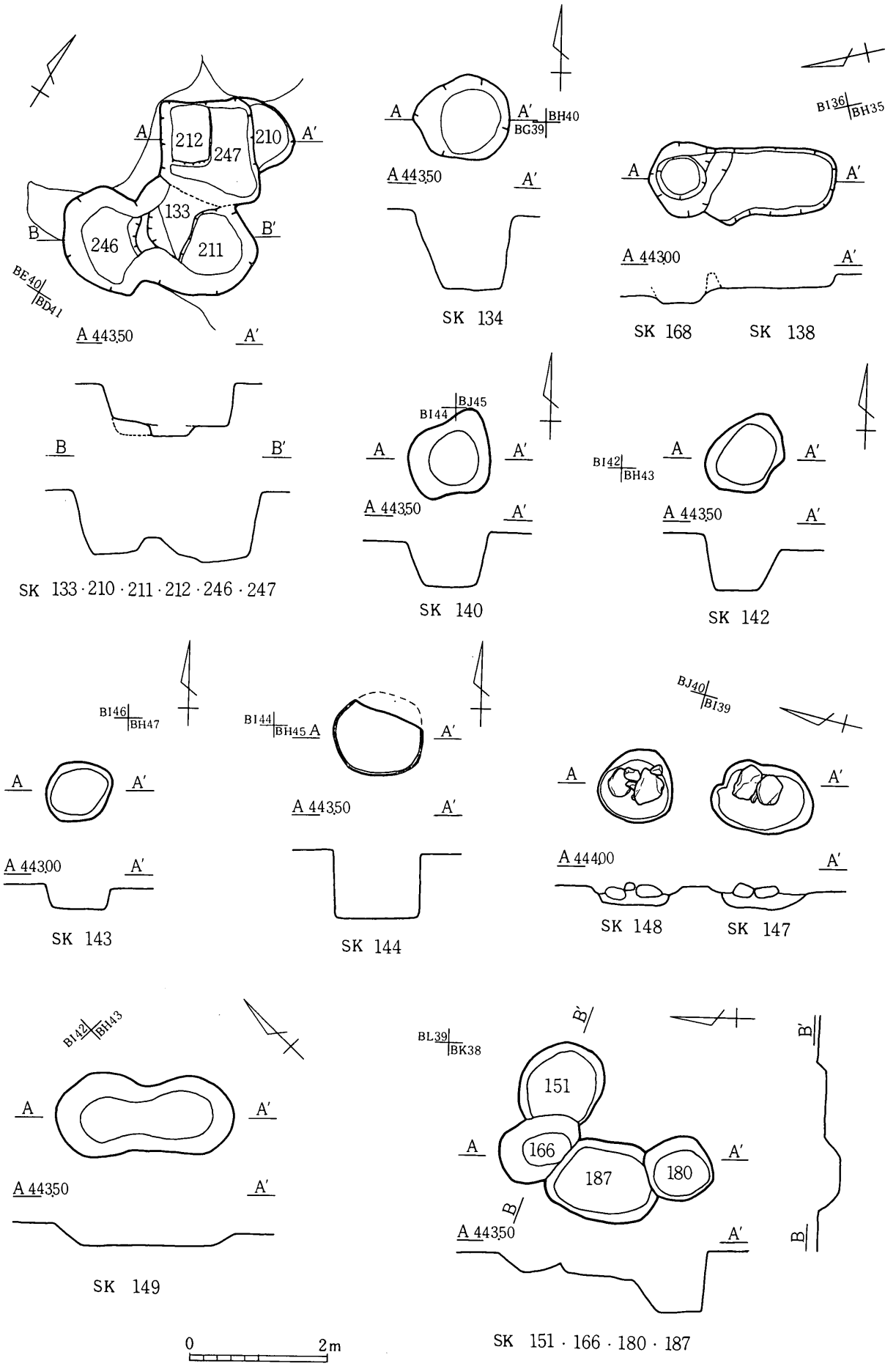
挿図22　SK78・79・80・81・82・83・84・87・88・89・90・93・94・95・97・112・117・153・228



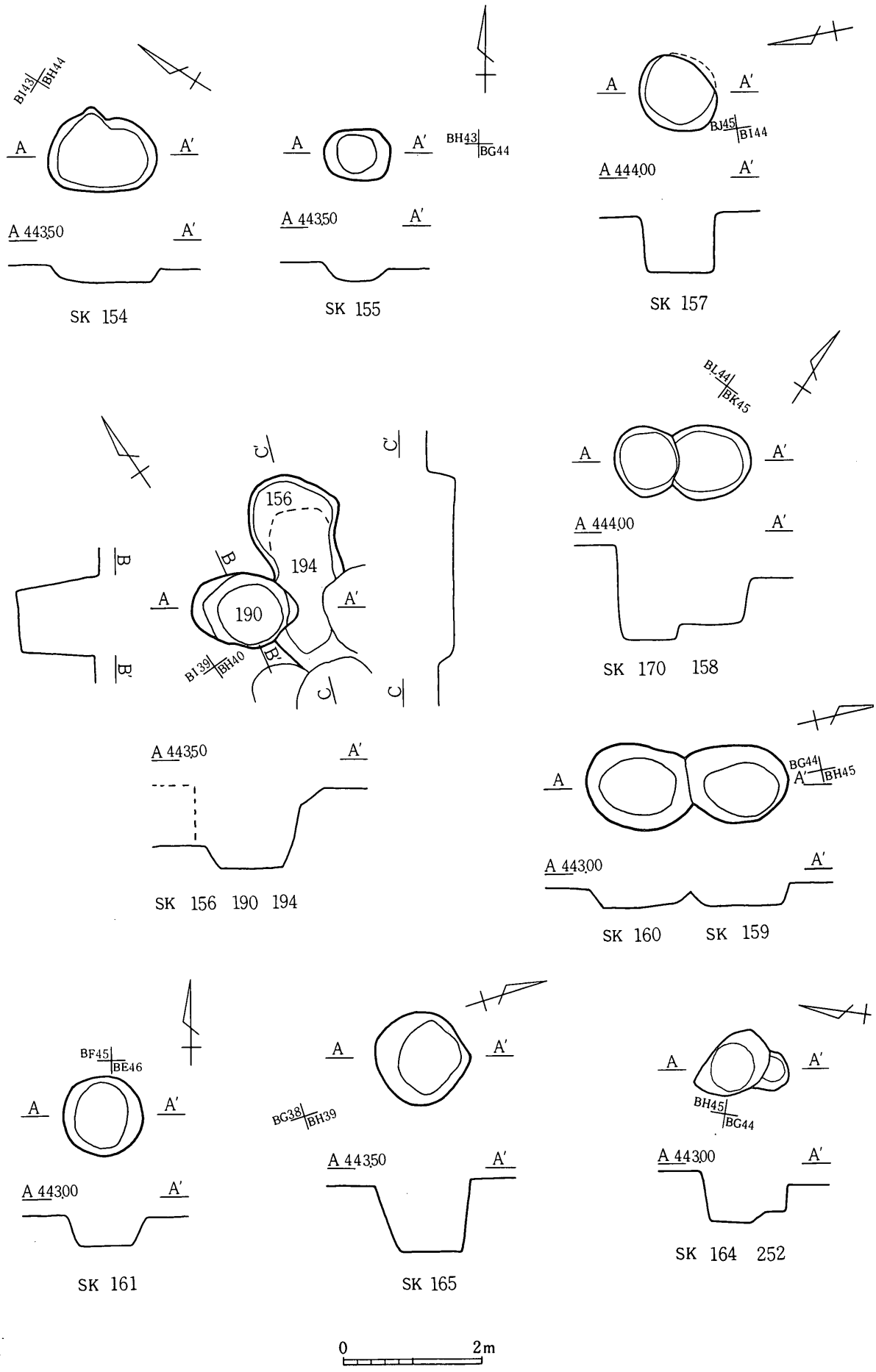
挿図23　ＳＫ98・99・100・101・102・104・105・106・107・108・109・
110・111・113・115・116・118・120・162・192・193・233



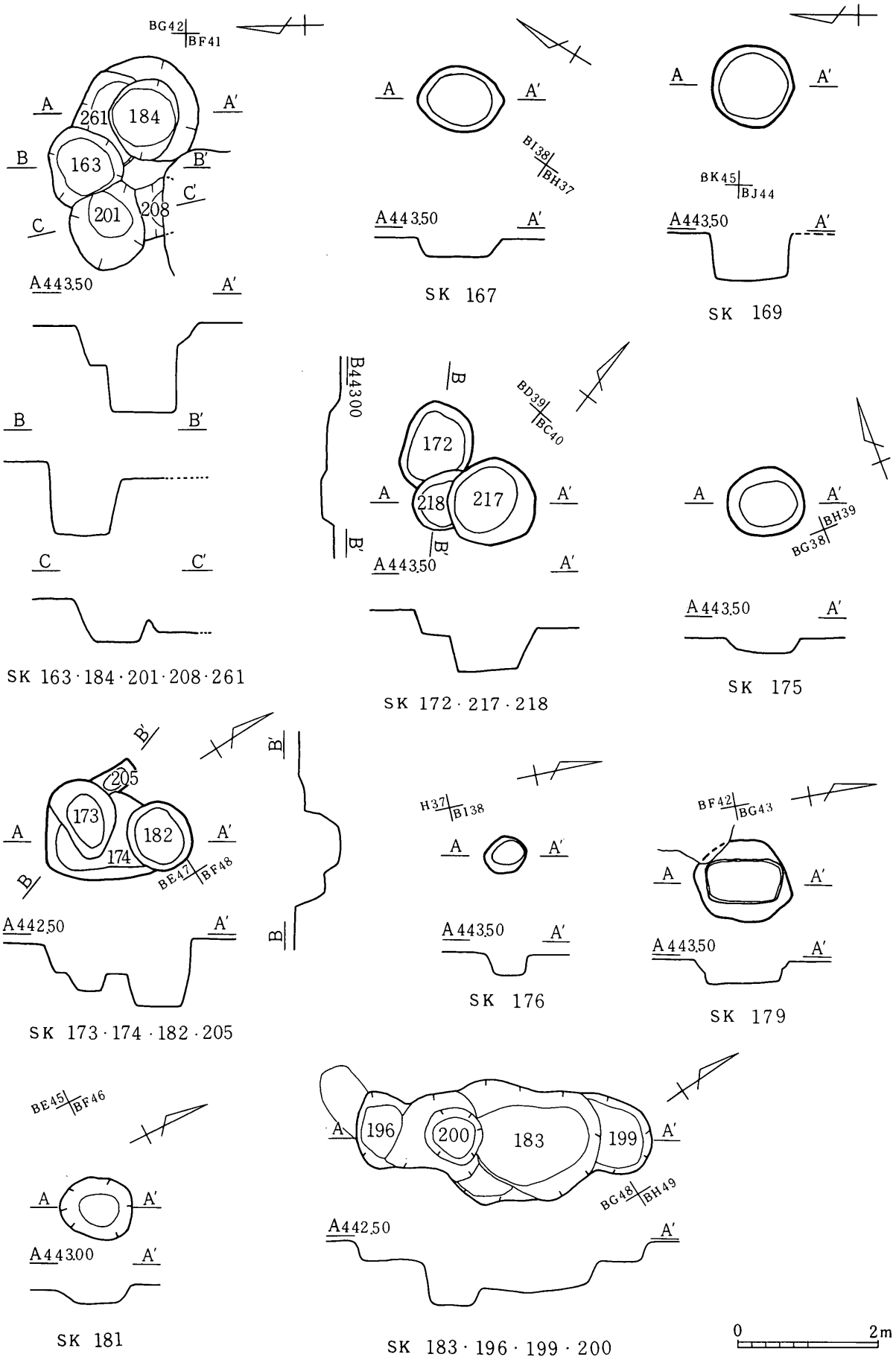
挿図24　SK119・121・122・123・124・125・126・127・128・129・130・131・132・137・139・141・145・152・185・186・191・260・266



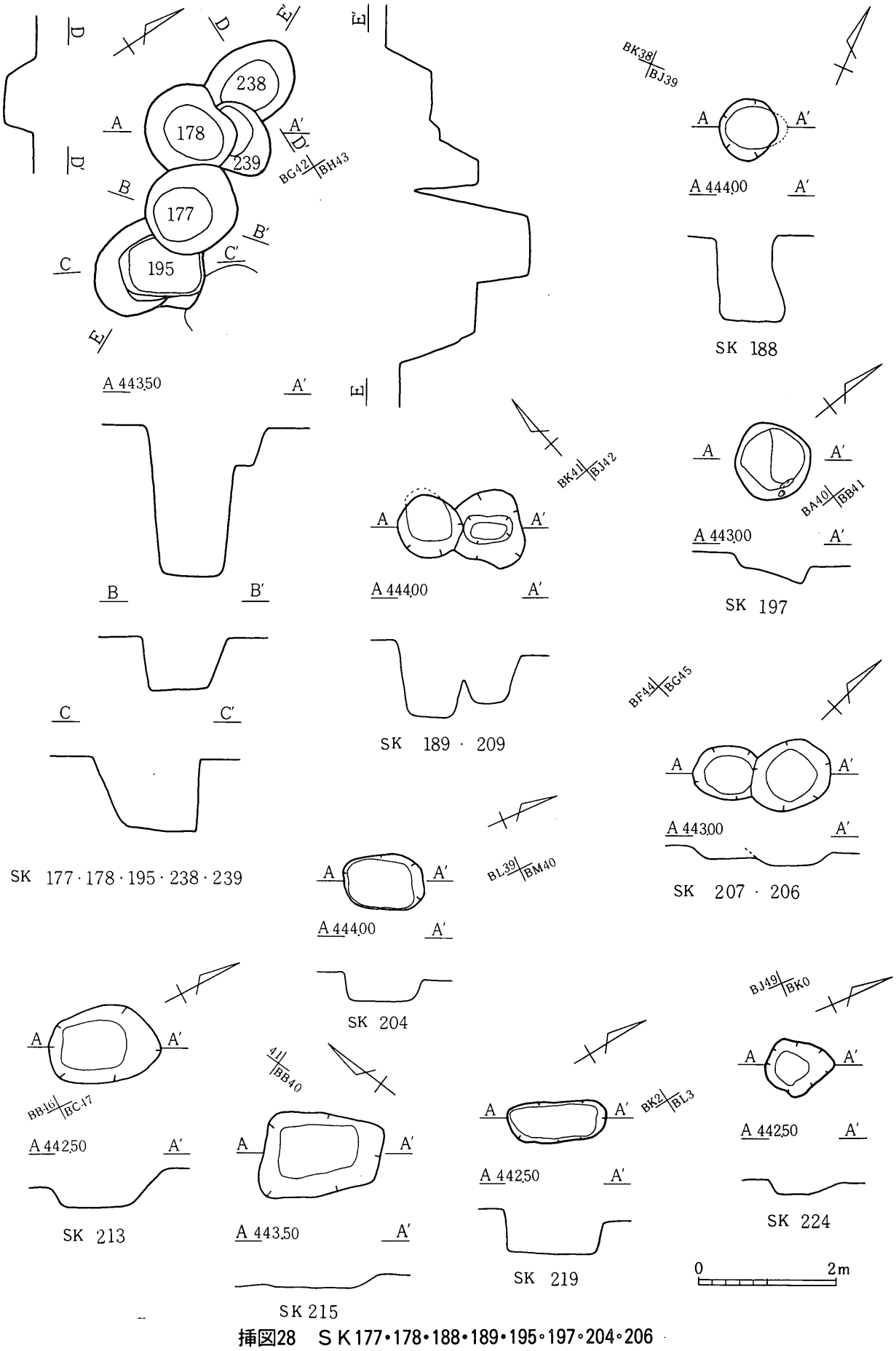
挿図25　SK133・134・138・140・142・143・144・147・148・149・151・166・168・180・187・210・211・212・246・247



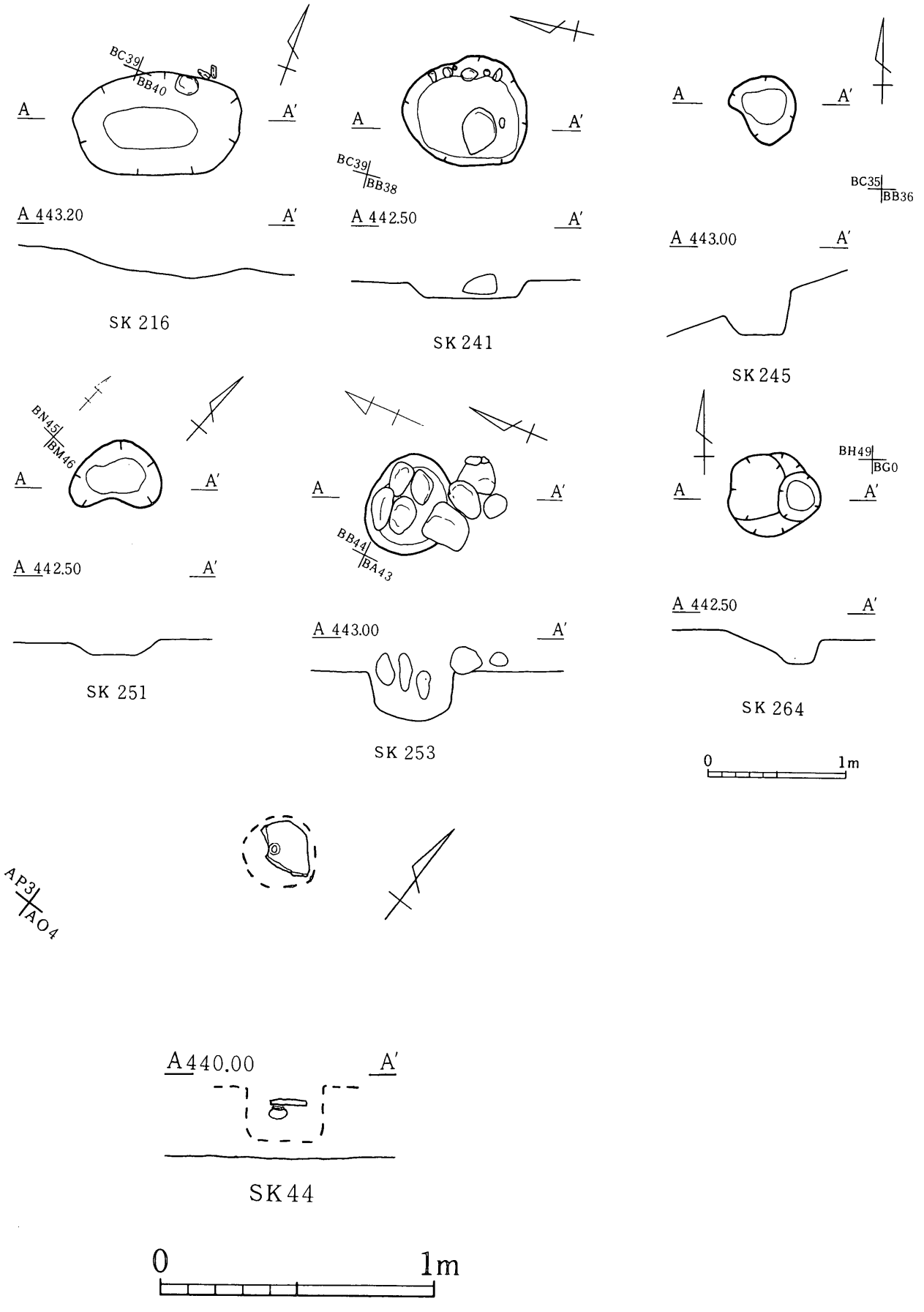
挿図26　ＳＫ154・155・156・157・158・159・160・
161・164・165・170・190・194・252



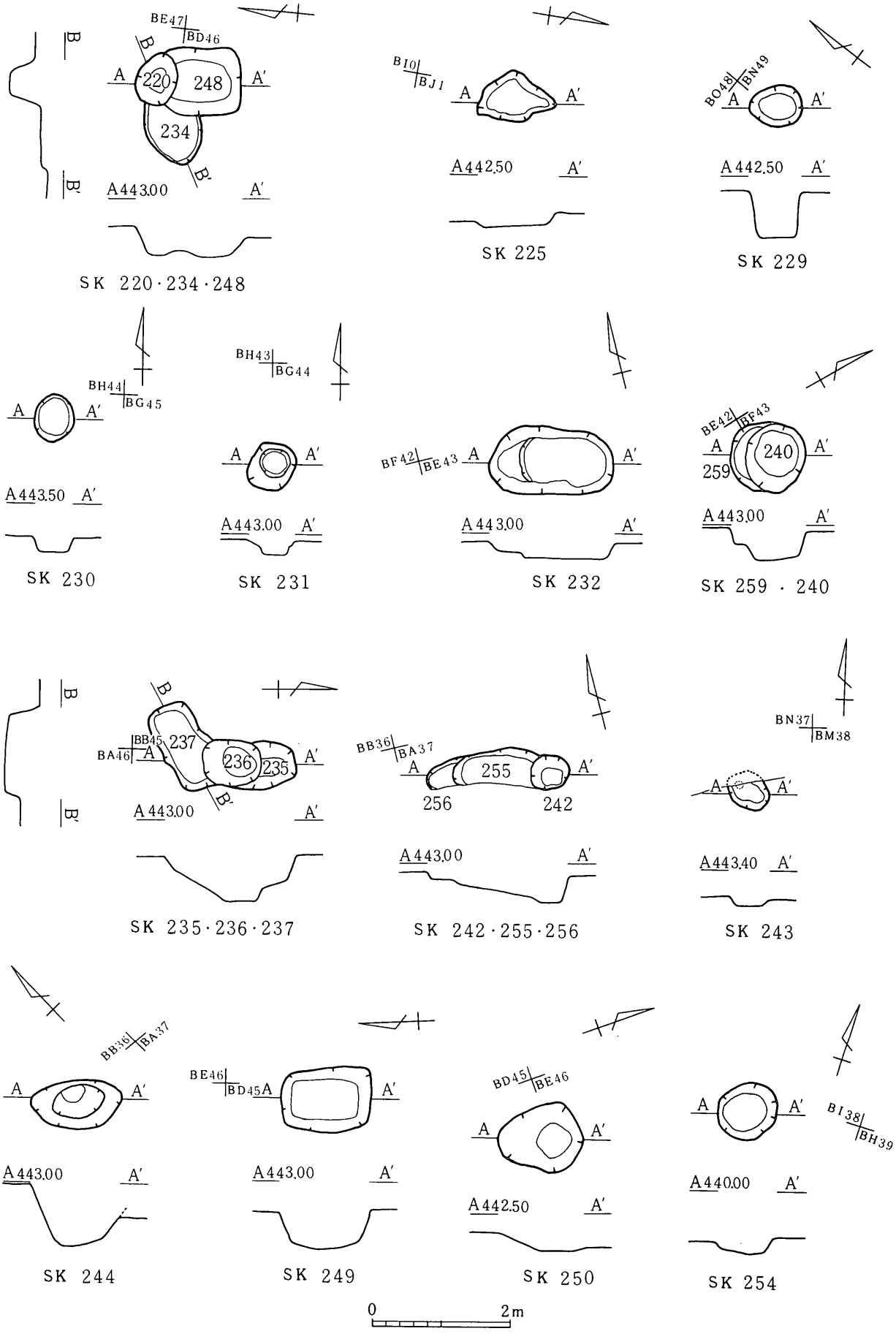
挿図27　SK163・167・169・172・173・174・175・176・179・181・182・183・184・196・199・200・201・205・208・217・218・261



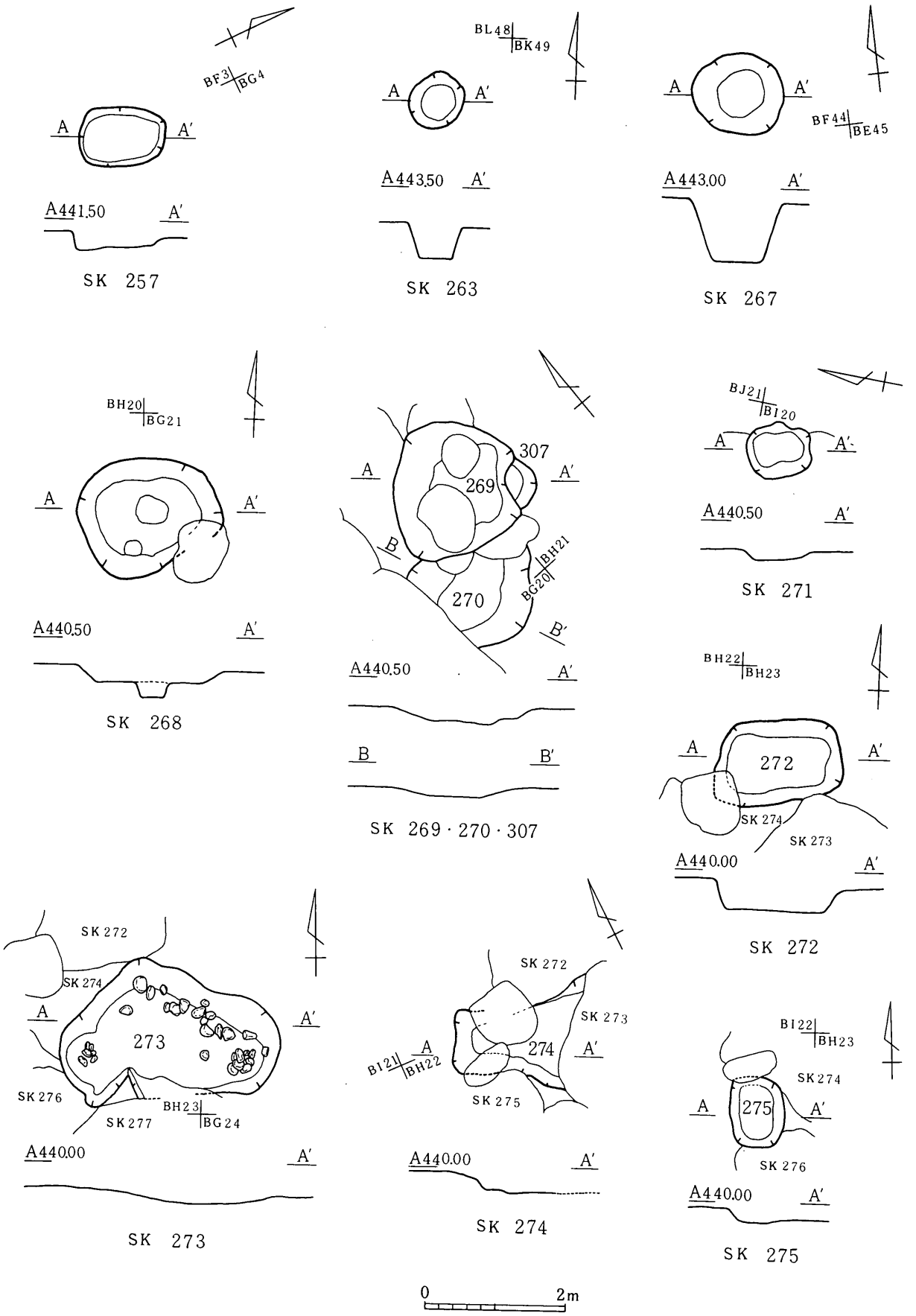
挿図28　ＳＫ177・178・188・189・195・197・204・206
207・209・213・・215・219・224・238・239



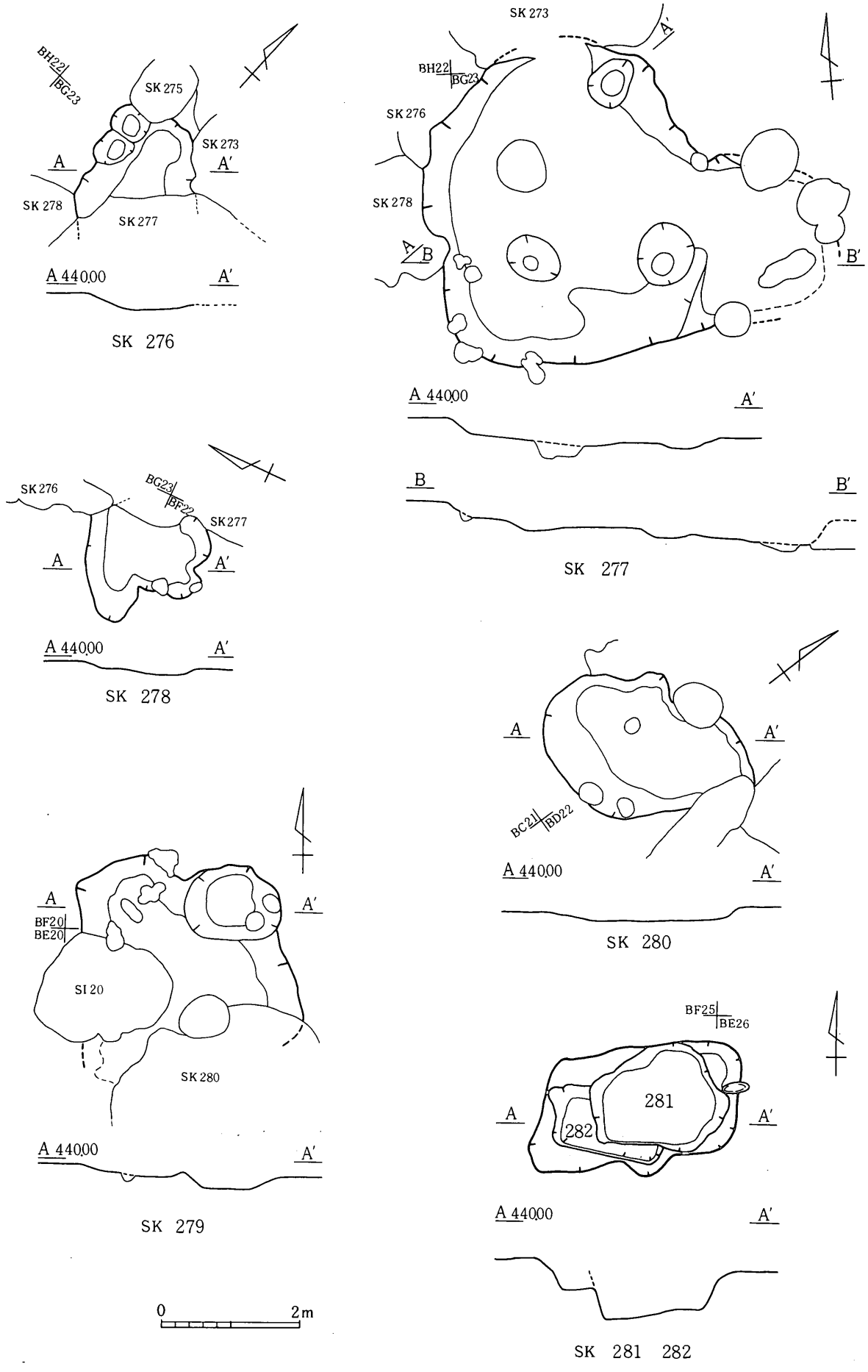
挿図29　ＳＫ216・241・245・251・253・264



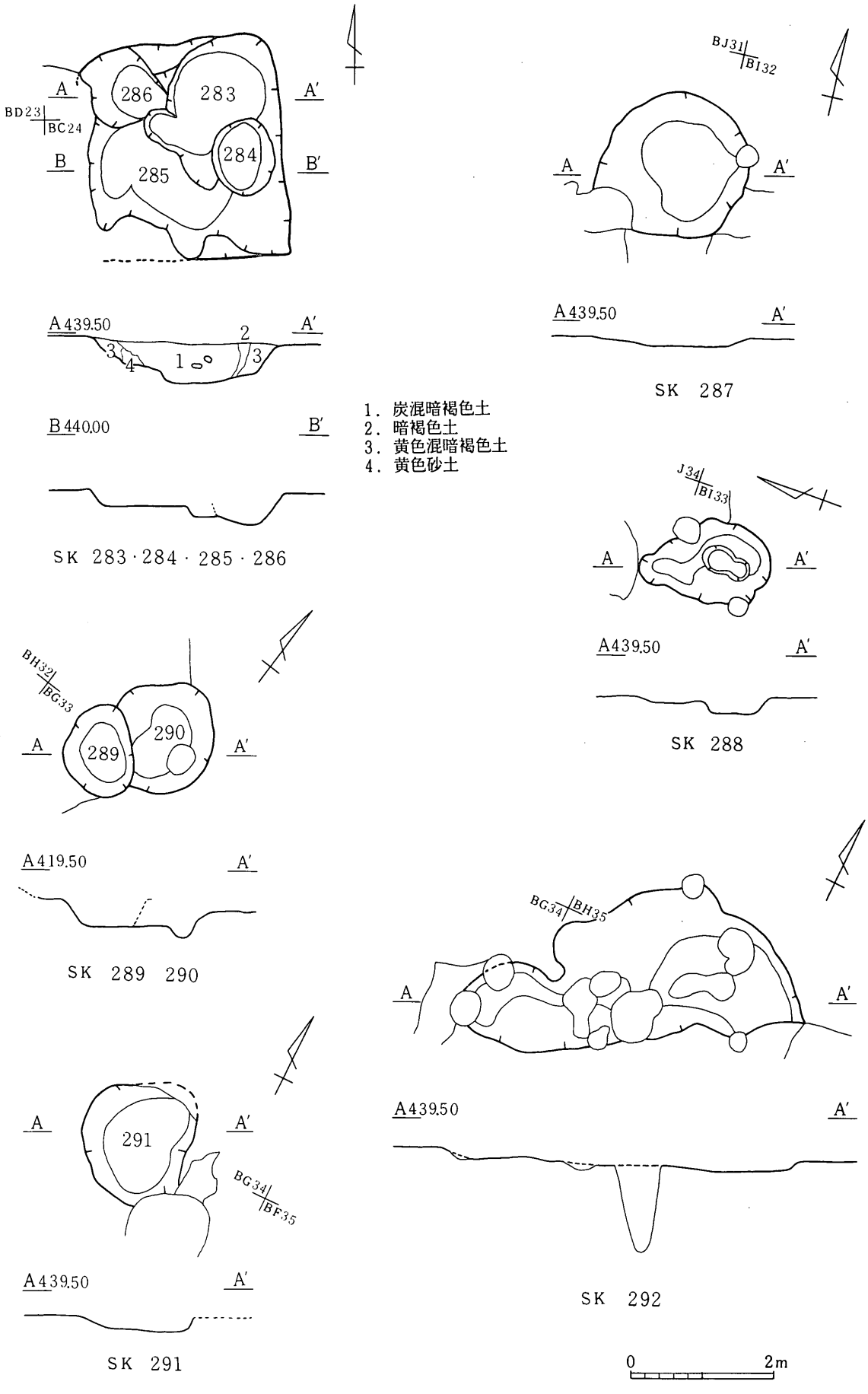
挿図30　SK220・225・229・230・231・232・234・235・236・237・240・242・243・244・248・249・250・254・255・256・259



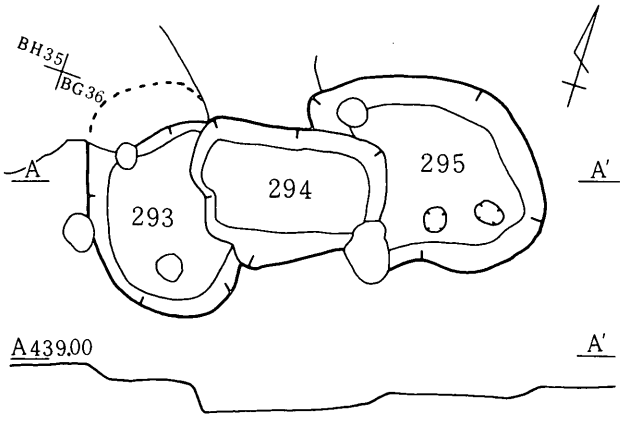
挿図31　ＳＫ257・263・267・268・269・270・271・272・273・274・275・307



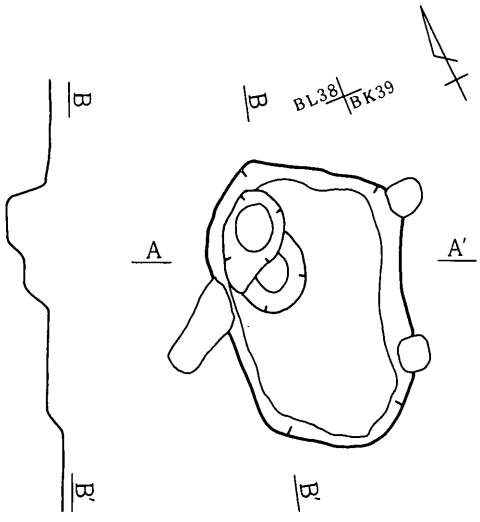
挿図32　ＳＫ276・277・278・279・280・281・282



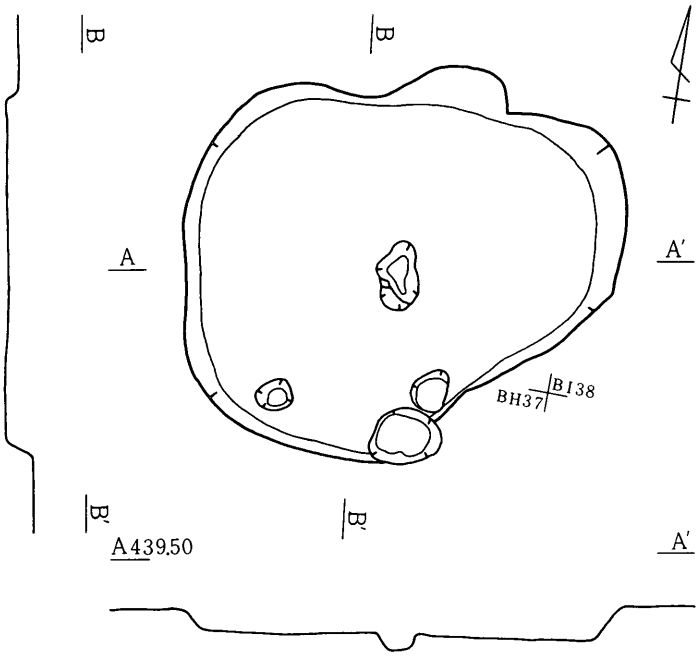
挿図33　ＳＫ283・284・285・286・287・288・289・290・291・292



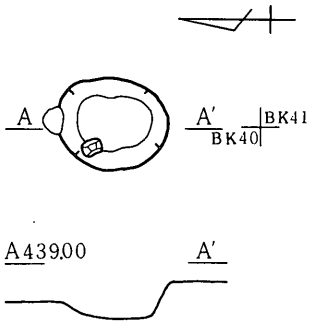
SK 293・294・295



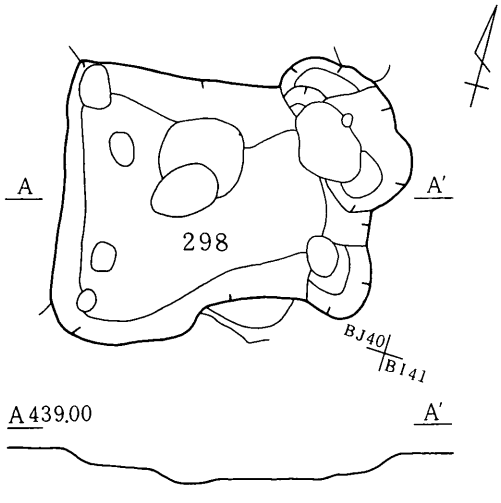
SK 297



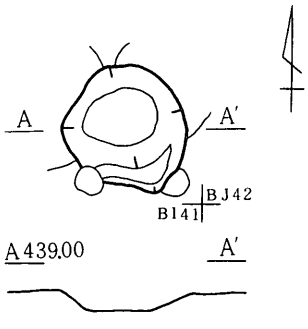
SK 296



SK 301



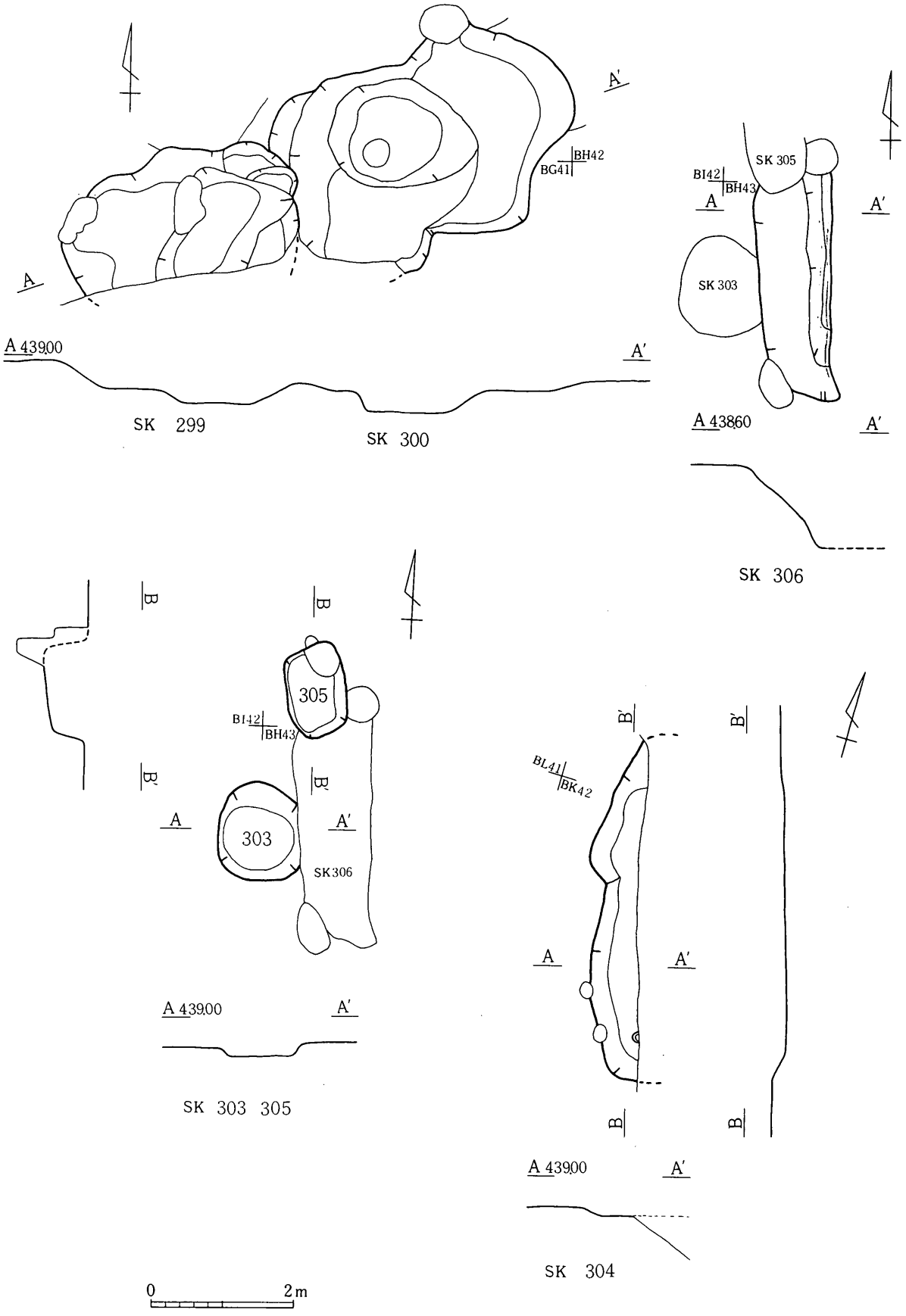
SK 298



SK 302

0 2m

挿図34　ＳＫ293・294・295・296・297・298・301・302



挿図35　ＳＫ299・300・303・304・305・306

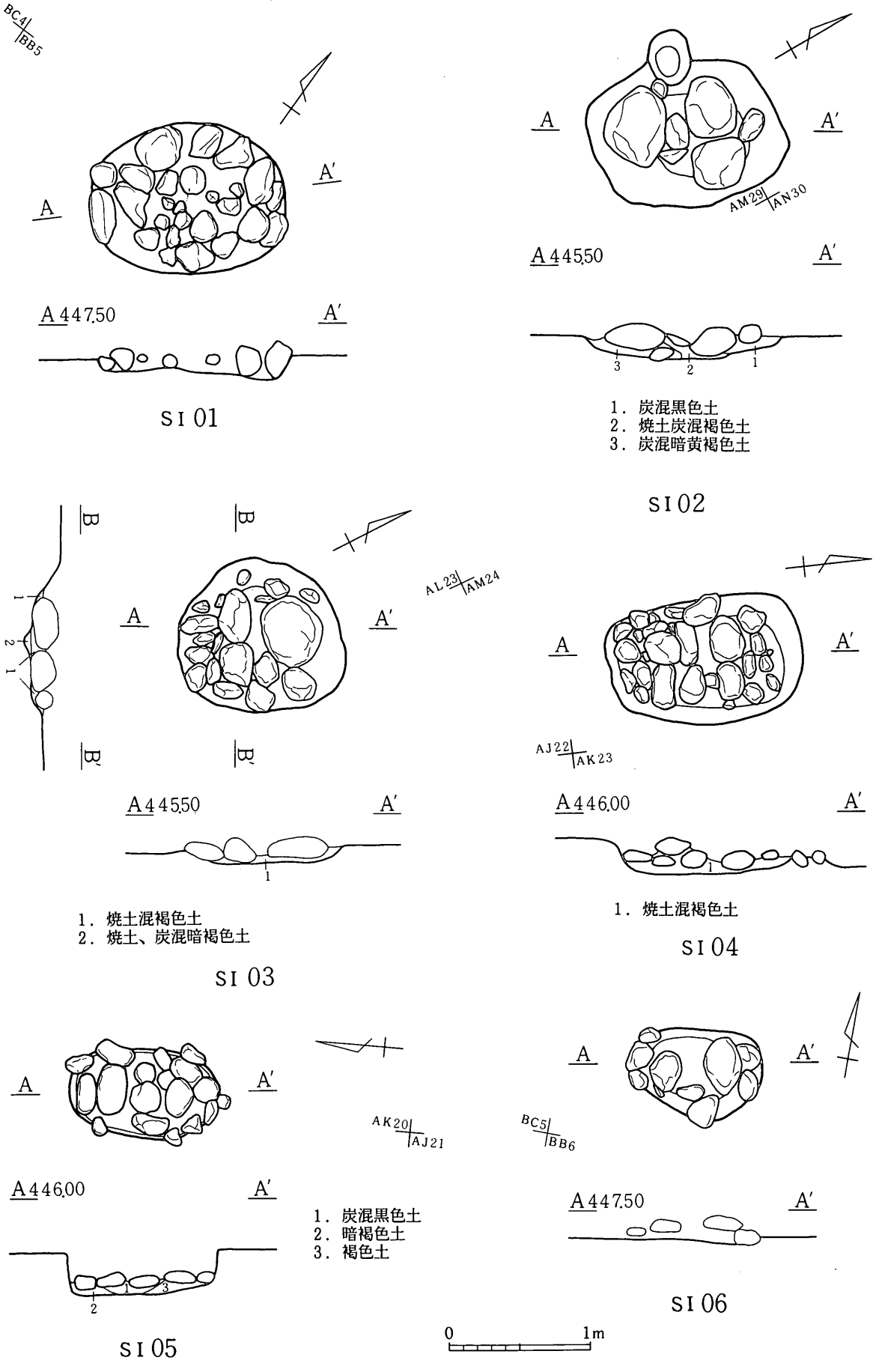
ＳＩ（集石）

集石・集石墓を一括して掲載したため、結果として平面検出時に上部の石をＳＩとしたものがある。

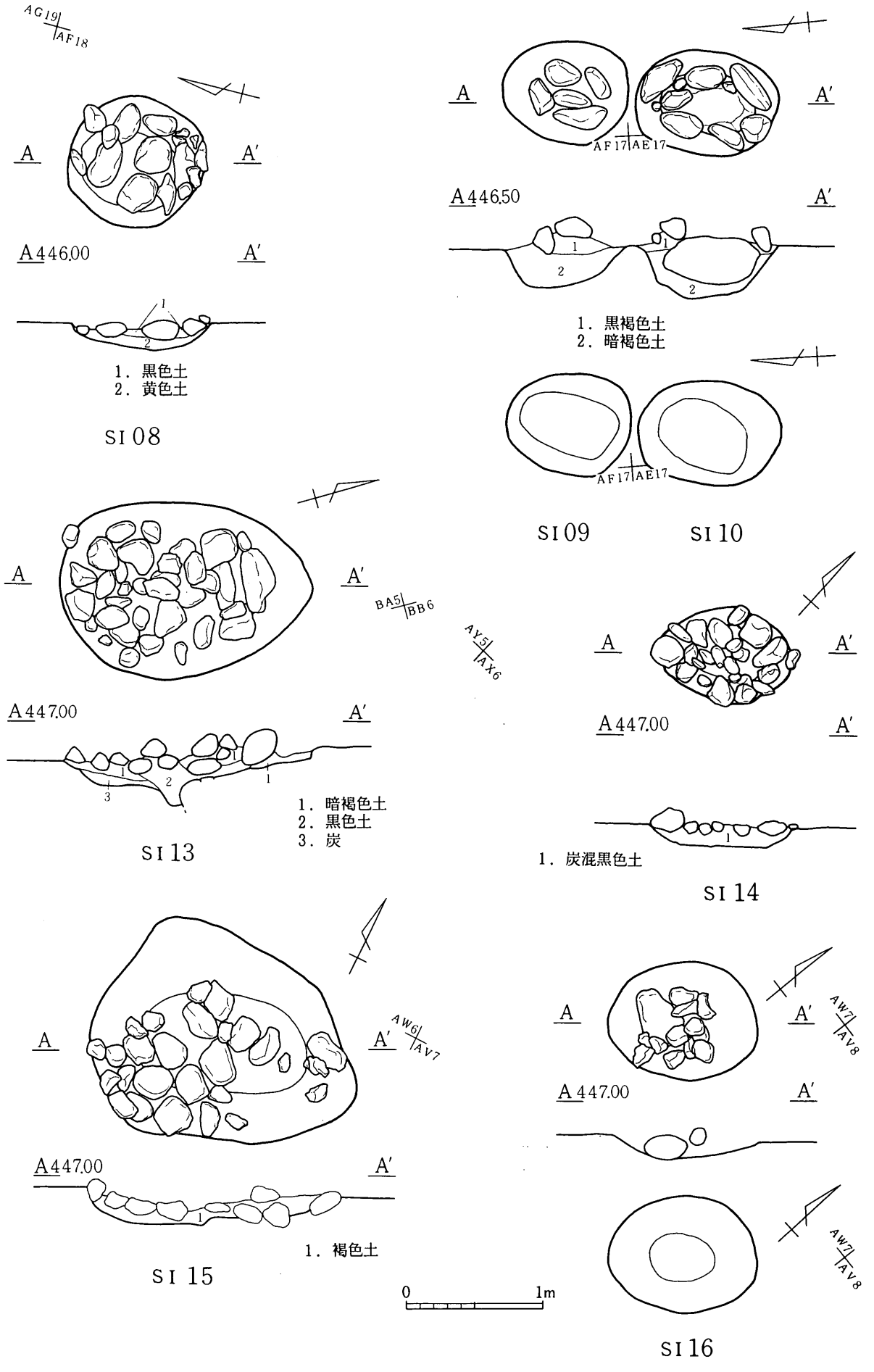
ＳＩ観察表ＣＧＹ（茶柄山）地籍

No.	図版	位　置	平面形	規模Ｌ＊Ｗ＊Ｄcm	出土遺物	時代	性格	切合及び備考
1	36	BB-5	楕円形　A-b	135 ×104 × 15	渡来銭	中世	火葬墓	
2	36	AM-29	不定形　B-b	142 ×103 × 16	渡来銭	中世	火葬墓	覆土に焼土・炭が混じる 再葬
3	36	AL-23	卵形　A-b	113 ×111 × 26			火葬墓	覆土に焼土・炭が混じる　再葬
4	36	AK-22	楕円形　A-a	135 × 86 × 20			火葬墓	覆土に焼土が混じる
5	36	AK-21	円形　A-b	103 × 87 × 20	渡来銭	中世	火葬墓	覆土に炭が混じる
6	36	BC-6	不整楕円B-b	95 × 65 × 5			火葬墓	削平により壁なし
7	11	AG-18	方形　B-a	205×185 × 48	渡来銭	中世	火葬墓	SK-35 に切られる。
8	37	AF-18	円形　B-b	100 × 95 × 20			火葬墓	
9	37	AF-18	楕円形　B-b	92 × 75 × 36			火葬墓	
10	37	AE-18	楕円形	104 × 75 × 42	渡来銭	中世	火葬墓	
11		AF-22	不定形	227 ×152 × 44	渡来銭	中世	火葬墓	明瞭な遺構として、確認できず。
12	11	AJ-21	不整楕円形A-b	107 × 78 × 9			火葬墓	SK-24 に切られる。
13	37	BA-5	楕円形　A-b	127 ×153 × 45	渡来銭	中世	火葬墓	
14	37	AY-6	楕円形　A-b	108 × 70 × 14	渡来銭	中世	火葬墓	覆土に炭が混じる
15	37	AW-7	不定形　A-b	198 ×158 × 26	渡来銭	中世	火葬墓	
16	37	AV-7	楕円形　B-b	108 × 84 × 18			火葬墓	
17	38	AV-7	楕円形　B-b	(82)×(68)×(6)	渡来銭	中世	火葬墓	
18	38	AJ-19	楕円形　A-b	85 × 53 × 1	渡来銭	中世	火葬墓	
19	38	AX-7	不定形　A-b	160 ×152 × 35	渡来銭	中世	火葬墓	
20	38	AY-8	不整楕円B-b	150 ×123 × 24			火葬墓	
21	38	AX-8	不整円形B-b	113 × 92 × 29			火葬墓	
22	38	AW-8	楕円形　A-b	138 ×(86)× 34			火葬墓	覆土に炭が混じる
23	39	AY-9	不整円形B-b	155 ×140 × 30	渡来銭	中世	火葬墓	
24	39	AW-9	不定形　B-b	94 × 80 × 22			火葬墓	
25	39	AS-10	楕円形　B-b	96 × 61 × 12			火葬墓	
26	39	AE-16	不定形　B-b	167 ×103 × 37			不明	
27	39	AL-24	不定形　B-b	122 × 94 × 19			不明	
28	39	AQ-26	円形　A-b	90 × 85 × 45			火葬墓	
29	12	AF-24	円形　A-b	52 ×(48)×14			火葬墓	SK-45 に切られる。
30	40	AG-24	円形　B-b	110 × 77 × 36			火葬墓	
31	40	AN-31	楕円形　B-b	112 ×100 × 22	渡来銭	中世	火葬墓	

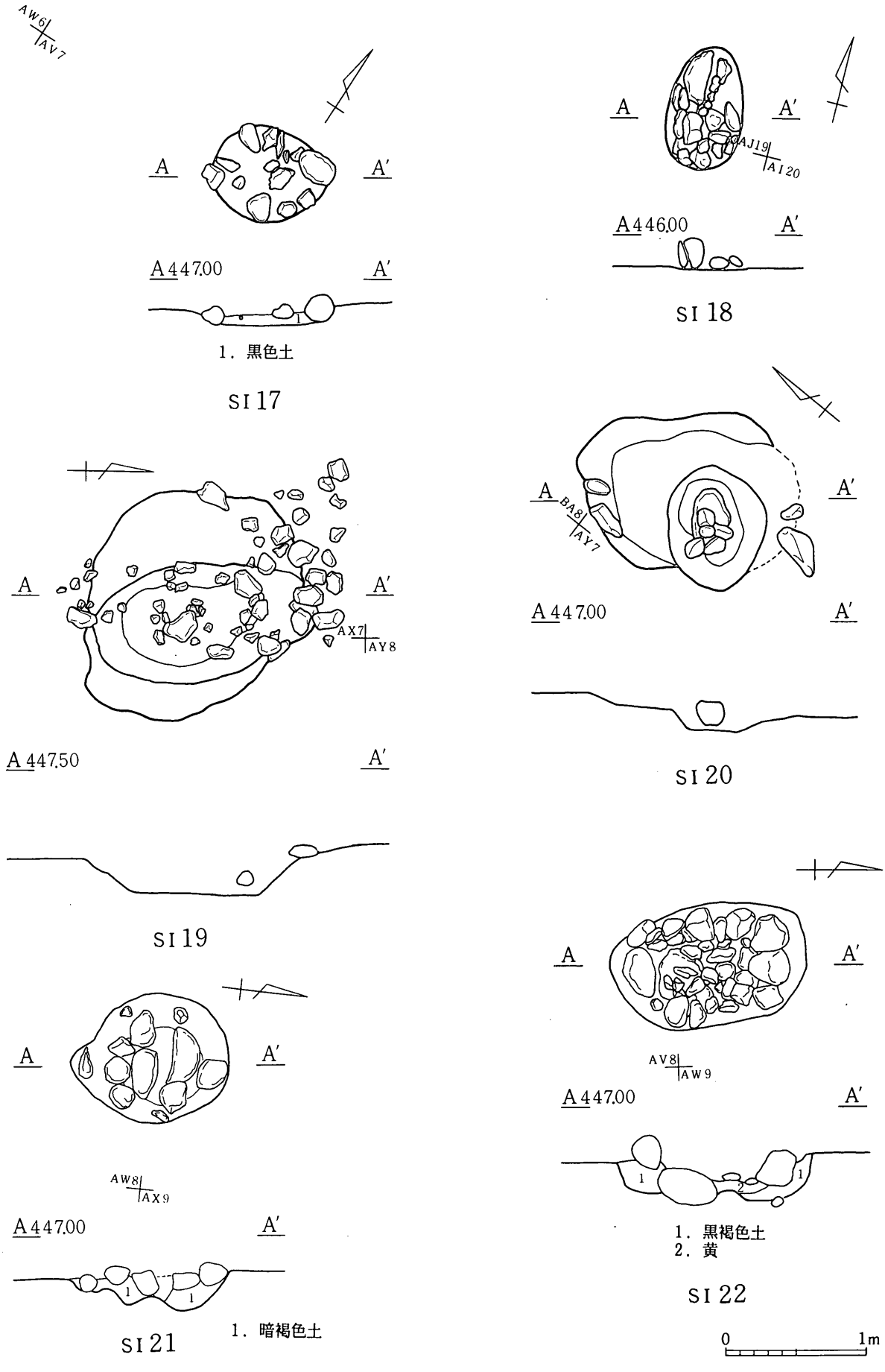
32	40	AM-33	楕円形 A-b	103 × 69 × 37	渡来銭	中世	火葬墓	
33		欠番						
34	40	AJ-24	楕円形 A-b	160 ×110 × 30			火葬墓	
35	40	AJ-25	不定形 A-b	123 × 70 × 30			火葬墓	SI-36
36	40	AJ-25	不定形 A-b	80 × 55 × 18			火葬墓	SI-35
37	12	AH-38	円形 B-b	81 ×(90)× 6	渡来銭	中世	火葬墓	SK-60 に切られる。
38	40	AK-40	円形 B-a	128 ×120 × 39			火葬墓	
39	41	AN-23	不定形 B-b	145 × 95 × 14			火葬墓	
40	11	AN-24	円形 B-a	96 × 95 × 13			火葬墓	SK-30 に切られる。
41	41	AF-41	円形 B-b	(85)×(75)× 27			火葬墓	
42	41	AN-28	楕円形 A-b	153 ×113 × 21			火葬墓	覆土に焼土混じる
43	41	AN-26	不定形 A-b	132 ×100 × 17			不明	
44	41	AG-27	楕円形 A-b	109 × 70 × 24			火葬墓	
45	41	BL-47	楕円形 A-b	105 × 74 ×(14)			火葬墓	
46		欠番						
47	42	AP-24	不定形 A-b	(175)×110 × 11			不明	SI-48
48	42	AP-24	楕円形 A-b	120 × 80 × 5			不明	SI-47
49	42	AD-23	楕円形 B-a	123 × 85 × 30			火葬墓	
50	42	AK-20	円形 B-a	57 × 50 × 4			火葬墓	
51	42	AC-22	楕円形 A-a	115 × 73 × 15			火葬墓	
52	42	AA-22	楕円形 A-b	114 × 73 × 16			火葬墓	
53	42	AI-19	楕円形 B-a	72 × 50 × 27			火葬墓	
54	43	AI-22	隅丸長方B-b	155 ×120 × 49			火葬墓	SI-56
55	43	AH-19	不定形 B-b	133 ×(105)×19			火葬墓	炭化物
56	43	AJ-23	隅丸長方A-b	115 × 85 × 21			火葬墓	SI-54
57	43	AC-23	不定形 A-a	84 × 75 × 12			火葬墓	
58	43	AL-22	不定形 B-b	85 × 70 × 35			火葬墓	
59	43	AD-19	不定形 A-b	163 ×115 × 12			不明	
60	44	AH-27	楕円形 A-b	152 ×112 × 7			火葬墓	
61		欠番						
62	44	AK-24	円形 A-b	116 ×(104)×3			火葬墓	
63	44	AK-23	楕円形 B-b	80 × 55 × 20			火葬墓	



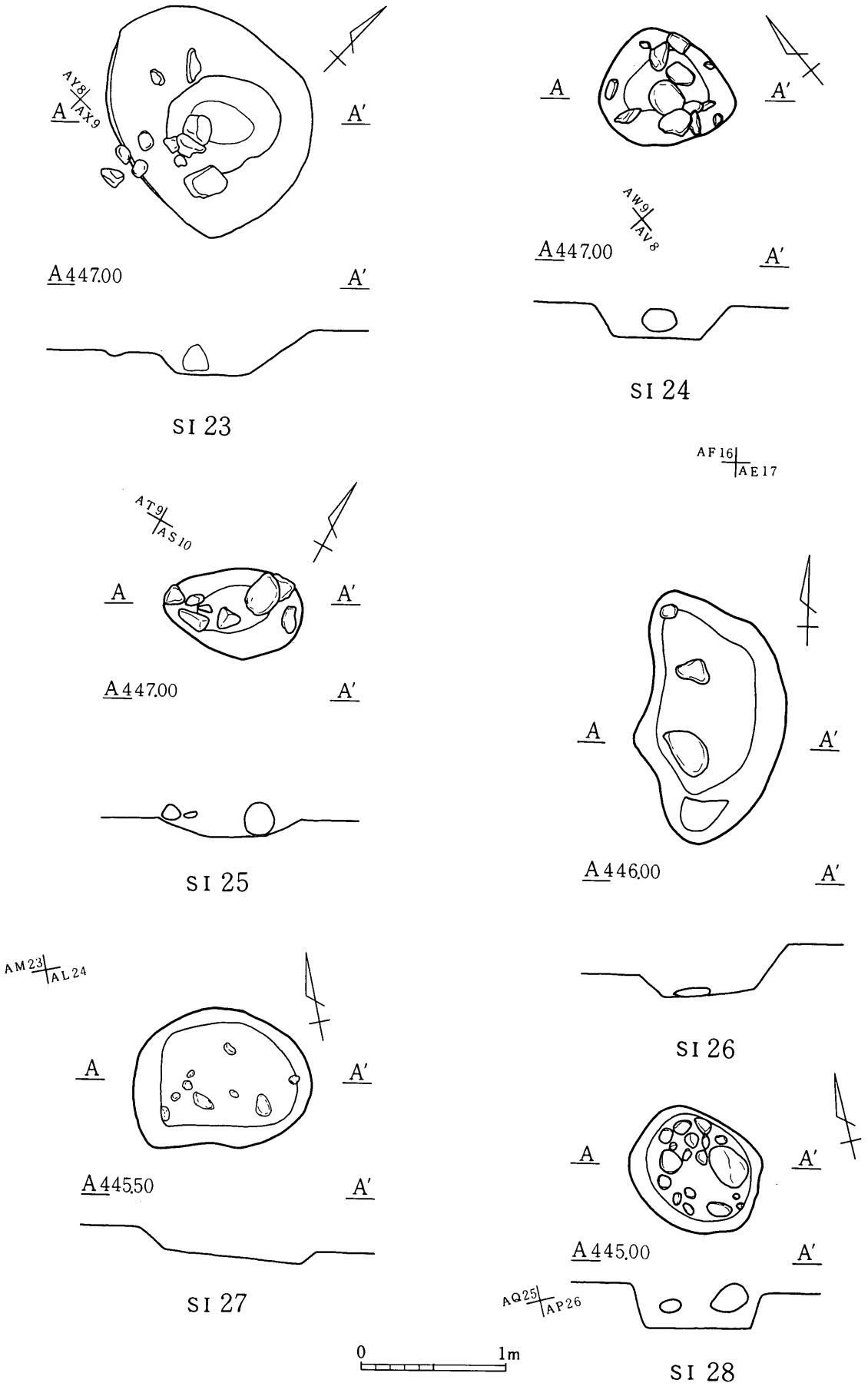
挿図36　S I 01・02・03・04・05・06



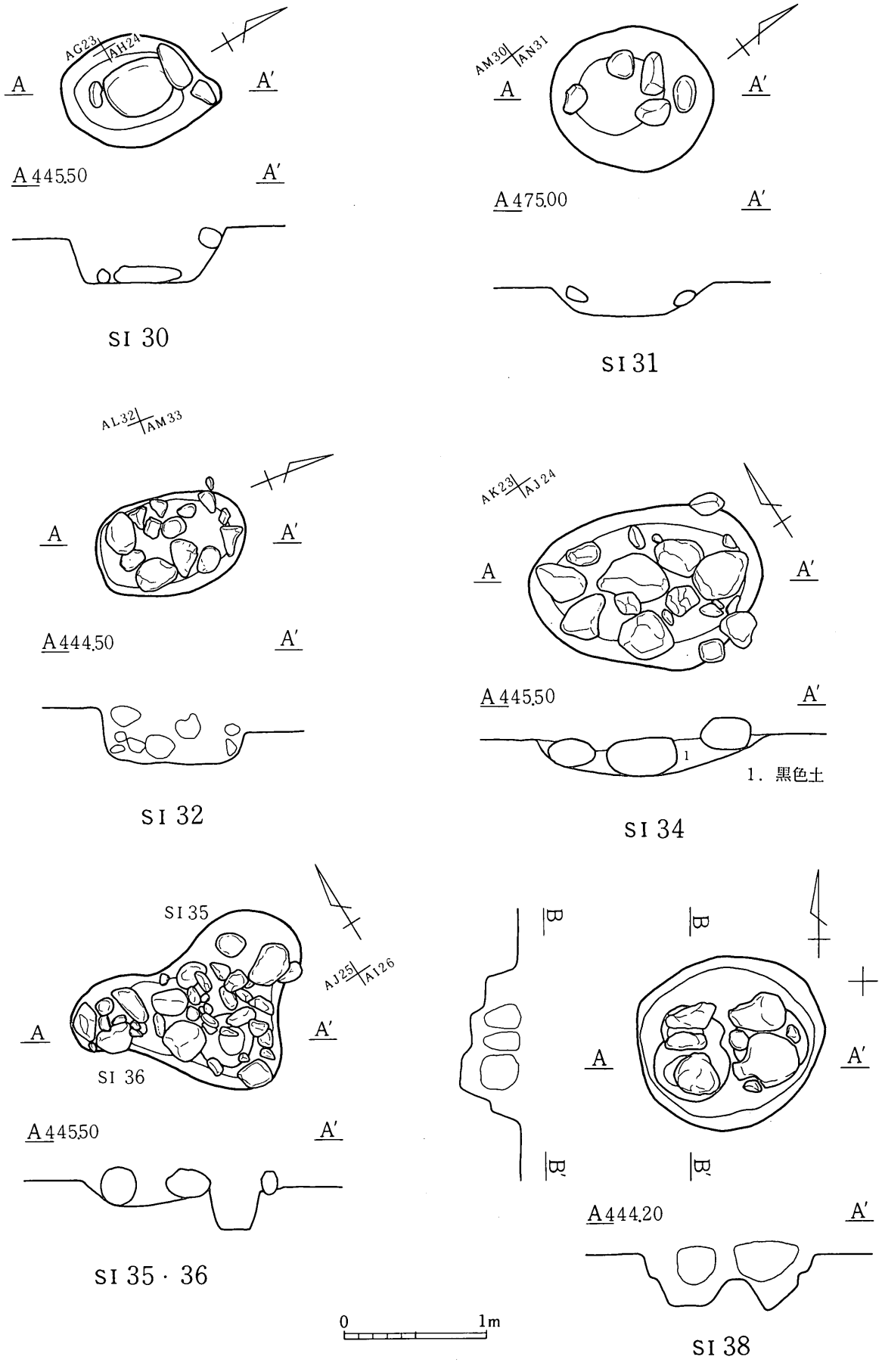
挿図37　S I 08・09・10・13・14・15・16



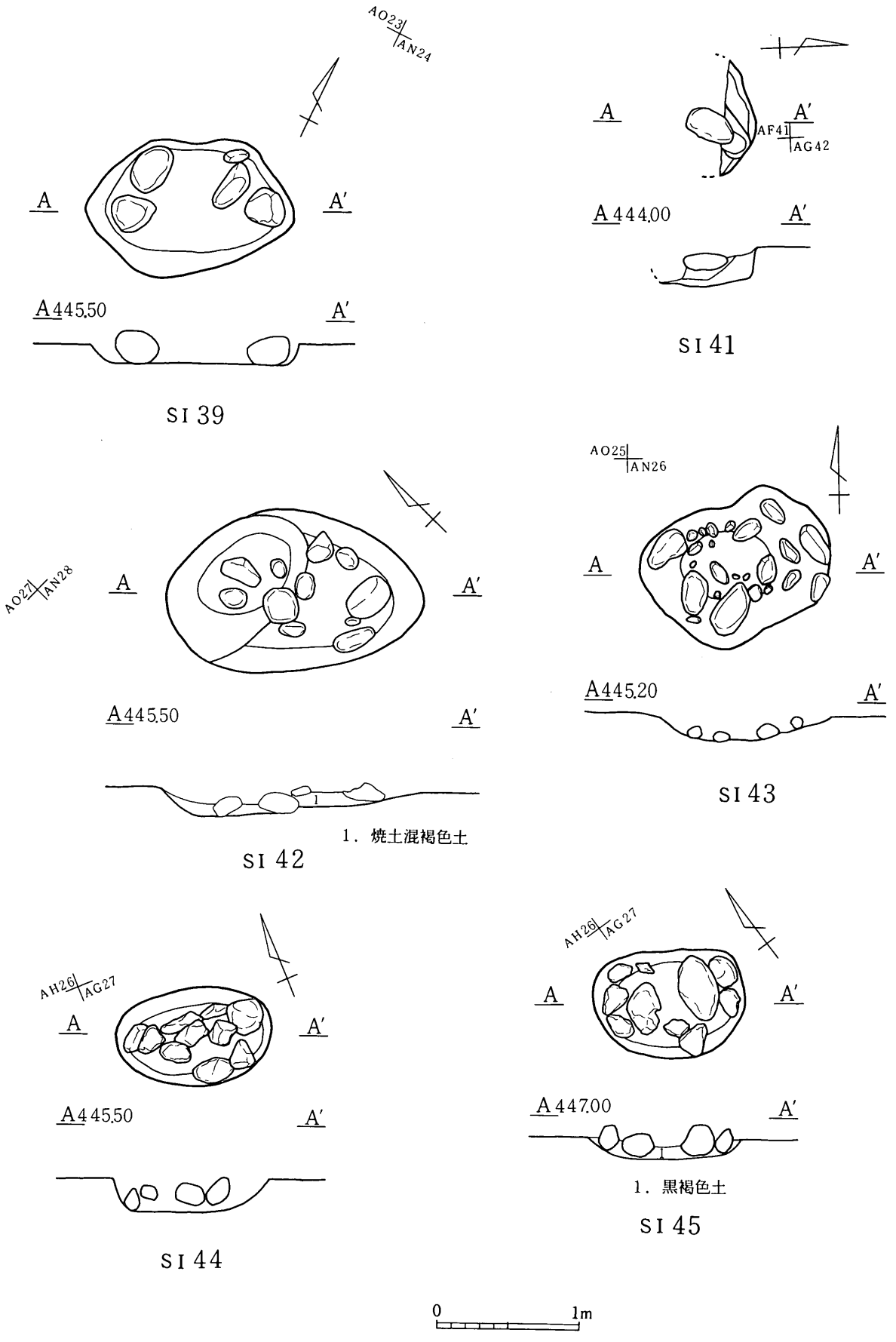
挿図38　S I 17・18・19・20・21・22



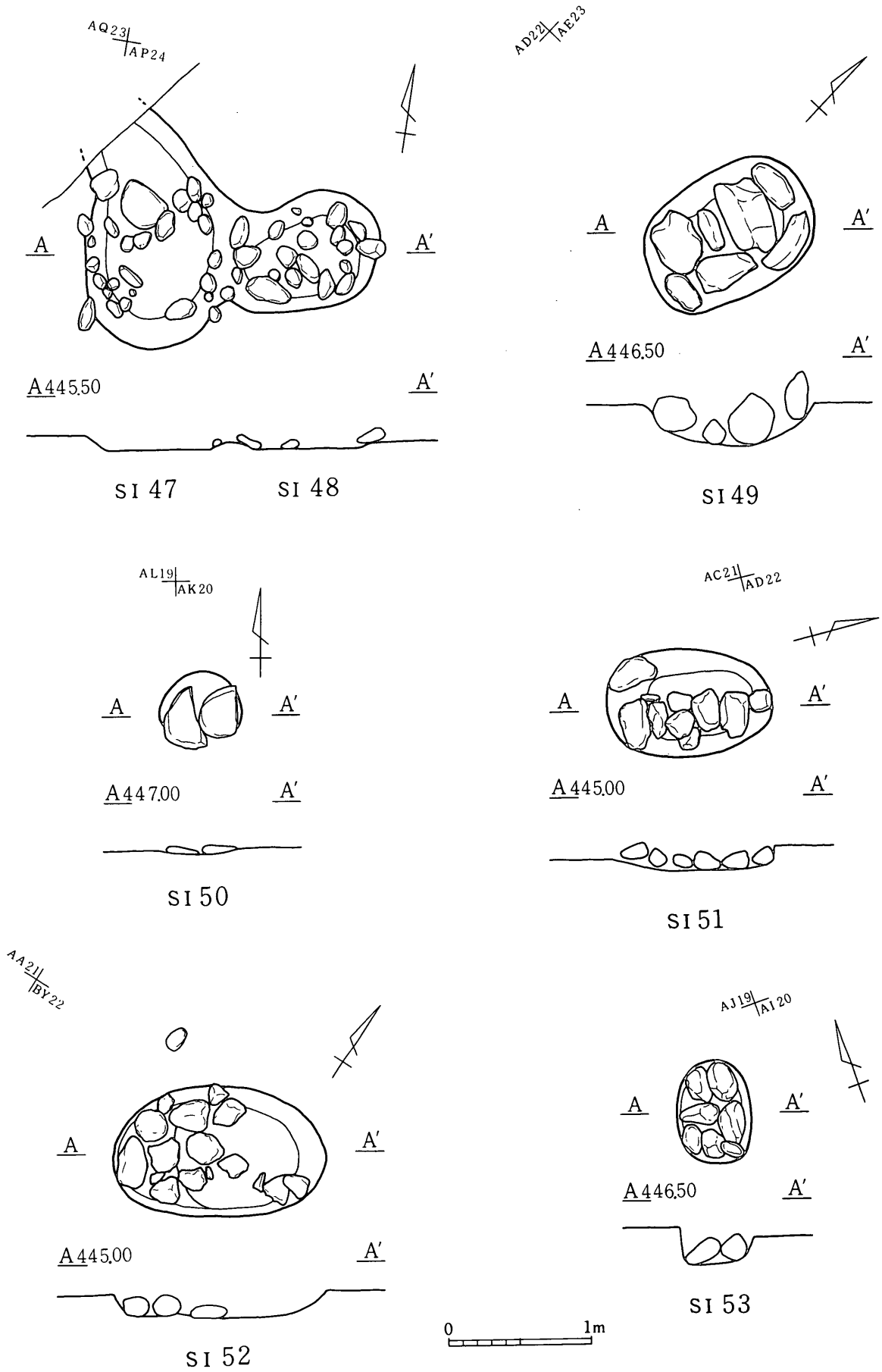
挿図39　S I 23・24・25・26・27・28



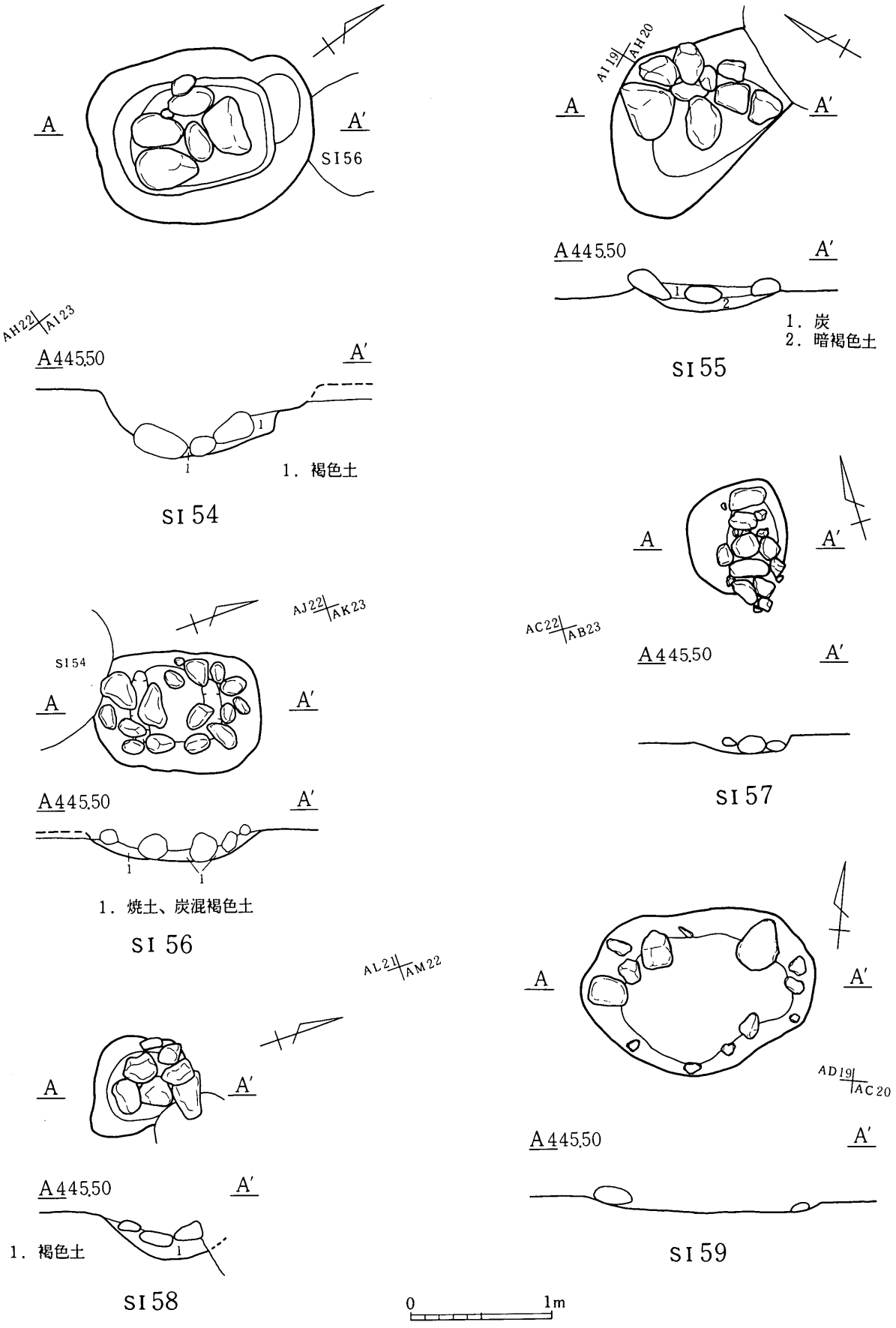
挿図40　ＳＩ30・31・32・34・35・36・38



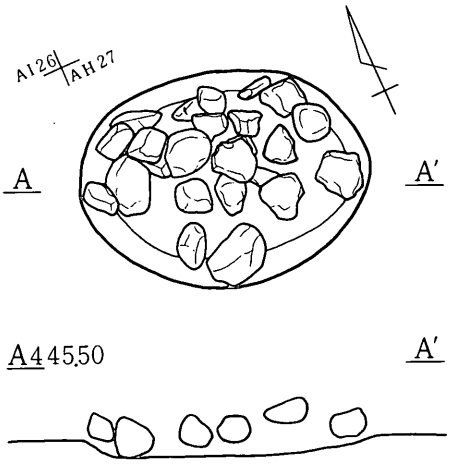
挿図41　S I 39・41・42・43・44・45



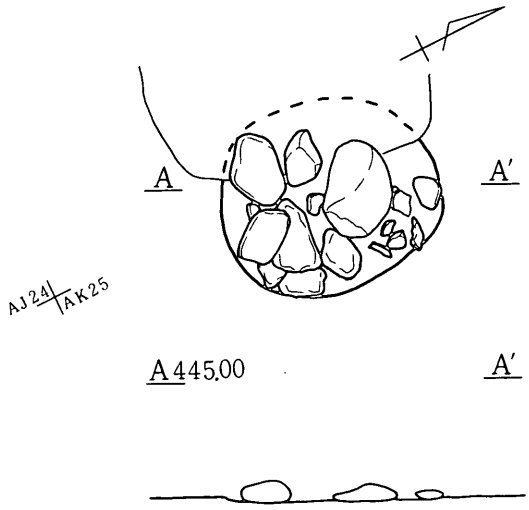
挿図42　S I 47・48・49・50・51・52・53



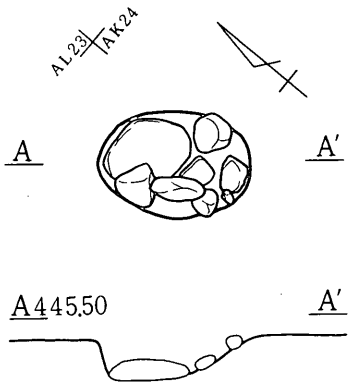
挿図43　ＳＩ54・55・56・57・58・59



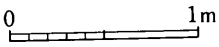
SI 60



SI 62



SI 63



挿図44　S I 60・62・63

K－１２

位　　置	茶柄山５号古墳の東側
規　　模	直径　mの円形、高さ　　裾の部分には拳大の石が円形に盛土を覆っている。
盛　　土	褐色土と人頭大の石を含む黒褐色土の２層が確認できる。上部中央に石が集中している。
出土遺物	
性　　格	大規模な火葬墓であろう。
時　　代	K－１３と同様な形態を持つことから中世と判断

K－１３

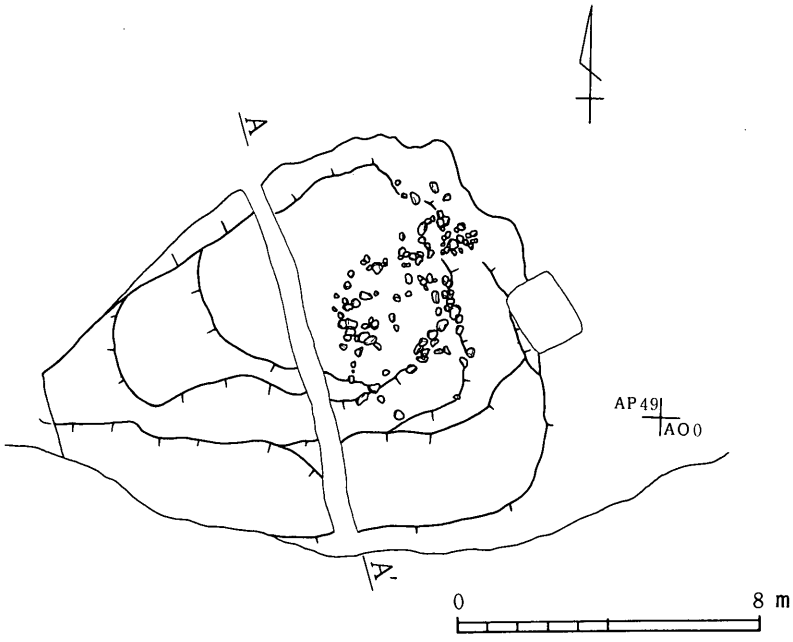
位　　置	K－１２の東側の斜面　用地境にかかる。
規　　模	直径　mの円形、高さ　と見られる。
盛　　土	
出土遺物	宋銭（火を受けている。） 弥生土器・須恵器坏（底部糸きり）・打製石斧は混入品と見られる。
性　　格	K－１２と同様な大規模な火葬墓であろう。
時　　代	宋銭が出土したことから中世と判断

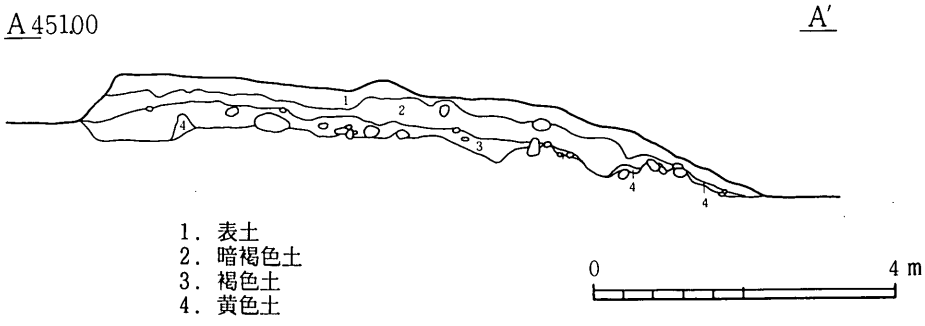
大規模な火葬墓について

中世における葬送の方法としては、土葬と火葬の両方が実施されていた。今回の調査で確認した中世の墓は、ほとんどが地面に穴を掘り石を並べた火葬墓であり、盛土は持っていない。盛土を持つものは土葬墓に多く見られ、土饅頭はその代表的な例である。いずれにしろ、単独で存在することはほとんどなく、一か所に多数の墓が集まり群をなしていることが多い。

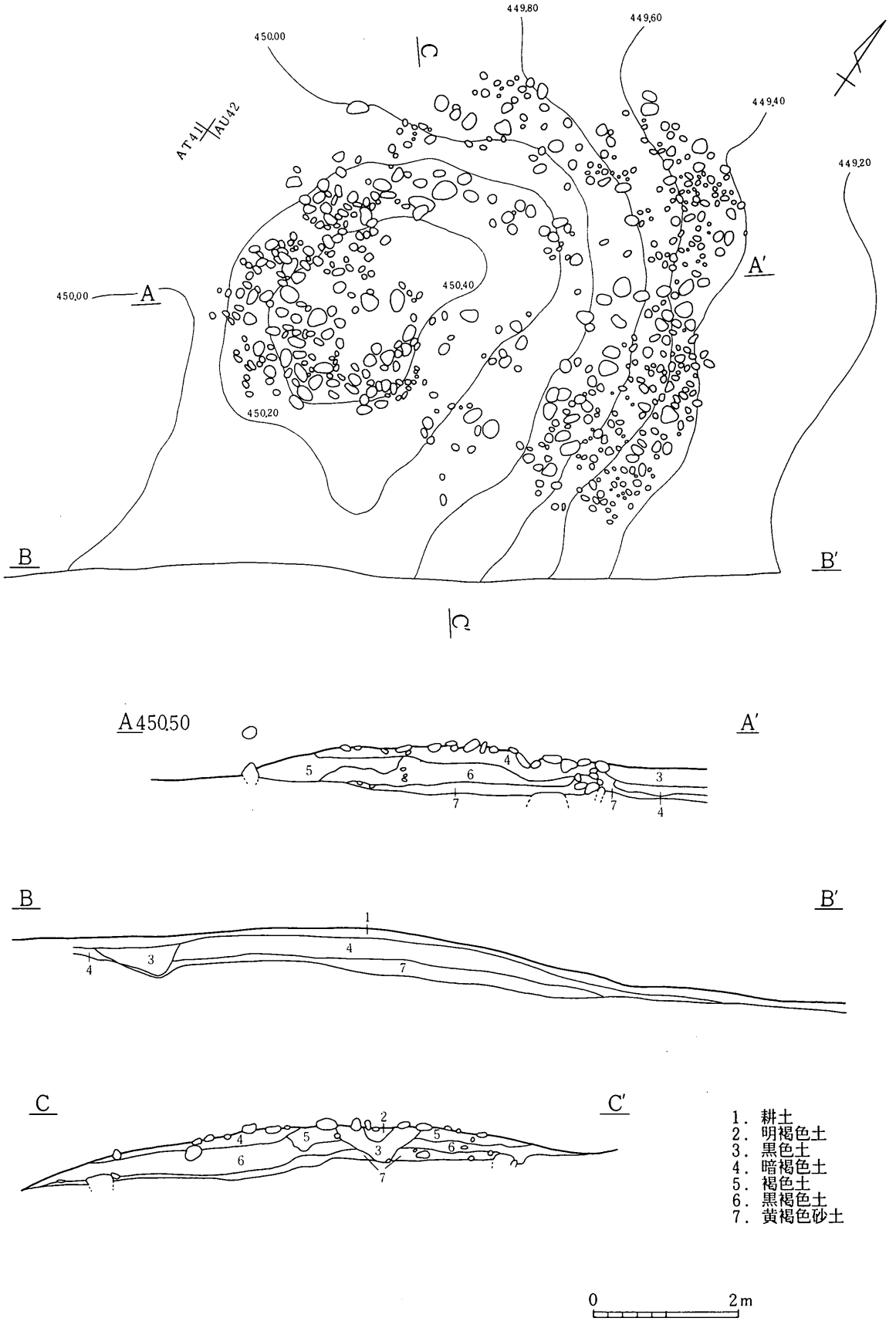
今回の調査では古墳群の中で、盛土を持つ火葬墓が２基並んで確認できた。造られた場所は段丘の縁で傾斜がはじまる場所である。そこに土を盛り、その上に葺石のように石を覆い被せた状況である。断割調査では、盛土中に主体部の確認はできず、盛土の下でも火葬施設や火を焚いた跡も確認できなかった。しかし、盛土と石の間に炭化物を含む黒褐色土の層が確認できていることから、別の場所で火葬にした灰を盛土中央部分に置き、その上に石を並べたと考えられる。また、頂上部分に石のない箇所があり、墓標・卒塔婆を建てた可能性もある。

いずれにせよ、このような形態の墓が造られたのは周囲に残っていた古墳の影響があったに違いない。





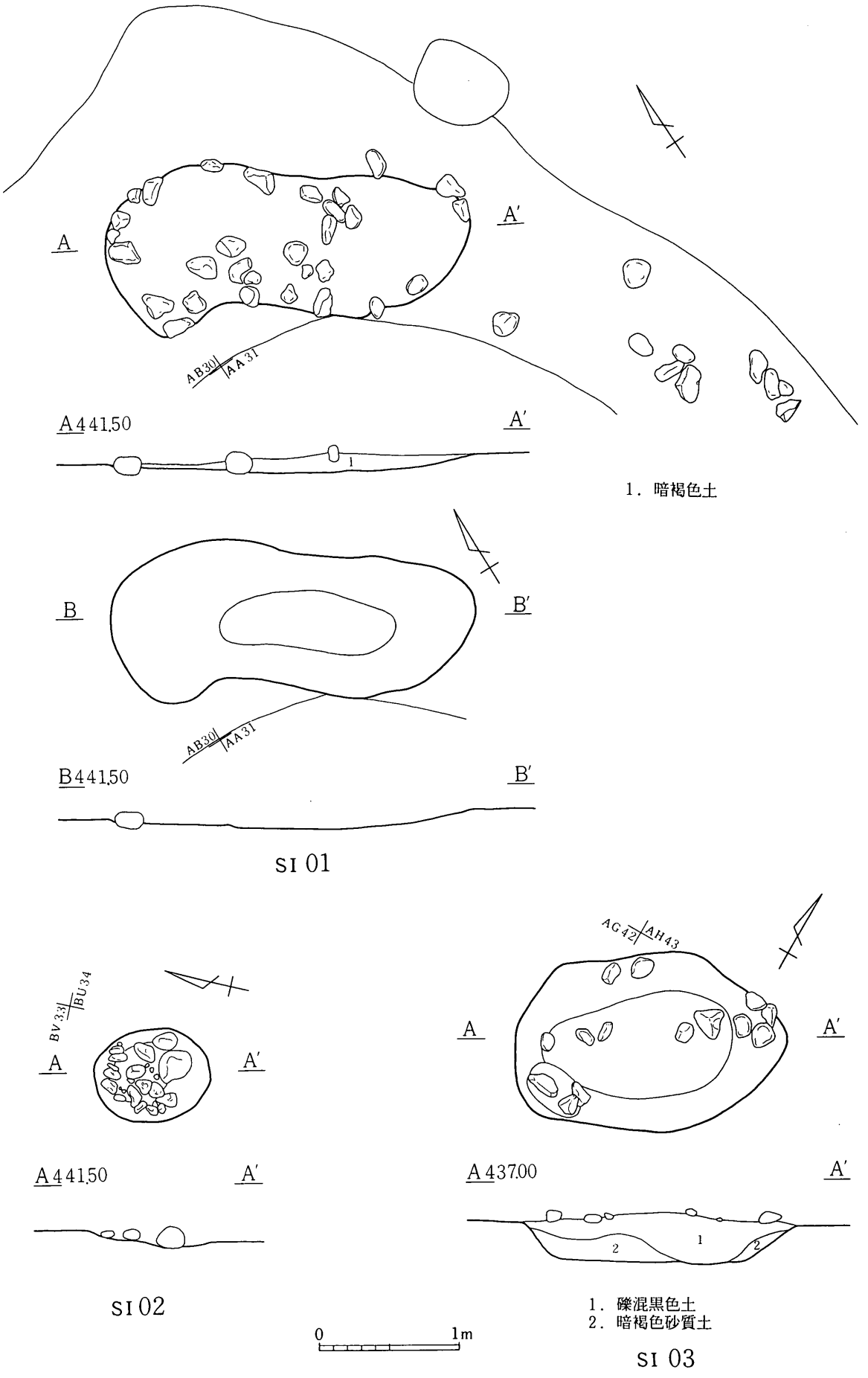
挿図45　K12


449.80
449.60
450.00
449.40
449.20
AT41
AU42
450.40
450.00
A
A′
450.20
B
B′
C
C′
A 450.50
A′
B
B′
C
C′
1. 耕土
2. 明褐色土
3. 黒色土
4. 暗褐色土
5. 褐色土
6. 黒褐色土
7. 黄褐色砂土
0
2m

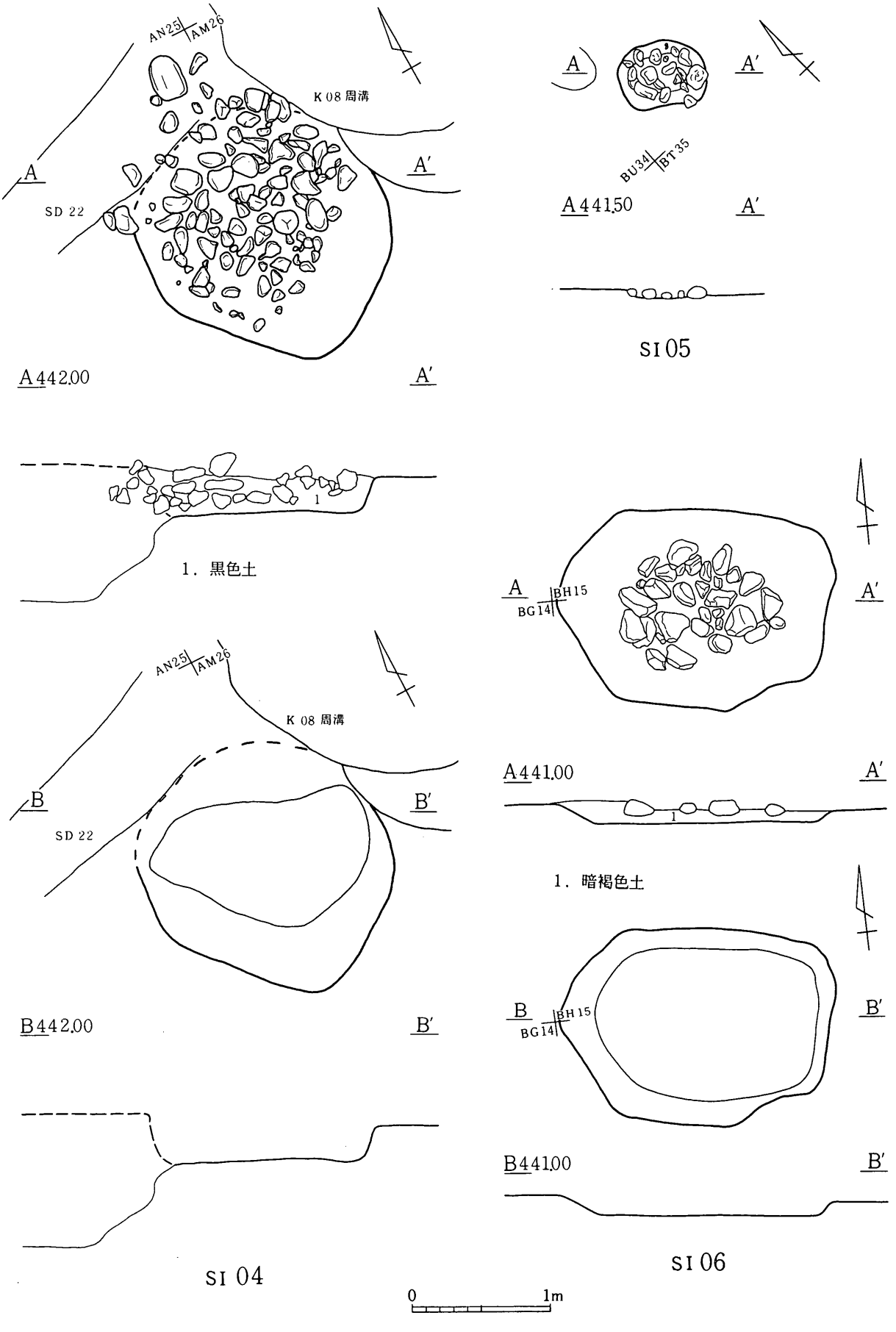
挿図46　K13

ＳＩ観察表　ＵＮＪ（上の城）地籍

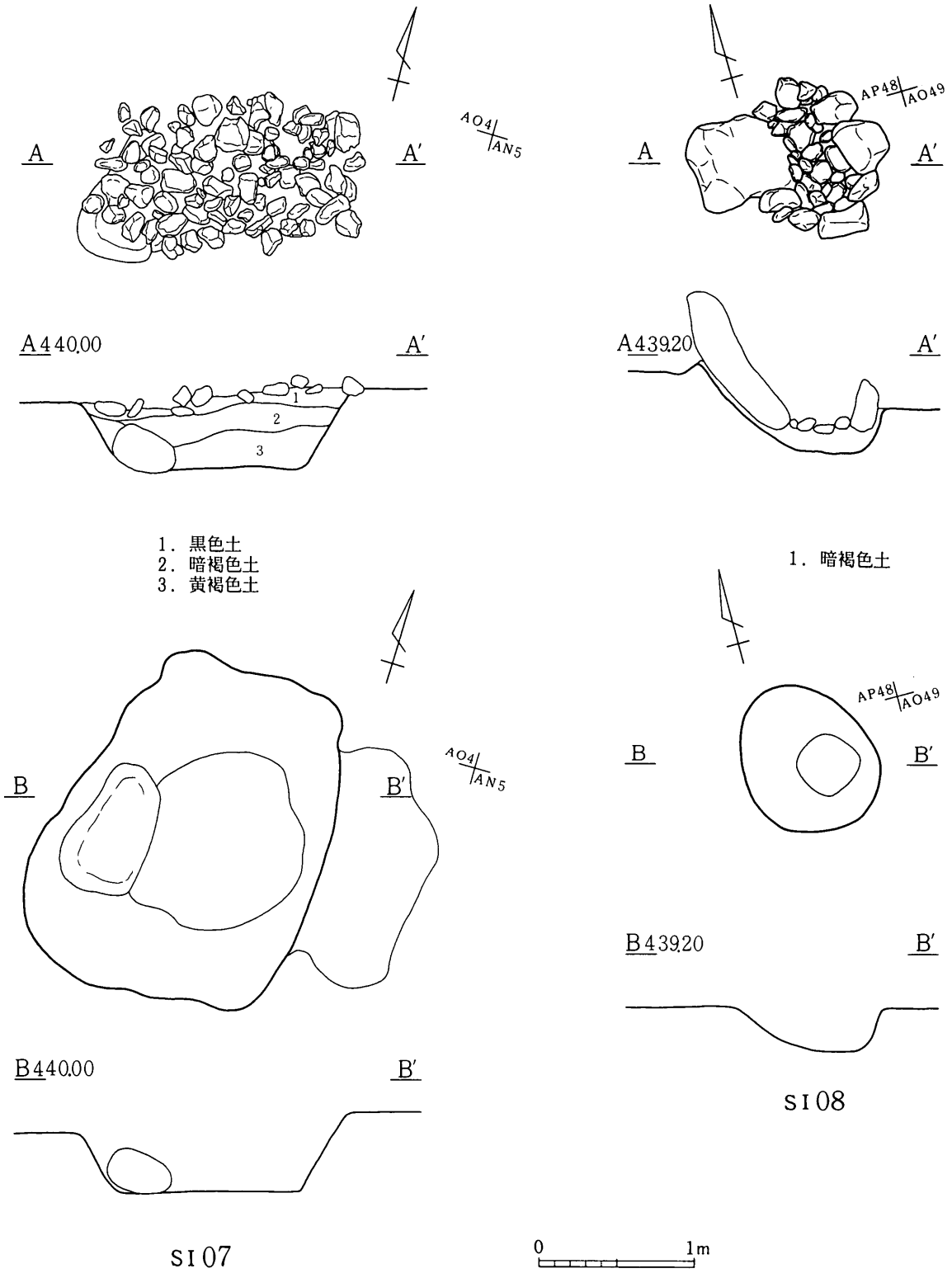
No.	図版	位置	平面形	規模Ｌ＊Ｗ＊Ｄcm	出土遺物	時代	性格	切合
1	47	AB-31	不整楕円A-b	257 × 90× 10		古墳	礫床	攪乱
2	47	BU-33	楕円形 A-b	82 × 65× 7		古墳	礫床	攪乱
3	47	AG-42	不整楕円A-b	192 × 125× 36			不明	
4	48	AM-25	不定形 A-b	180 ×(180)×25		中世	火葬墓	Ｋ８周溝
5	48	BU-35	不整楕円A-b	64 × 46× 5			不明	
6	48	BG-15	不整楕円A-b	195 × 140× 15			火葬墓	
7	49	AN-4	不定形 A-b	220 ×(182)×50			火葬墓	
8	49	AO-48	不整楕円A-a	114 × 100× 57	炭化物	中世	火葬場	堀の中
9	50	BC-23	不整楕円A-b	335 × 260× 8			不明	SI-23
10	51	BC-20	円形 B-b	114 × 101× 10			火葬墓	SI-20
11	51	AQ-2	不定形 A-b	95 × (78)×10			火葬墓	
12	51	BB-23	不整円形B-a	112 × 97× 24			火葬墓	
13	52	BB-22	不整楕円A-b	228 × 160× 37	蔵骨器	中世	火葬墓	SI-14
14	52	BA-22	不整楕円A-b	(250)× 160× 13			不明	SI-13
15	51	BB-22	不整楕円B-a	118 × 85× 25			火葬墓	
16	52	AR-39	円形 B-a	64 × 57× 20	渡来銭	中世	火葬墓	中央に穴
17	52	AK-35	不整円形B-b	96 × (70)×27	渡来銭	中世	火葬墓	
18	53	BD-21	不整円形A-b	(170)× 170× 15			火葬墓	G.P.SI-19
19	53	BD-20	不整円形A-a	(150)× 140× 18			火葬墓	SI-18
20	53	BE-21	不定形 A-a	200 × 160× 34(50)			火葬墓	SI-19,G.P
21	54	BB-21	楕円形 A-b	(130)× 105× 12			火葬墓	SI-22
22	54	BC-21	楕円形 A-b	240 × 132× 25	常滑大甕	中世	火葬	SI-21
23	50	BD-23	不定形 B-b	170 ×(150)×26			火葬墓	SI-9
24	54	AM-2	不整楕円A-a	(132)× 100× 50	渡来銭	中世	火葬墓	覆土上部にのみ石
25	55	BB-21	不整円形A-b	134 ×(110)×46			火葬墓	
26	55	AR-8	楕円形 B-a	127 × 66× 50			火葬墓	南側の石の下に穴
27	55	BE-43	隅丸方形A-b	220 × 130× 19			火葬墓	
28	56	BE-44	円形 B-a	176 × 172× 11	馬の歯	不明	不明	馬の歯は混入か
29	56	BD-45	楕円形 A-a	206 × 154× 44			火葬墓	上層に炭化物あり。
30	56	BA-43	楕円形 B-a	74 × 51× 13			火葬墓	覆土に炭化物含まれる。再葬か
31	56	BB-43	不定形 B-a	130 × 115× 15			火葬墓	２基か



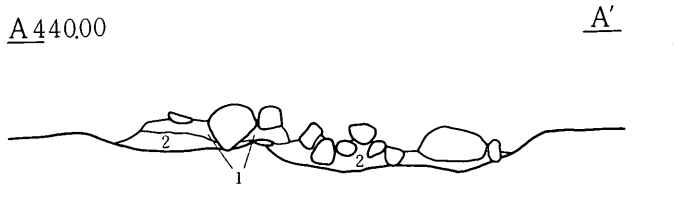
挿図47　S I 01・02・03



挿図48　ＳＩ04･05･06


A
A′
AO4
AN5
A440.00
A′
1
2
3
1．黒色土
2．暗褐色土
3．黄褐色土
B
B′
AO4
AN5
B440.00
B′
SI07
AP48
AO49
A
A′
A439.20
A′
1．暗褐色土
AP48
AO49
B
B′
B439.20
B′
SI08
0
1m

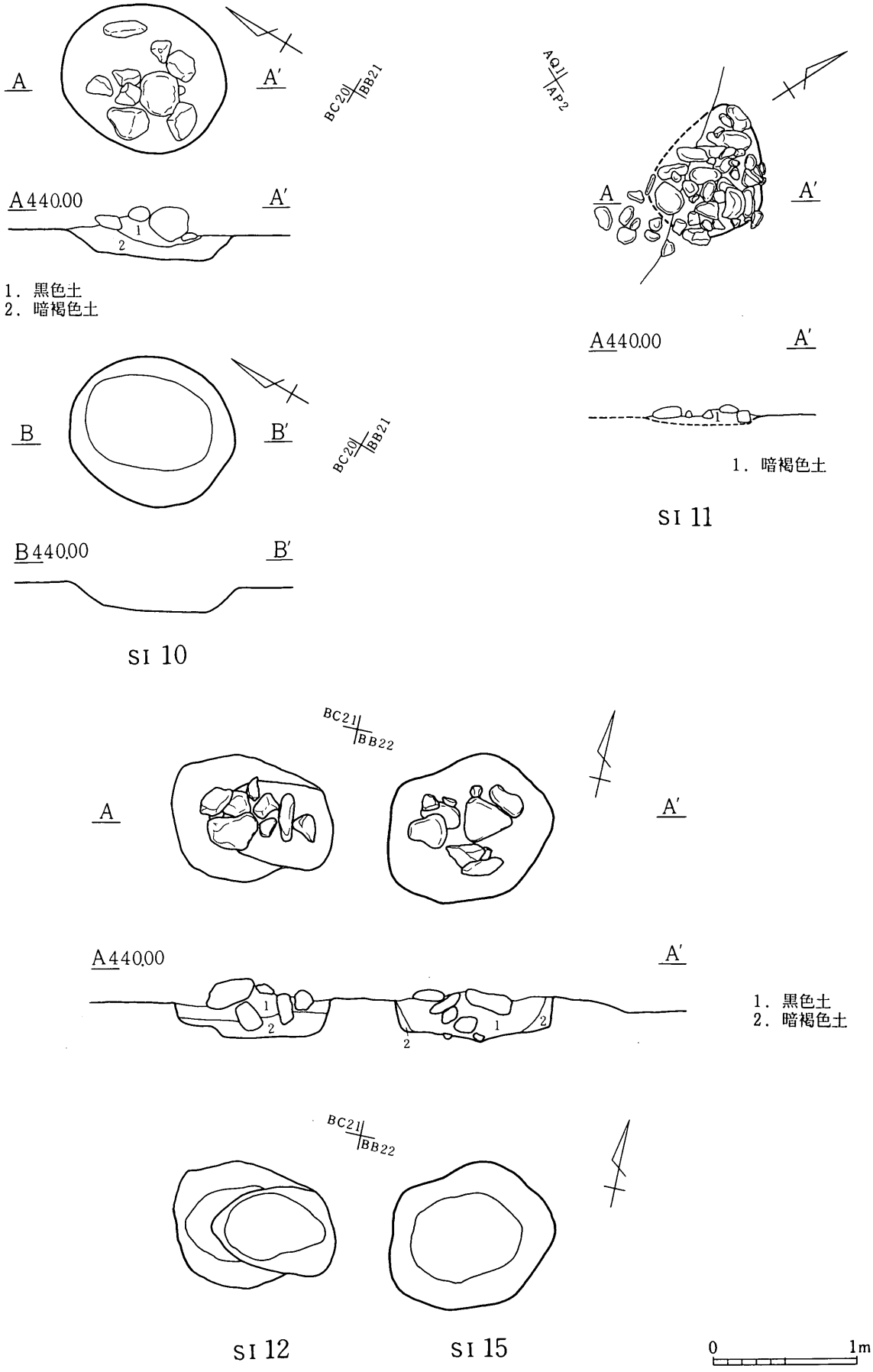
挿図49　S I 07・08



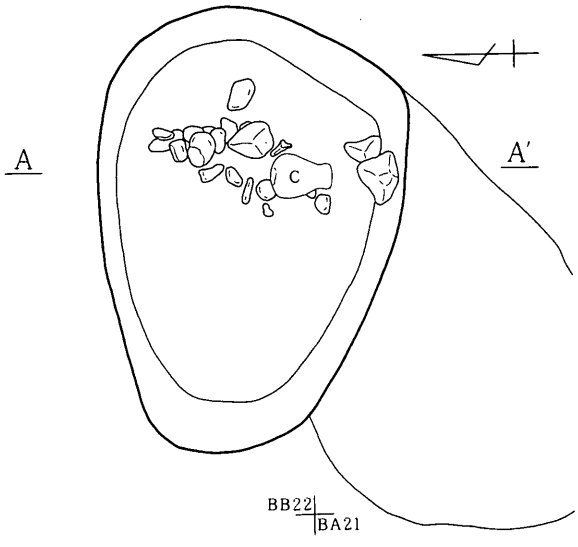
1．黒色土
2．褐色土

0　1m

挿図50　S I 09・23

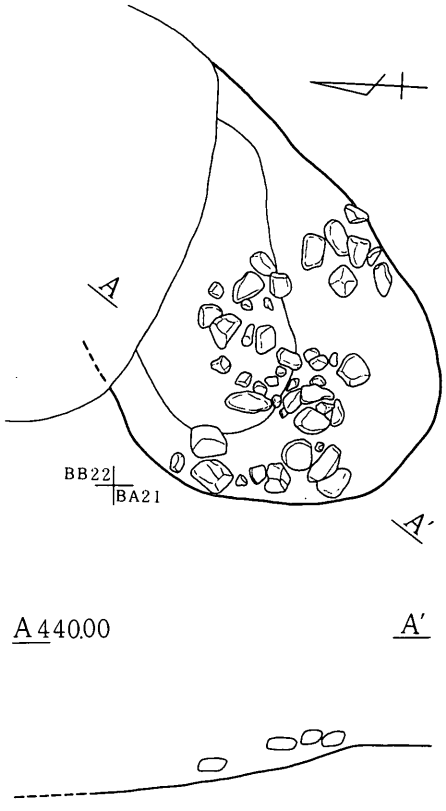


挿図51　S I 10・11・12・15

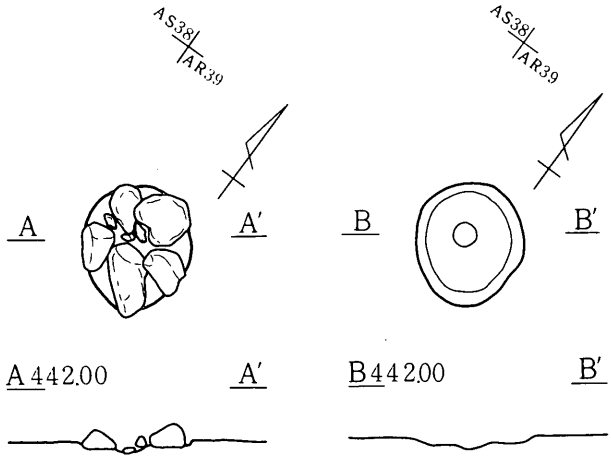


1．礫混褐色土
2．黒色土
3．褐色土
4．黒色砂質土（SI14覆土）
C．古瀬戸灰細四耳

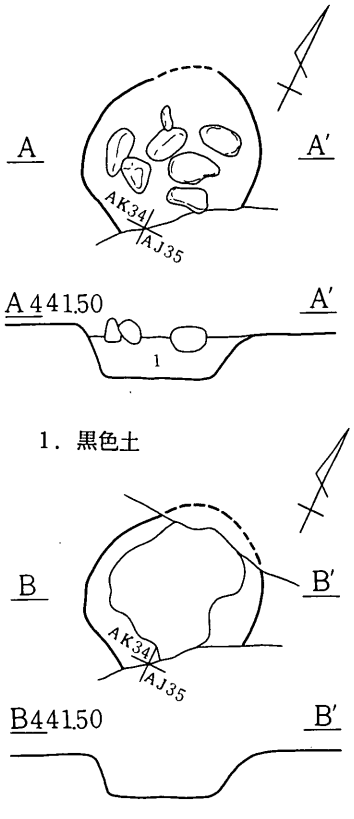
SI 13



SI 14



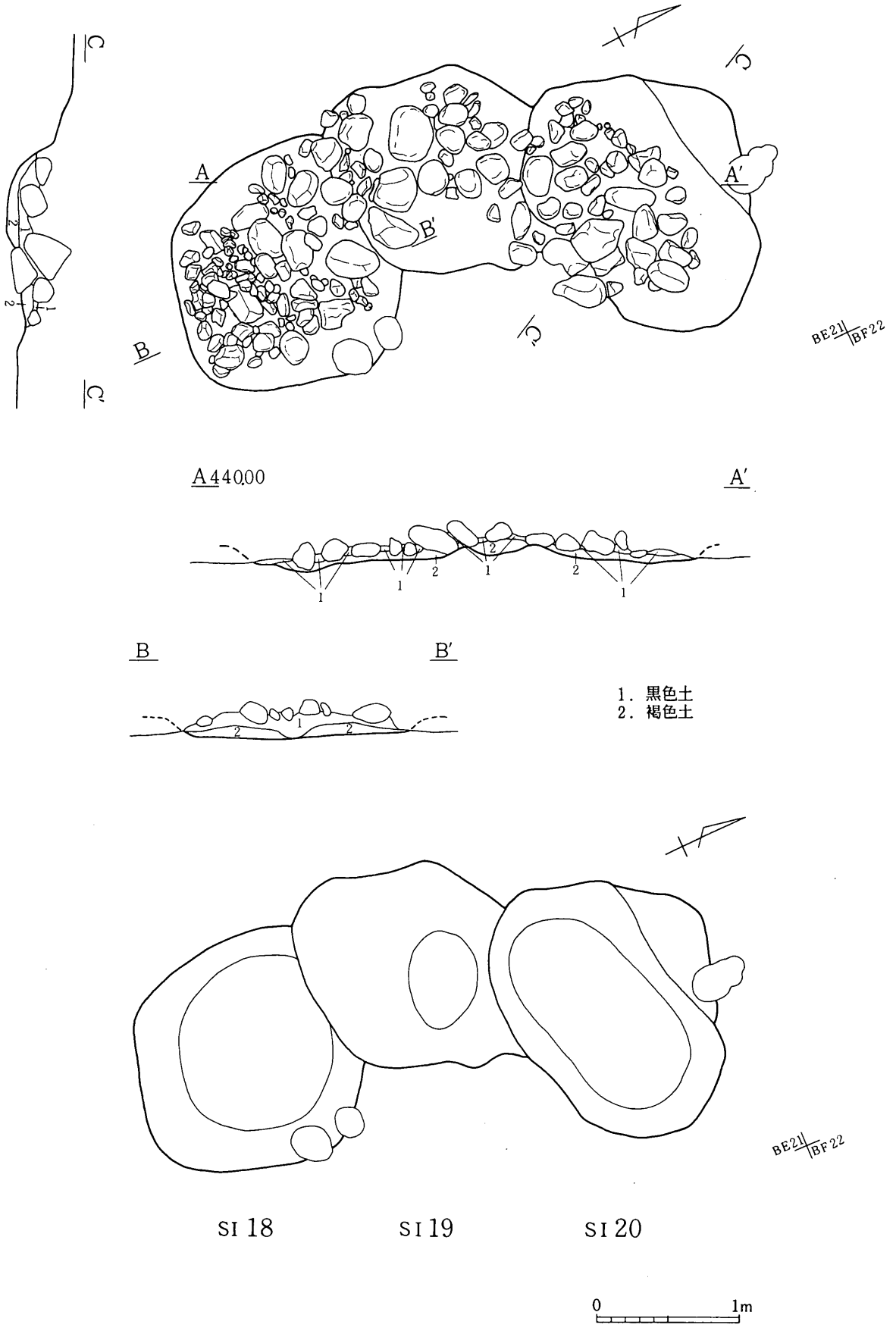
I 16



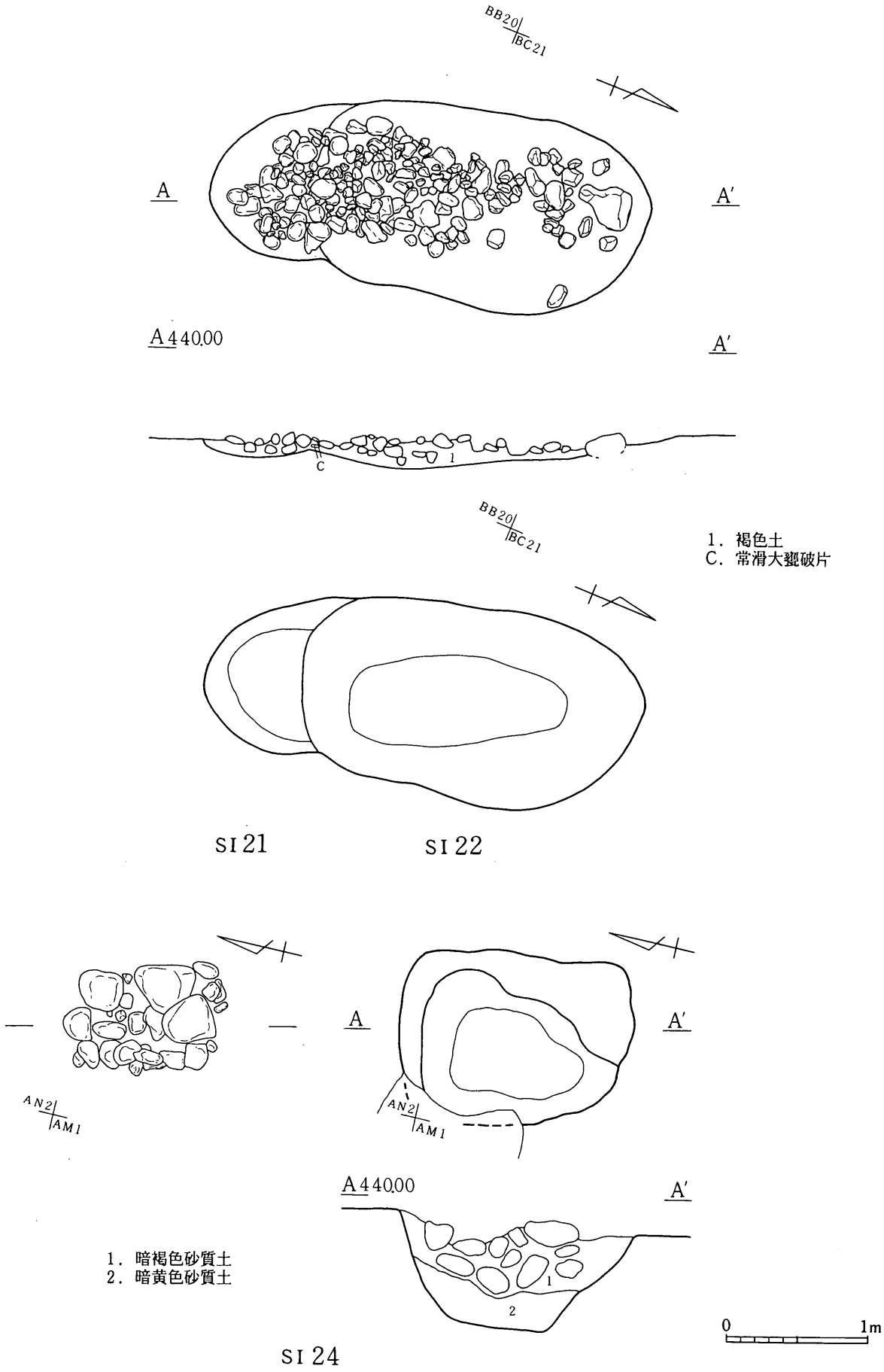
SI 17

0　1m

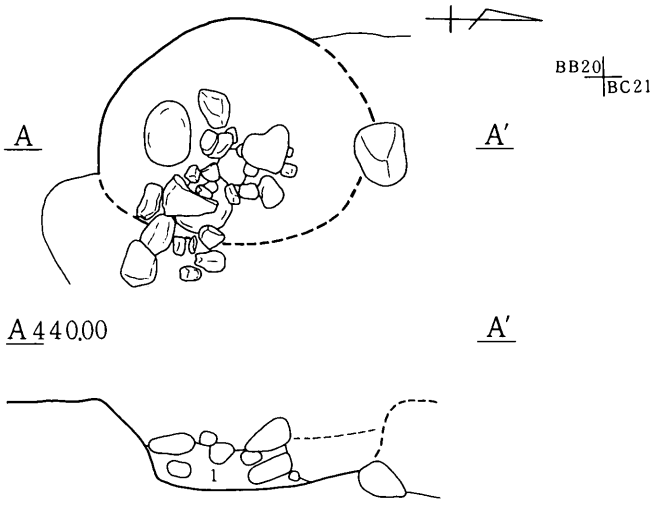
挿図52　S I 13・14・16・17



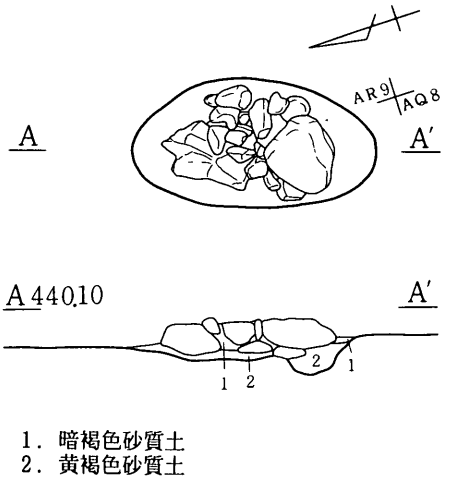
挿図53　S I 18・19・20



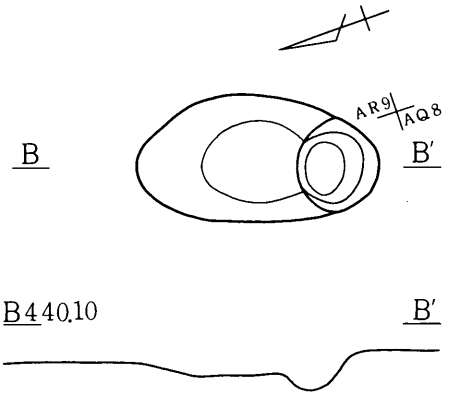
挿図54　S I 21・22・24



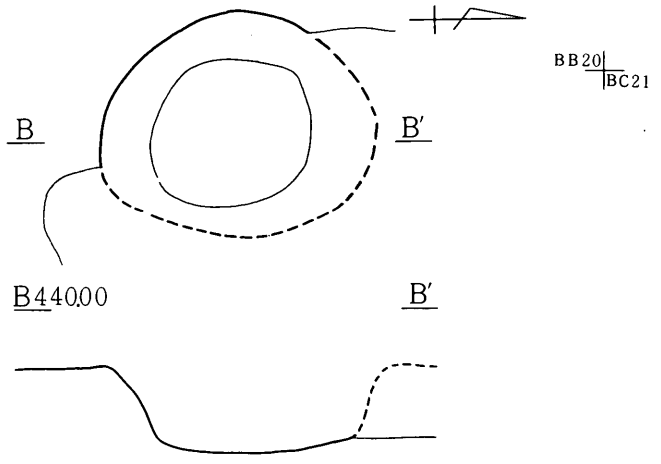
1．黄色土混褐色土



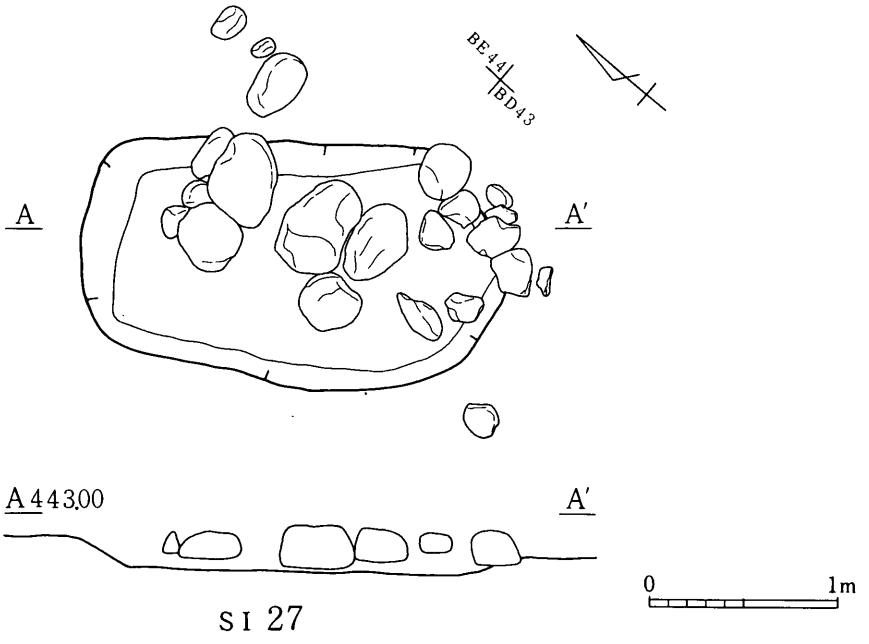
1．暗褐色砂質土
2．黄褐色砂質土



SI 26

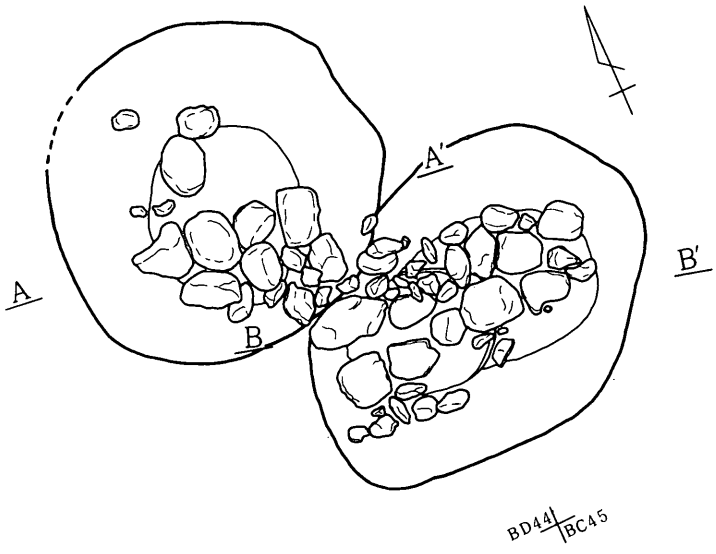


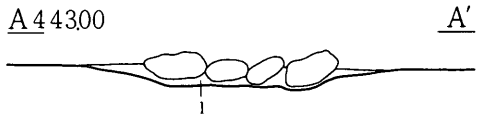
SI 25

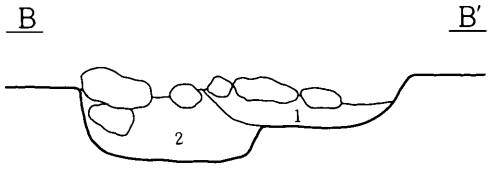


SI 27

挿図55　S I 25・26・27

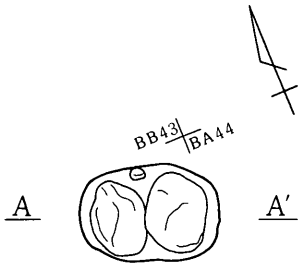


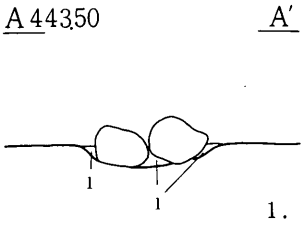




1．炭混黒色土
2．暗褐色土

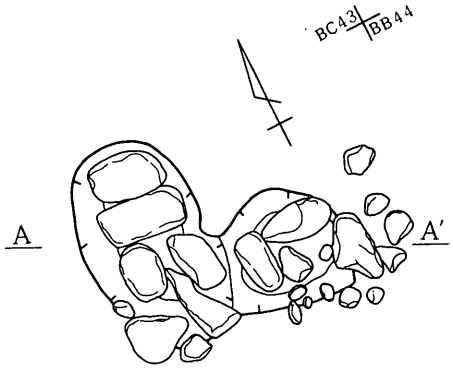
SI 28　　SI 29

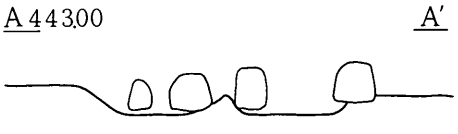




1．炭混黒色土

SI 30





0　1m

SI 31

挿図56　S I 28・29・30・31

松尾北の原遺跡で確認できた墓について

Ⅰ．中世墓の形態について

中世の墓はおおむね葬送方法により分類されてきたため、おおまかに火葬墓と土葬墓にわけられてきた。しかし、埋葬施設の形態から石を伴うもの（集石墓・石組墓)、坑だけのもの（土坑墓)、棺桶・骨蔵器を持つもの（木棺墓）などに分類されることもあった。

『長野県考古学会研究報告書２　１９６７．３　長野県考古学会　海戸・安源寺』においては、１２基の火葬墓と４基の土葬墓が報告されている。そのうちの中世中期末の火葬墓を次の２種類に大別している。

1　小石を敷き集めた特別の遺構を伴うもの

2　粘土の盛土の上に小石のかわりに砂利等を充当させ、直接火葬人骨を集積したもの

そして、土葬墓が散在し時代的にも断続的であるのに対し、火葬墓群は同時存在が認められているため、時代的な流れを土葬墓第１類（中世中期中）→火葬墓（中世中期末）→土葬墓第３類（近世中期）と規定し、変遷を示した。ここでいう土葬墓の分類は次のとおりである。

土葬墓第１類　長方形竪穴式墓壙に木棺を埋葬する。

2　墓壙が浅く、焼土・灰層にかこまれたもので、焚火を伴う埋葬施設。

3　浅い墓壙に木棺ではなく、梱包または被覆された状態で埋葬する。

この地に見られる土葬から火葬への変化は恐らく宗派の変化にもとづくものであろう。近代都市を除いて火葬の風習を強く示す地域は、浄土真宗の布教されている地域である。と林茂樹氏は述べた。

また、一の谷中世墳墓群遺跡報告書（１９９３・磐田市教育委員会）では火葬墓の構成から次の５種類に分類している。

1　火葬施設をそのまま墓にしたもの

2　地表下の小土壙や骨蔵器等が主体をなすもの

3　地表上の石塊の布設や石組み遺構などが主体をなすもの

4　地上の盛土が主体をなすもの

5　地上の標識・供養的な施設としての五輪塔・木標・立石等が主体をなすもの

さらには、中世の墓の分類は『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター東海の中世墓１９９４』で集石墓と土壙墓と火葬施設の３種類に分けている。

1集石墓　墓の上部施設構造に際し意識的に石を使用するもの。火葬骨埋納を主体とし、多くの場合蔵骨器を伴うが、土葬墓にも同様の施設を有するものがある。

2土坑墓　地面に土坑を掘り、遺体を埋葬するもの。土葬墓と同意に解釈される場合があるが、火葬であっても集石を持たず土坑を掘って埋納するものも含める。

3火葬施設　火葬をすることを目的とする遺構で、床面や壁面等が焼き締まっている。

今回の調査で墓と確認できた遺構は（ＳＫ・ＳＩをあわせて）２７５基になる。遺構の分布は調査範囲の東へ偏り、茶柄山５号古墳以東の段丘縁部の平坦部にのみ展開するが、遺構の配列には一定の規則

性は認められない。

時期は出土した銭貨・副葬品から判断するしかなく確実な時期はわからないものもあるが、中世から現代まで連続して構築していたことがわかる。調査時点でＳＩ（集石）として認識した遺構についてその形態を検出した石の状況から分類してみた。

使用されている石の数	十数個以上	A
	十個前後	B
石の並び方	方形・円形など意図を持って並べる	a
	アトランダムに置くもしくは穴を埋める	b（ＳＩ一覧表に書き込み済）

茶柄山地籍では、石の個数にかかわらずアトランダムに置かれたものがほとんどであるのに対し、上の城地籍のものは意図的に並べたものが目立つ。造られた場所の差か時期の差か詳細はわからないがなんらかの要素がはたらいている。

さらに蔵骨器を有する、有しないで分類を試みたが、有するものがほとんどなく、なんら傾向を見つけだすまでには至らなかった。

副葬品の有無では、半数近くに六道銭（全部が渡来銭）が入れられていた。しかし、火を受けたものとそうでないものがあり、葬送の違いが認められる。その他出土品として確認できたものには鉄釘があり、これは棺桶に使われたものと判断できる。したがって釘の有無も葬送の方法の違いが起因するものであろう。

II．中世墓の立地について

先程紹介した『一の谷中世墳墓群遺跡報告書（１９９３・磐田市教育委員会)』によれば、火葬墓の立地条件をつぎのとおりに分類してある。

1、独立丘陵　CF　三重県志摩郡磯部町上之郷の侍岡墓地

2、小高い丘陵　CF　三重県津市坂本山墓地・北九州市白岩西遺跡・京都府與謝郡加悦町福井墓地

3、丘陵のなだらかな傾斜面　CF　岩手県江刺市薬師堂山・山形県鮑海郡遊佐町宮山坂墓地・中野市安源寺墓地・大阪府茨木市佐保クルス山墓地・袋井市権現山・浜北市勝栗山

4、川沿いや谷間のかたわらの台地　CF　滋賀県蒲生郡日野町大谷墓地

5、山嶽中　CF　佐賀県神崎郡東背振村雲仙寺跡

そして、理想的条件を『人里・人々の集落地と接続せず、しかも集落地と著しく隔絶していない所』と規定した。

今回の火葬墓群を上記の立地条件に当てはめたとすれば、丘陵のなだらかな斜面と考えて良いだろう。この山中には古墳が存在しているのみで、建物址等の居住施設は確認できていないことから人里からは隔絶した場所であったに違いないが、周辺には居住域があったとも考えれる地理的条件で火葬墓群を形成するには好都合であったにちがいない。

III．江戸時代の墓について

江戸時代以降の葬送形態は土葬墓が中心となり、火葬はごく稀みられるだけである。骨蔵器が出土する

のは火葬のあった証明でもあるが、今回もごく小数が確認できただけであり、遺構としてはほとんど捉えられなかった。

『江戸を掘る』（小泉　　著）によれば、埋葬の方法として次の６種類が主にみられる。

棺桶への収納
平棺への収納
陶磁器製蔵骨器への収納
曲物製蔵骨器への収納
土壙への直葬
土壙への再葬

今回の調査では遺構として確認できたのは棺桶への収納・平棺への収納の２種類であるが、遺物として蔵骨器も確認できた。棺桶（丸棺）は遺体を座らせたものであり、平棺は寝かせたものである。数では圧倒的に丸棺が多いことから、平棺による葬送は特別な方法であることを意味している。

土葬が普通に行なわれている近世・近代においての火葬は、伝染病感染者などの特別な場合が考えられる。しかし、火葬施設が確認できていないことは、この時期においては火葬場と墓地とが別々であることを示しているものと言える。

近世・近代の土壙墓の種類

埋葬の形態　　ＣＦ

	座　棺	寝　棺	蔵骨器	集石墓
棺桶の形態	円筒形	直方形	なし	なし
平面形	円形	長方形	なし	石を並べる
遺体の状況	胡座をかく	伸展葬	焼骨（改葬）	焼骨（改葬）
時代	近世、近代	近世、近代	中世、近世、現代	中世

なお、松尾地区においては昭和３０年代まで土葬が実施されていた。現在は土葬が禁止され、火葬骨の納骨になっている。墓石は江戸時代後期のものから現代のものまであったが、今回の工事に伴い改葬がなされたが、下部施設までは移動できていないものが多かった。

ＳＤ（溝址）

溝址および溝状址。旧河道も含む。堀については、上の城跡へ記載。

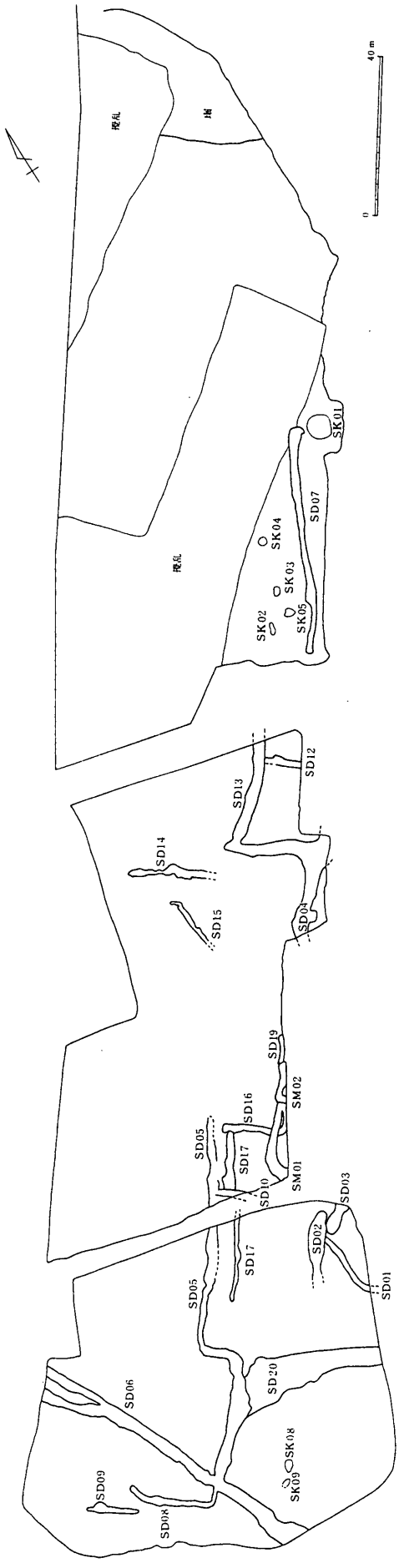
検出できた溝址の多くは、砂を含む埋土を持ち、旧河道であったことがわかる。しかし、段丘上を西から東（段丘壁と平行）に走る自然の溝が存在すること自体不自然である。これらの溝址は、人為的につくられた可能性があるものの、多くは耕作による攪乱と判断できる。

ＳＤ一覧表　ＭＫＨ地籍

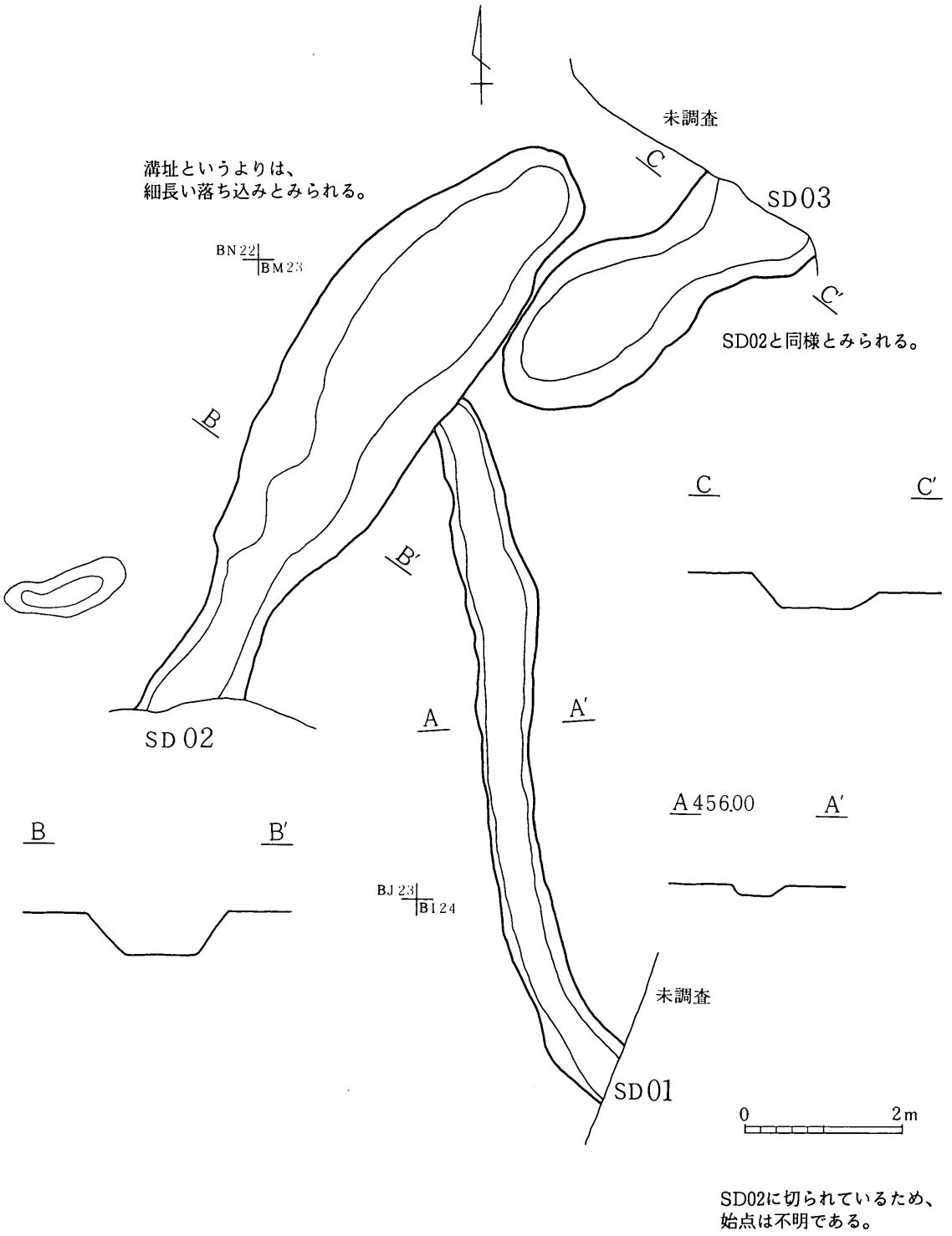
No.	図	検出位置	長×	幅×	深	断面	形態・覆土等	方向	出土遺物	時期備考
01	58	BI24	(840)	78	19	鍋底形	用地外に延びる・褐色土	北から南		不明
02	58	BM23	(850)	212	56	鍋底形	攪乱に切られる・褐色土	南西から北東		落ち込みの可能性も
03	58	BM24	(400)	170	45	鍋底形	用地外に延びる・褐色土	南西－北東		不明SD02と同じ
04	61	AH34	(980)	220	52	逆台形	用地外へ延びる・褐色	北西から東南		SD19に切られる
05	59	BN16	(2300)	150	61	逆台形	造成の落ち込み・黒色土	北北東－南南西		SD08を切る区画の溝
06	60	BC04	(3500)	430	82	U字形	用地外に延びる・砂	北西から南東		旧河道
07	61	BA44	(2800)	140	55	逆台形	攪乱に切られる・暗褐色	南南西から北北東		崖と平行に延びる水路
08	60	BD13	(3400)	173	69	逆台形	コ字形に曲がる・黒色土	北西-南東、南西から北東、北西-南東		区画の溝の可能性大
09	62	BD04	660	82	43	U字形	・黒色土	東北東－西南西		耕作の跡か
10	63	BS20	(260)	90	43	逆台形	・褐色	北西		SD01へ続く可能性も
		欠番								
12	62	AO36	(420)	97	12	逆台形		北西		
13	62	AP35	(1290)	140	66	逆台形		北東		
14	64	AL27	(950)	130	53	逆不整台	造成により削平・砂含む	西北西から東南東		旧河道か
15	64	AH26	(850)	67	13	逆台形	造成により削平・砂含む	北から南		旧河道か
16	63	BU23	(800)	130	53	逆台形	L字に曲がる・暗褐色	北西～南東、北東へ曲がる		SM01を切る
17	63	BO19	(1760)	150	22	逆台形		北東		
18	64	BX27	(370)	(40)	17	逆台形	用地堺で完掘できず			溝の可能性低い、SKか
19	61	AI33	(1260)	166	46	逆台形	用地外に延びる・暗黄色土	北東－南西		不明SD04を切る
20	65	BF18	(1100)	390	35	逆台形	造成により削平・暗褐色	西北西		北の原K周溝の一部か

ＭＫＨ　ＳＤ２０について

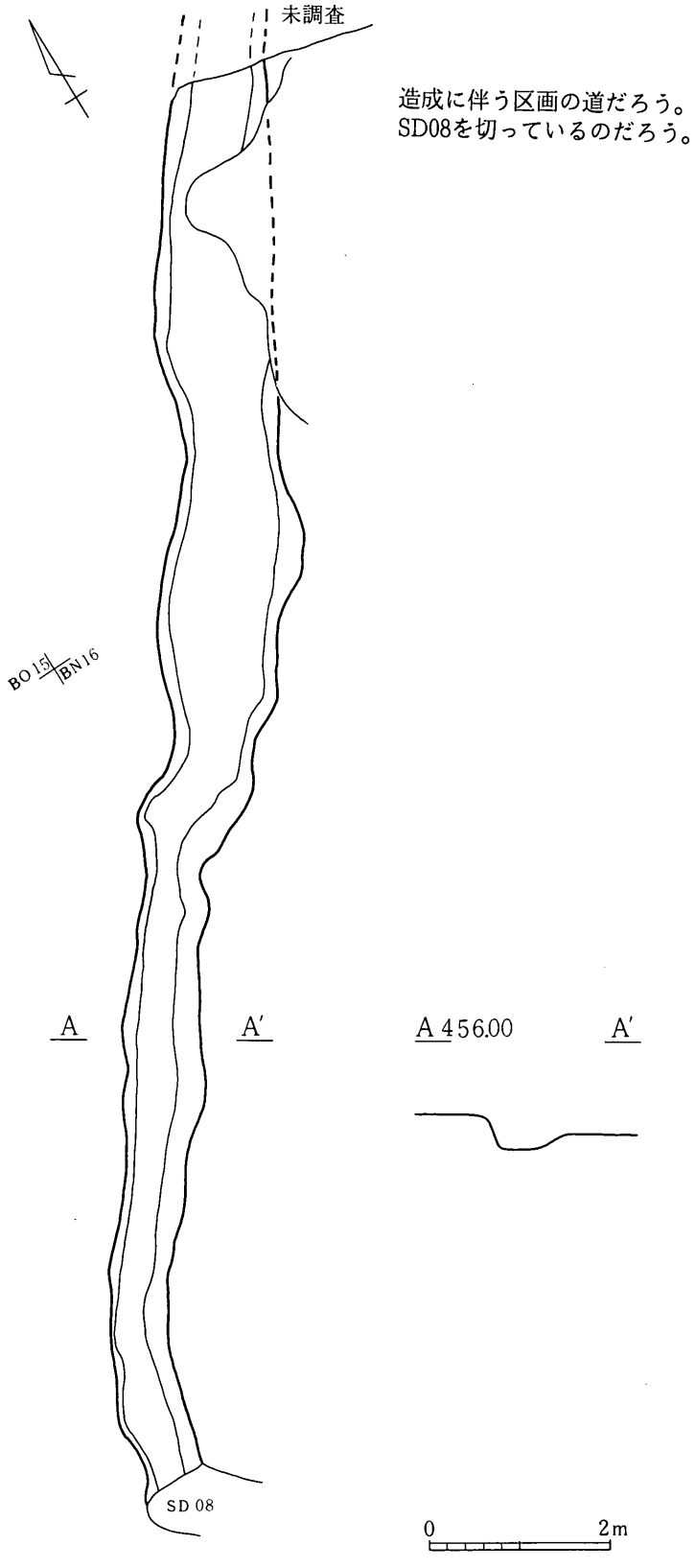
下伊那史の記述によると、この位置に北の原古墳が所在したことになっている。宅地があったため、その造成により削平されてしまったものとみられる。そのなごりがＳＤ２０と考えられる。


撹乱
撹乱
撹乱
SK01
SD07
SK04
SK03
SK02
SK05
SD12
SD13
SD14
SD15
SD04
SD19
SM02
SD16
SD05
SD17
SM01
SD10
SD03
SD02
SD01
SD17
SD05
SD20
SD06
SK08
SK09
SD09
SD08
0
40 m

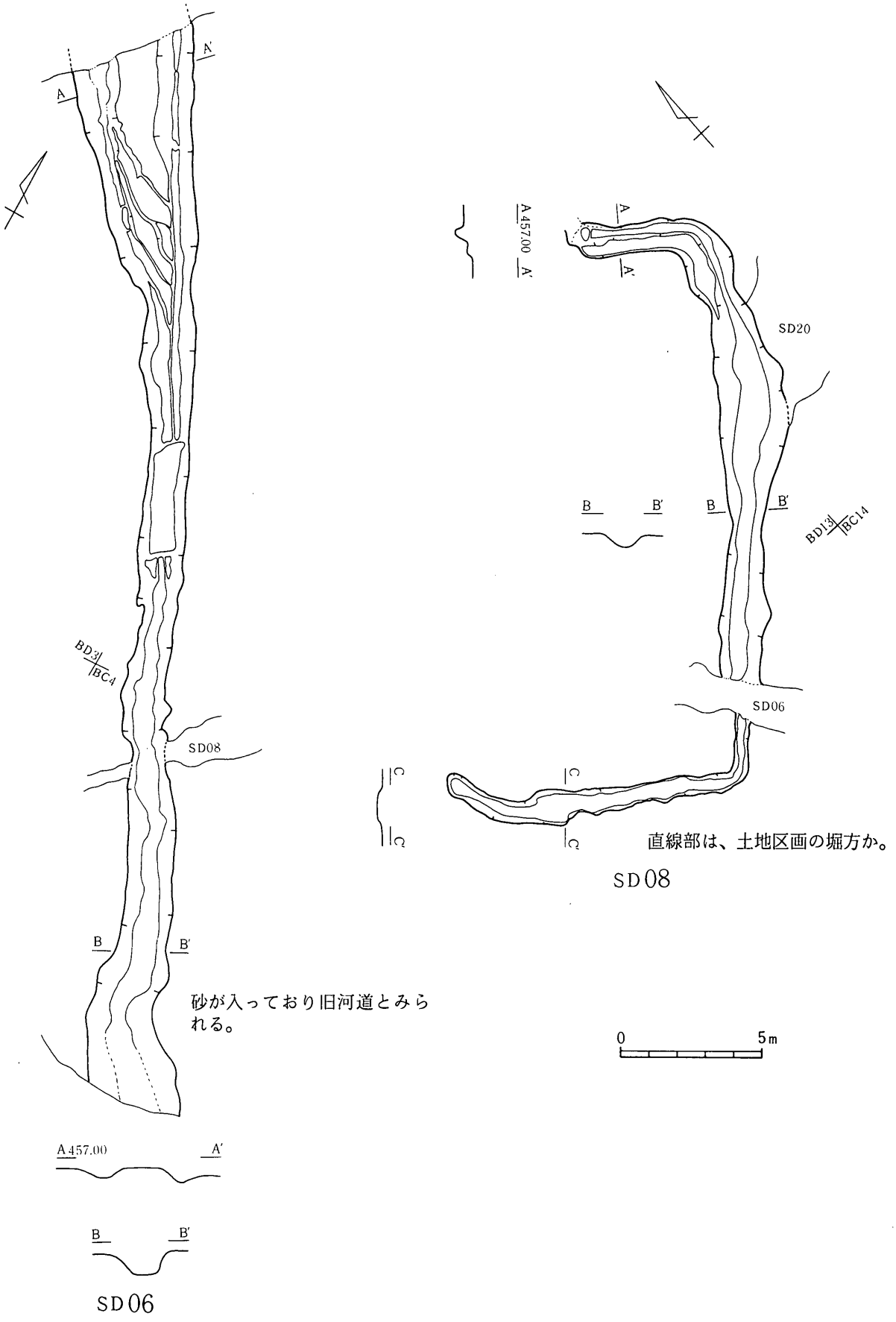
挿図57　ＭＫＨ分布図



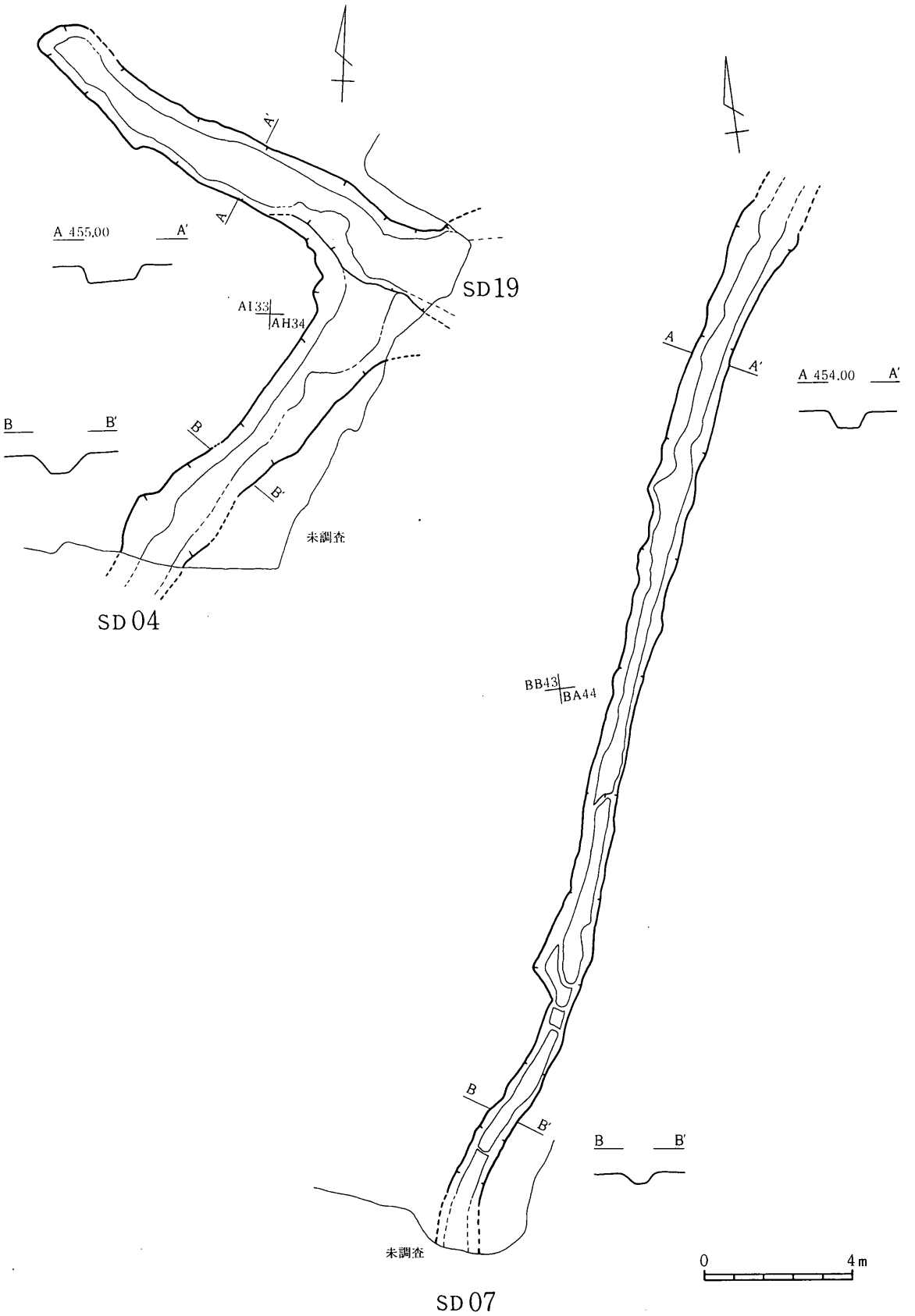
挿図58　ＳＤ01・02・03


未調査
造成に伴う区画の道だろう。
SD08を切っているのだろう。
BO 15
BN 16
A
A′
A 456.00
A′
SD 08
0
2m

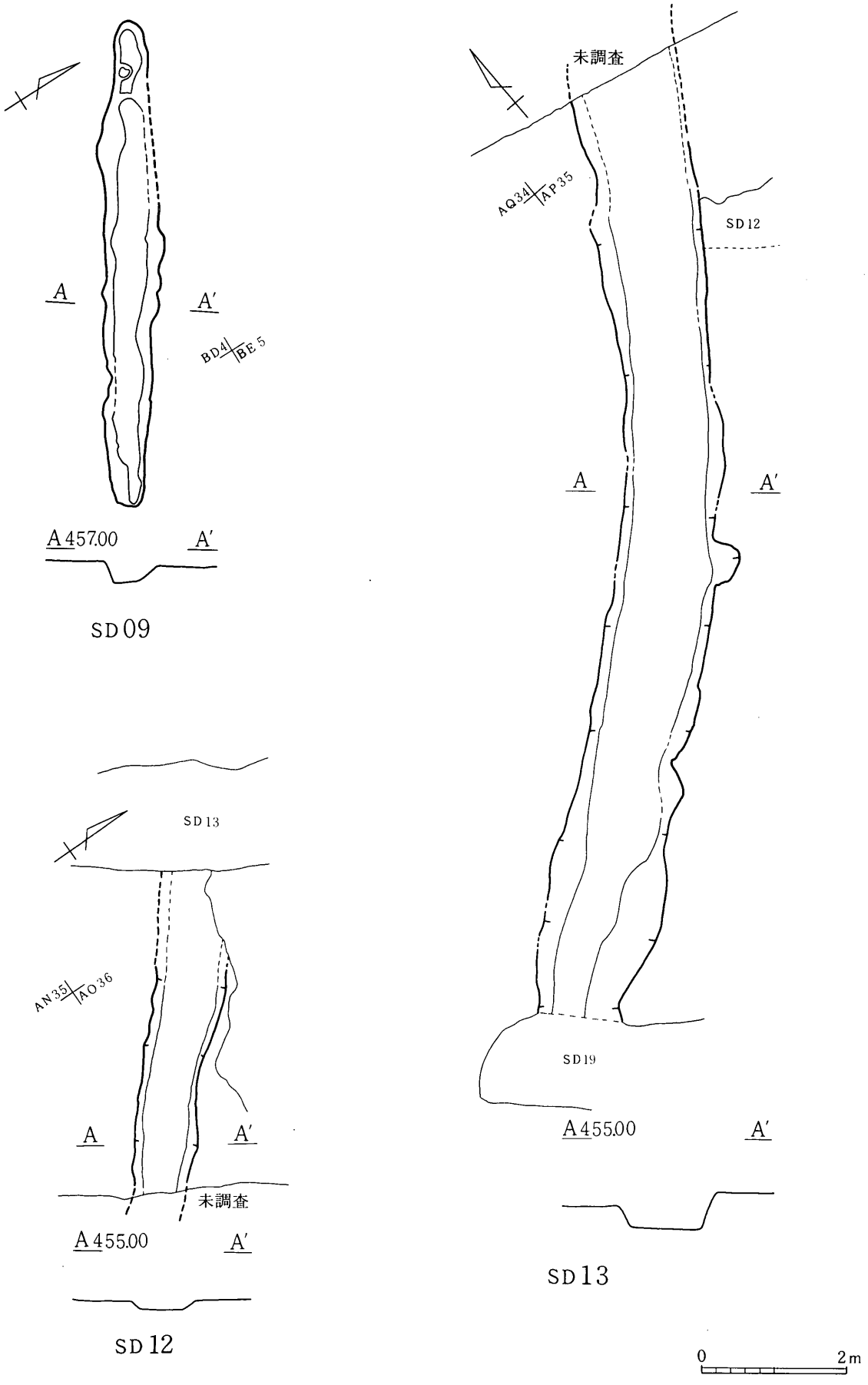
挿図59　ＳＤ05


A
A'
BD3
BC4
SD08
B
B'
砂が入っており旧河道とみられる。
A 457.00
A'
B
B'
SD06
A 457.00
A'
A
A'
SD20
B
B'
B
B'
BD13
BC14
SD06
C
C
C
C
直線部は、土地区画の堀方か。
SD08
0
5m

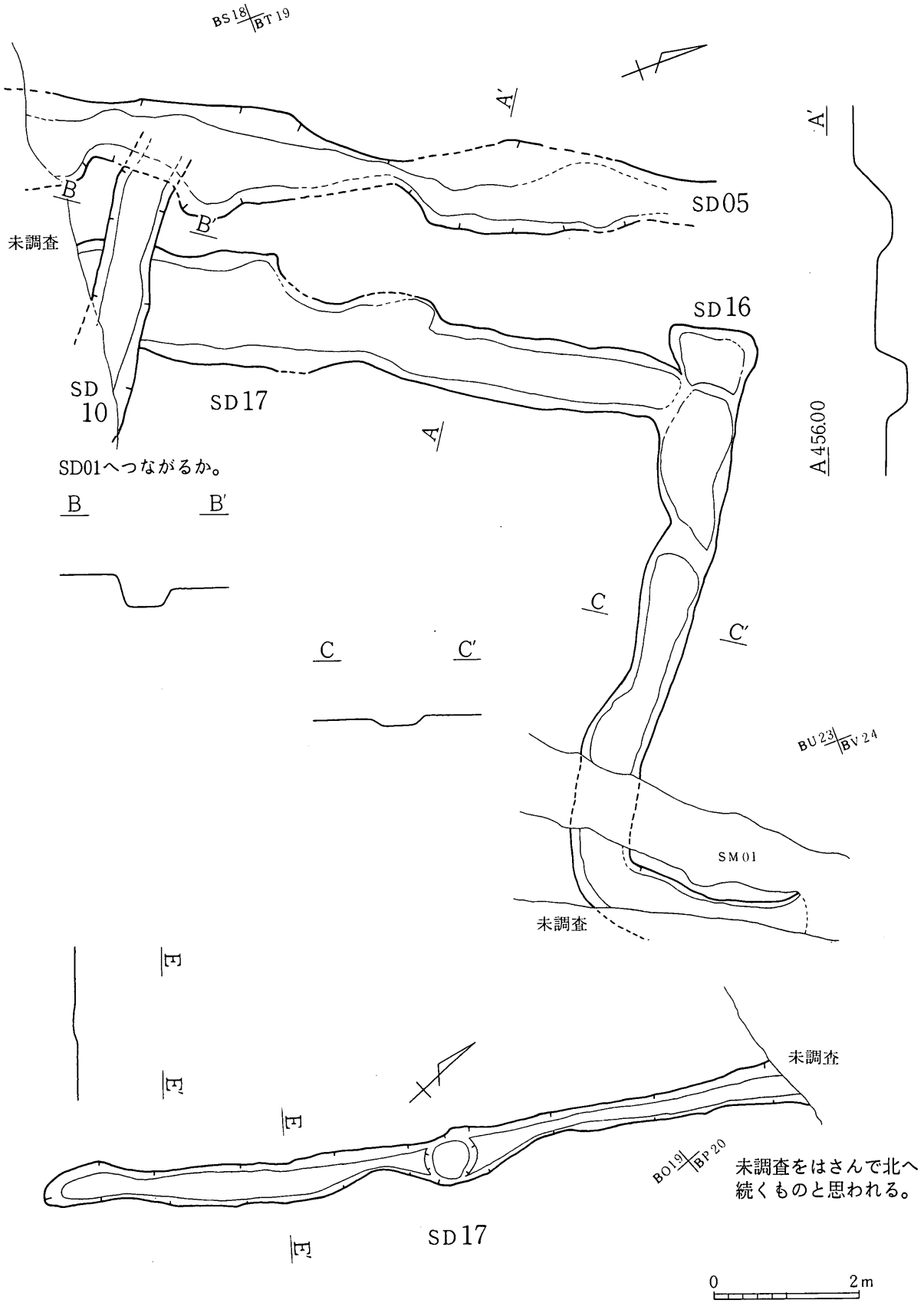
挿図60　ＳＤ06･08



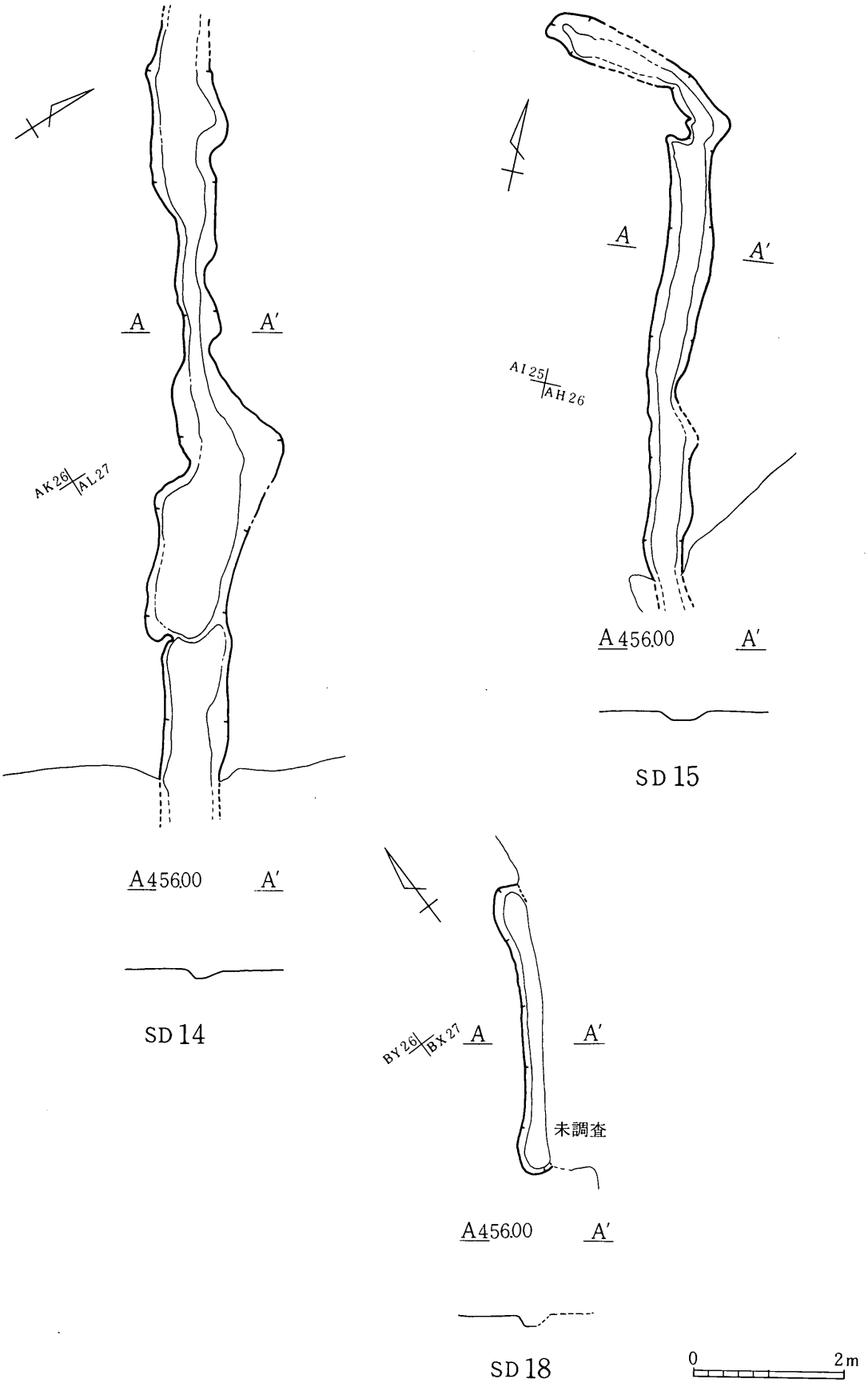
挿図61　ＳＤ04・07・19



挿図62　ＳＤ09・12・13



挿図63　ＳＤ05・10・16・17



挿図64　ＳＤ14・15・18

挿図65　ＳＤ20

ＳＤ一覧表　ＣＧＹ地籍

No.	図	検出位置	長×	幅×	深	断 面	形態・覆土等	方　向	出土遺物	時期備考
01	67		(3100)	150	40	U字形	K3の周溝に切られる砂	西～東	土師器	旧河川 SD06と交差
02			(1150)	180	30			北西－南東		中世水路上の城編へ掲載
03	68		(6200)	1160	101	逆台形	K2とK3の間 褐色	北西-西北西へ曲がる	帯金具	平安 道路址
04	69	BX29	(720)	142	22	逆台形	２号墳の盛土の下	褐色　西北西－東南東		古墳
05		欠番								
06	67		(2180)	116	26	逆台形	砂を含む	北西～南東		旧河川SD01と交差
07	69	BL04	(720)	88	24	逆台形		東北東－西南西		
08	69	BY07	(840)	200	48	逆台形		北北東－南南西		
09		欠番								
10										中世水路上の城編へ掲載
11	70	AO27	(2700)	464	64	鍋底形	礫が入る砂を含む	西から東へ弧を描く		旧河川
12	70	AT06	630	64	24	逆台形	溝状の落ち込み黒色	北東～南西		３号墳周溝内
13	70	AT08	(1070)	260	22	鍋底形	底部のみ確認黒色	西～東		旧河川削平される
4	70	AT07	(400)	40	6	逆台形	溝状の落ち込み黒色	北西～南東		不明
15	70	AU09	(1250)	80	2	不明	北側の肩のみ確認黒色	西北西～北東		旧河川削平される
16	71	AK26	1900	130	60	鍋底形	ごく浅い落ち込み	北へ曲がる		不明
17	71	AI40	(210)	54	5	逆台形	底部にピットあり	北北西－南南東		浅い落ち込みＳＫ
18	71	BS05	(335)	38	20	U字形		北東－南西		不明

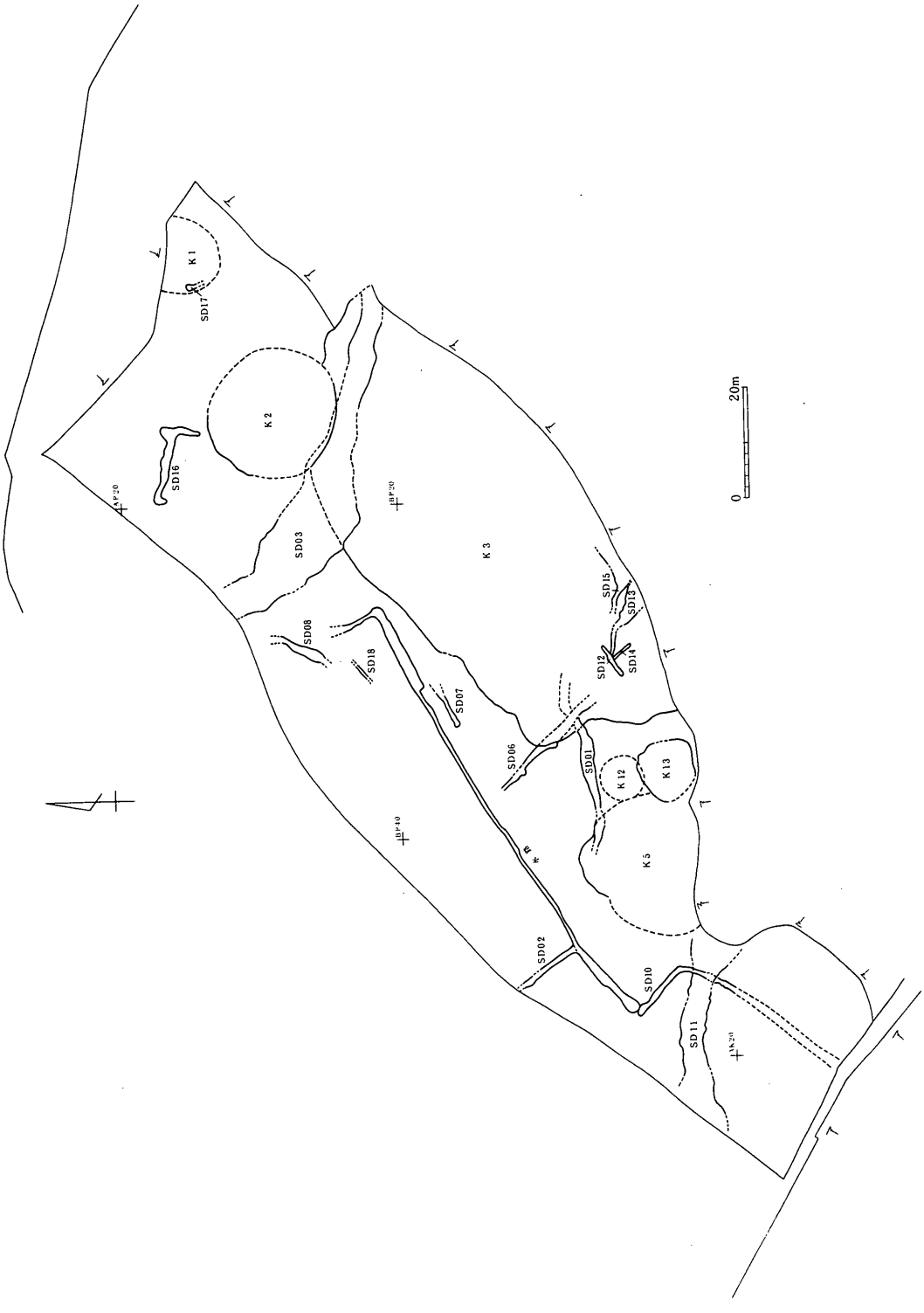
ＳＤ０３

後世の攪乱によりその形態は明確にはつかめなかったが、幅約12ｍで底部は平坦である。水の流れた形跡は認められず、人為的につくられた可能性も考えられる。

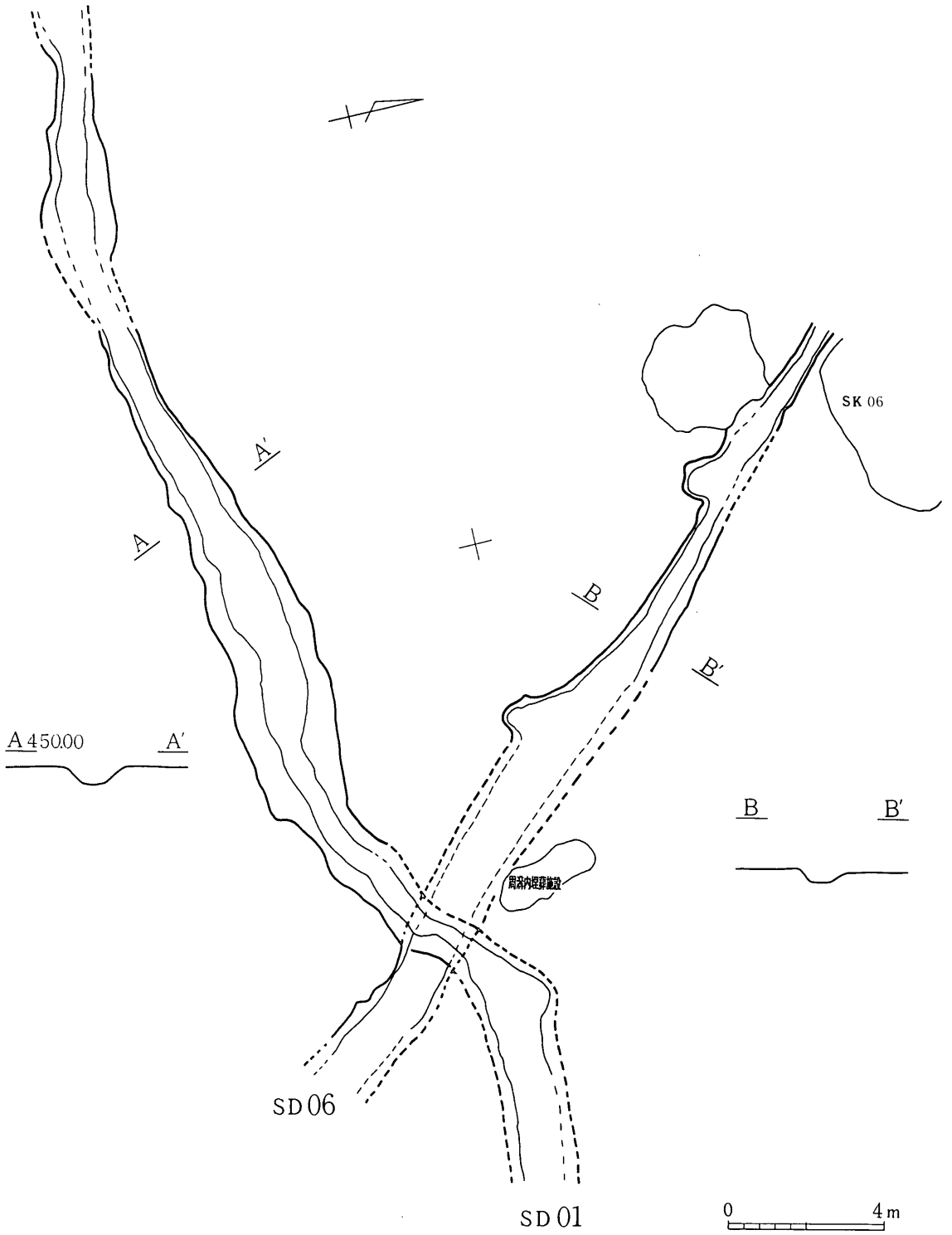
出土した帯金具から、平安時代以前の遺構とみられる。

古墳の間を通り、崖の下へむかっていることと、下位段丘には、久井遺跡などの古墳～奈良、平安時代の集落があることから、道路とも考えられる。

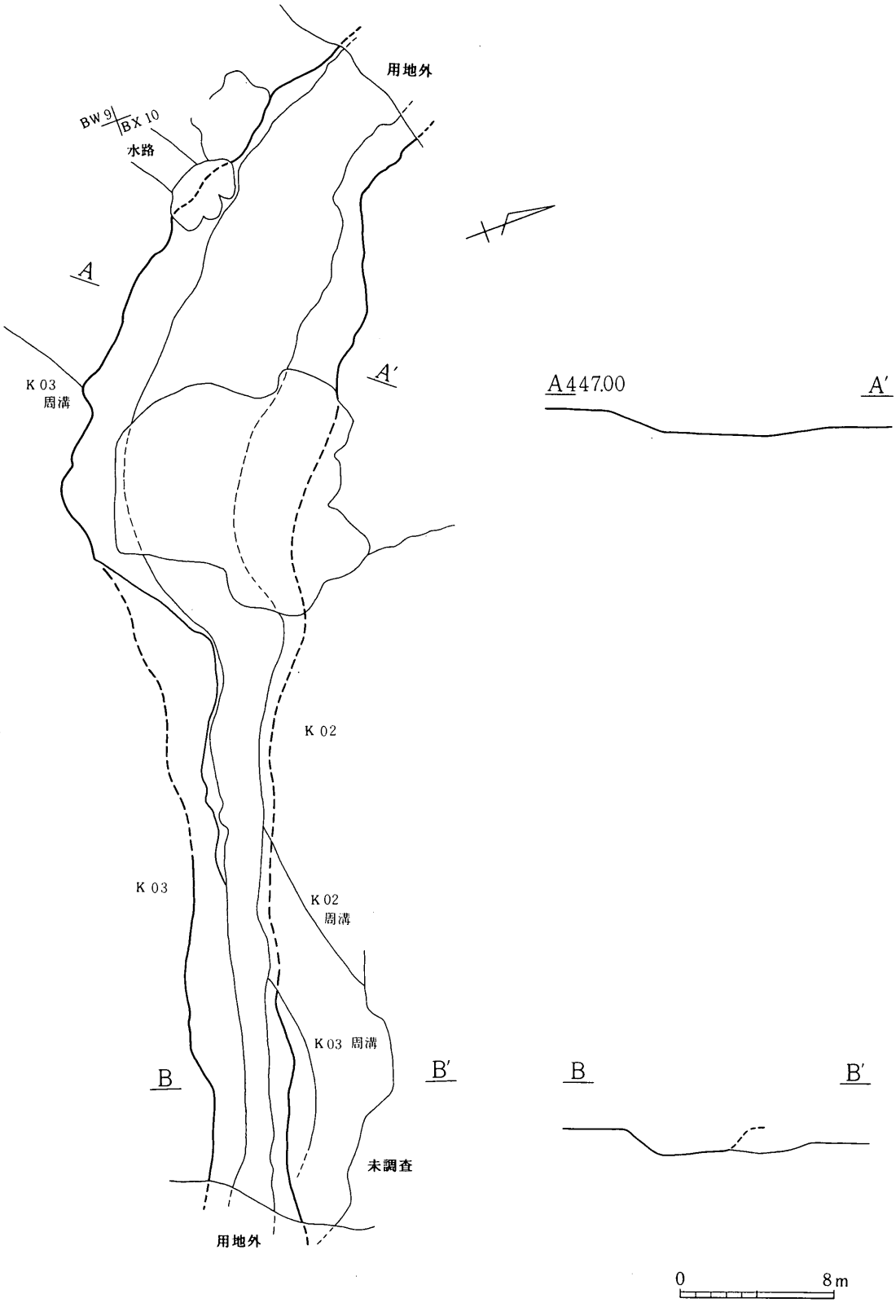
その他は、この地籍で検出・調査されたＳＤは水路（中世・城跡編へ記載）をのぞけばすべてが旧河道であった。


K 1
SD17
K 2
SD16
SD03
SD08
SD18
K 3
SD07
SD06
SD01
K 12
K 13
K 5
SD02
SD10
SD11
SD15
SD13
SD12
SD14
20m
0

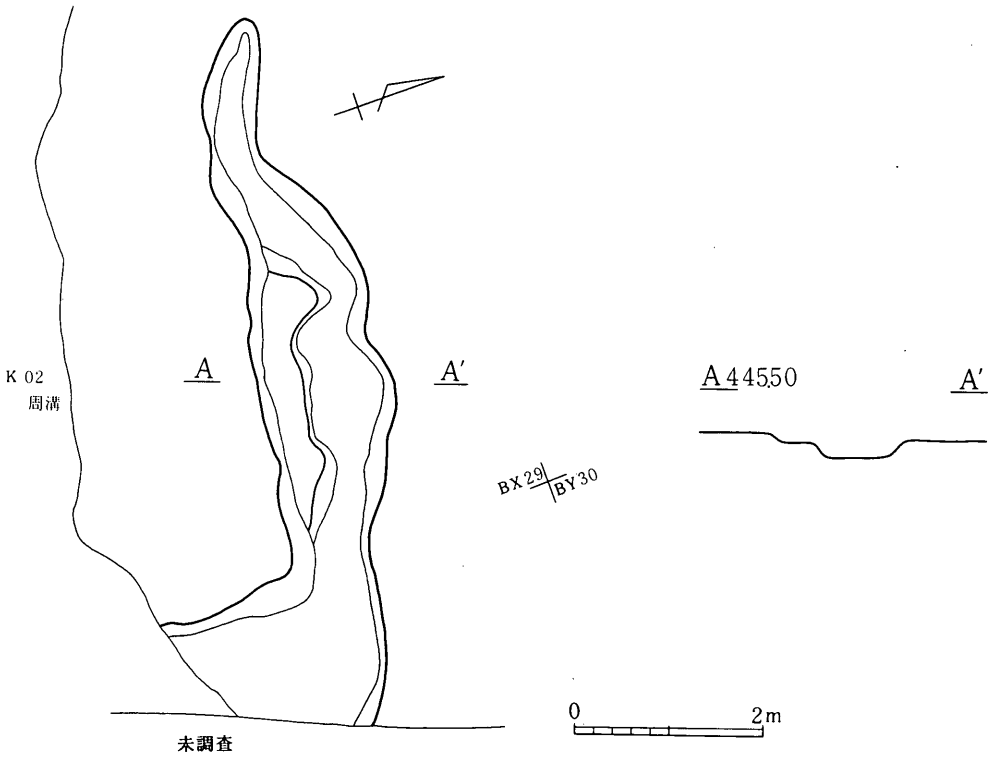
挿図66　分布図



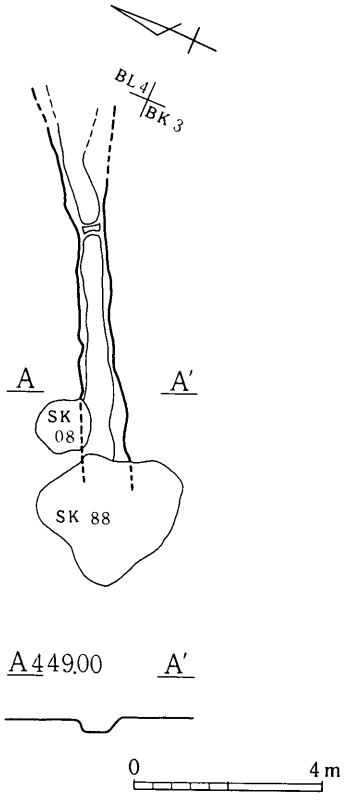
挿図67　ＳＤ01・06


用地外
BW 9
BX 10
水路
A
A′
K 03
周溝
A 447.00
A′
K 02
K 03
K 02
周溝
K 03 周溝
B
B′
B
B′
未調査
用地外
0
8 m

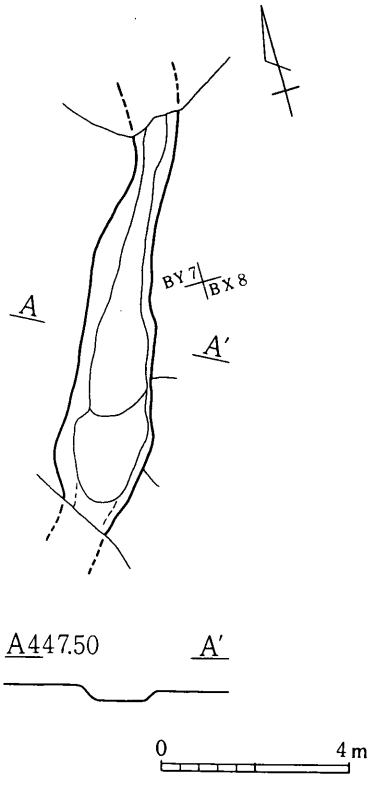
挿図68　ＳＤ03



SD04

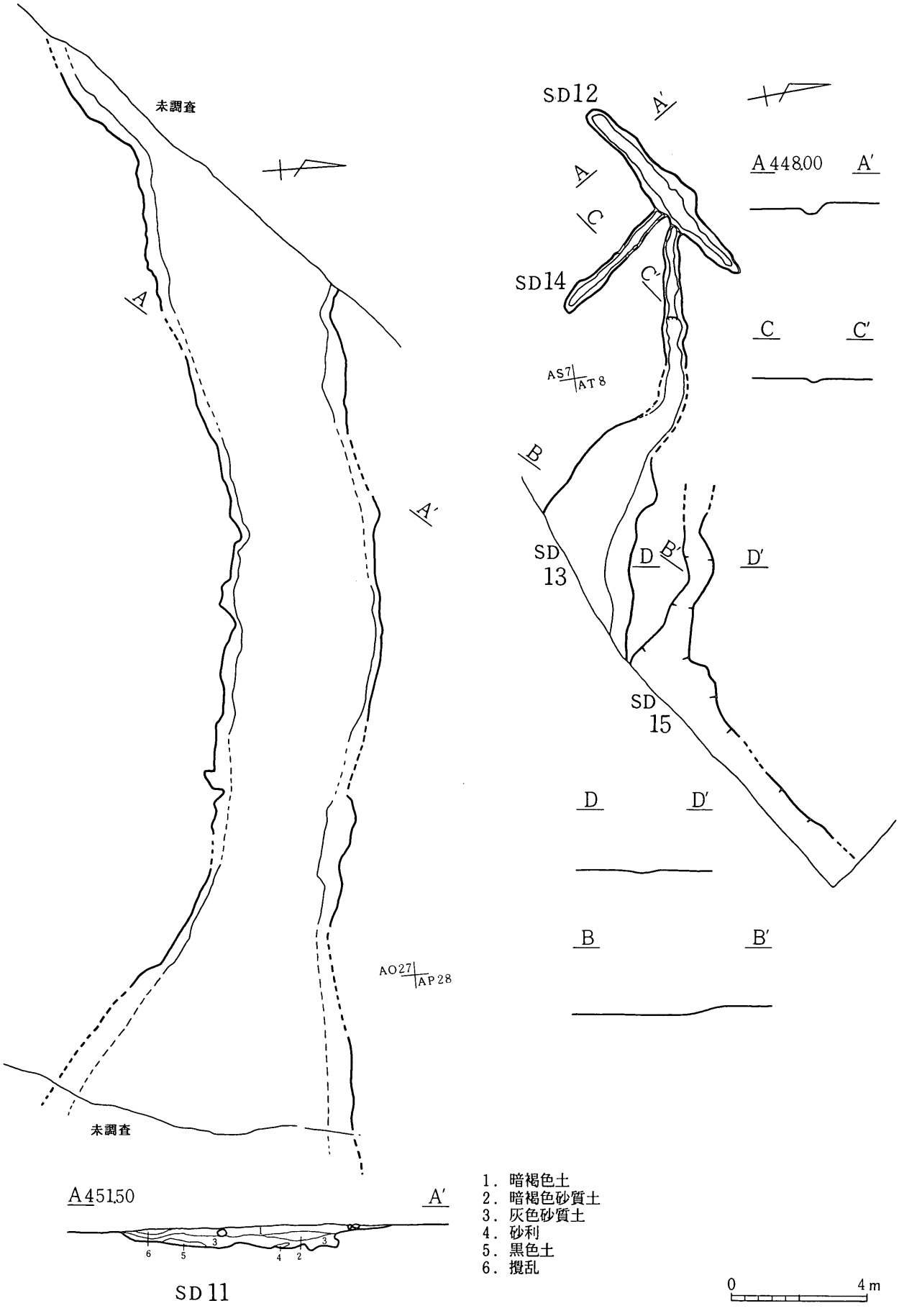


SD07

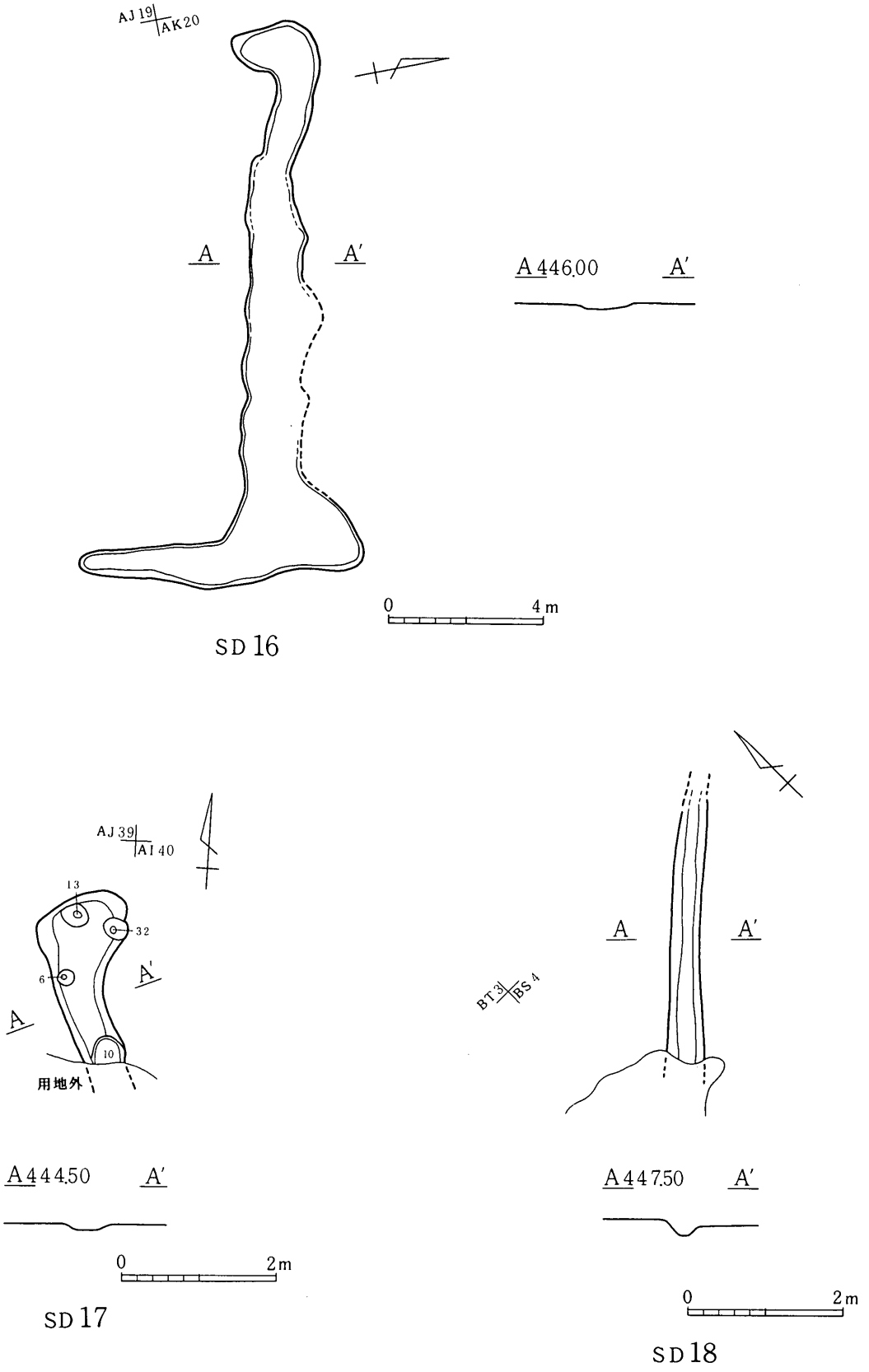


SD08

挿図69　SD04・07・08



挿図70　ＳＤ11・12・13・14・15



挿図71　SD16・17・18

ＳＤ一覧表　ＵＮＪ地籍

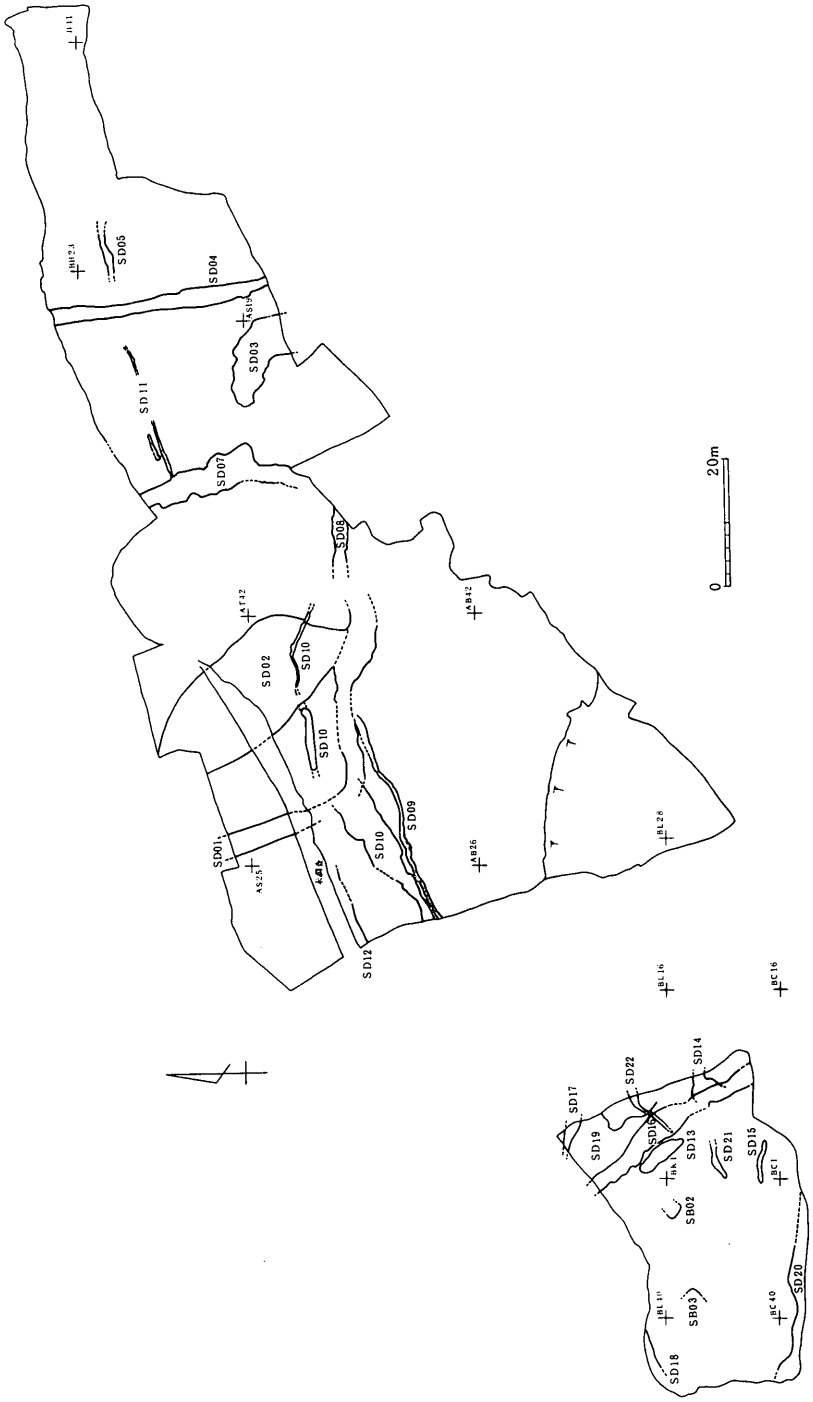
No.	図	検出位置	長×	幅×	深	断面	方向	覆土	出土遺物	備考
01	81		(5540)	300	118	Ｖ字形	北~南へ向かい東へ	砂の堆積あり		旧河川
02	81		(3500)	1444	86	逆台形	北から南	黒色土の堆積		
03	75	AS18	(1455)	595	74	鍋底形	北西～南東	暗褐色土		不明　落ち込み
04	73	AV19	(3225)	310	133	Ｖ字形	南－北	人頭大の石が入る	常滑・甕	区画
05	74	BF24	914	104	56	逆台形	東～西	砂を含む		旧河川
06	74	AQ21	(1230)	60	23	逆台形	東～西	砂を含む		旧河川
07	75	AW08	(2390)	470	84	逆台形	南－北	台地に直行する。ある程度人為的		旧河川
08	81		(960)	200	47	逆台形	東－西	堀１に切られる		区画
09	76		(3480)	68	29	Ｕ字形	西南西～東北東	所々攪乱に切られる		旧河川
10	77	AN38	(5770)	540	91	Ｕ字形	西南西～東北東	底部の一部を確認		旧河川
11	77	BC12	(2040)	48	23	Ｕ字形	西北西～東南東	上部削平、底部の一部を確認		旧河川
12	78	AK23	(1280)	58	112	逆台形	北東～南西	南側の肩のみを確認		旧河川
13	78	BL02	820	260	52	鍋底形	北西－南東	拳大の石が入る		落ち込み
14	78	BH08	(452)	454	24	逆台形	東西	SD16に切られる	高坏	古墳　不明
15	78	BD01	668	68	48	Ｕ字形	東－西	暗褐色		溝状の落ち込み
16	79	BO05	(3070)	472	54	逆台形	北西～南東	砂　堀４に切られる		旧河川
17	79	BS03	(460)	256	87	Ｖ字形	西～東	砂		旧河川
18										K6周溝古墳編へ掲載
19	79	BL04	(1690)	868	43	逆台形	北西－南東	単なる落ち込みか		
20	80	BB43	(2690)	(128)	(76)	不明	東西	北側の肩のみ確認		攪乱の可能性も
21	80	BF03	340	114	24	鍋底形	東～西			
22	80	BM06	(860)	128	100	逆台形	西北西～東南東			

ＳＤ０４

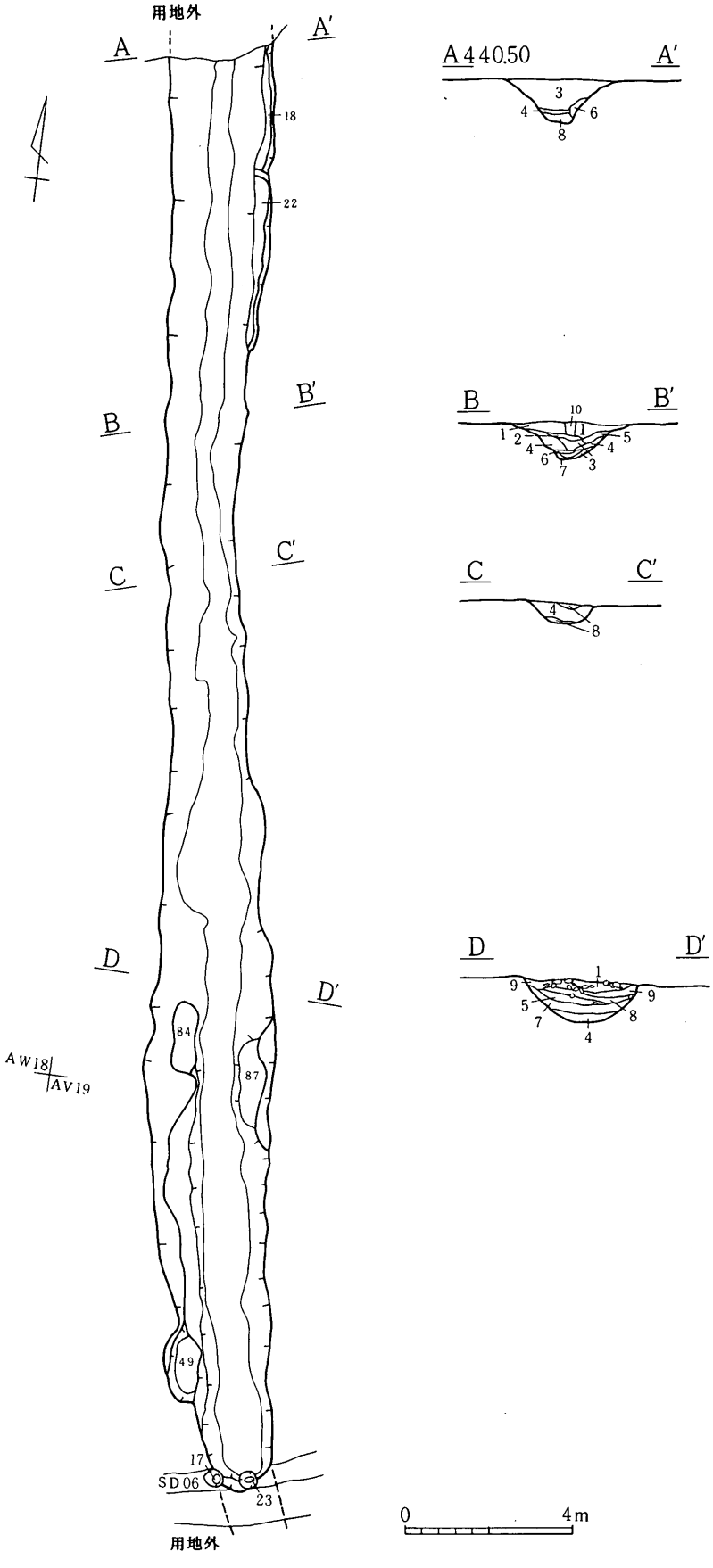
一直線に段丘を横切る溝であり、人為的に掘られたものとみられる。

段丘東側には、中世のものとみられる集石墓がまとまって確認されており、出土遺物からこの溝も墓と同時期のものと判断できる。

したがって、この溝は墓域を区画する意図で造られたものと判断できる。

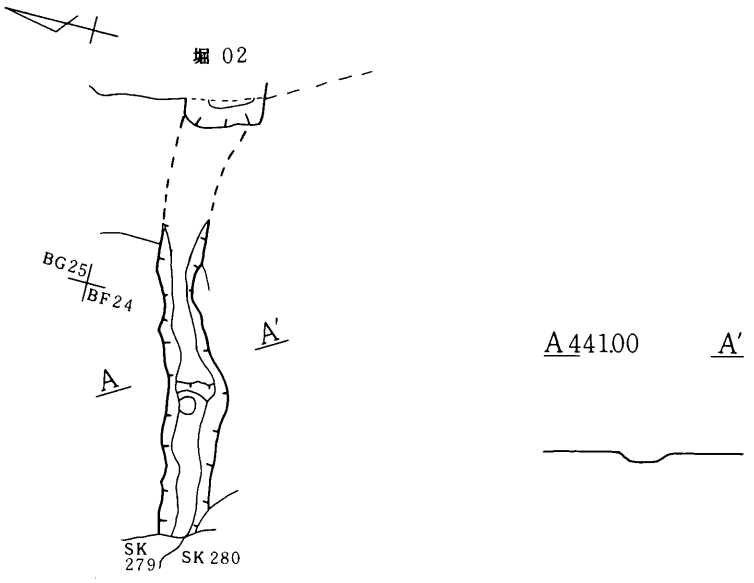

SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SB02
SB03
0
20m

挿図72　分布図

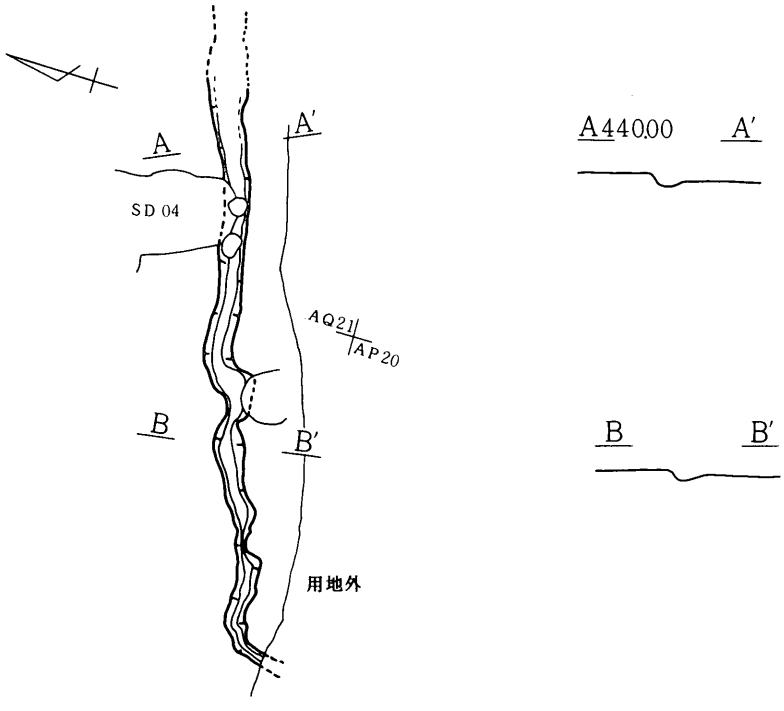


1．耕土
2．黄色土
3．黄褐色土
4．褐色土
5．暗褐色土
6．黄色土泥褐色土
7．暗褐色土混褐色土
8．黄色砂土混褐色土
9．耕土混褐色土
10．攪乱

挿図73　ＳＤ04



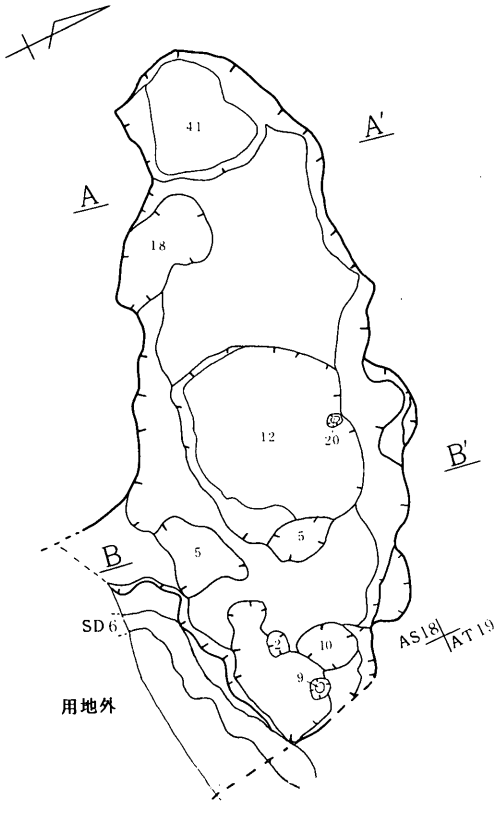
SD 05

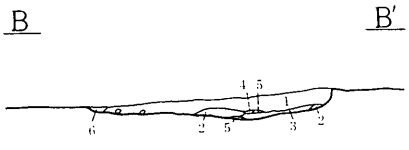


SD 06

0 4 m

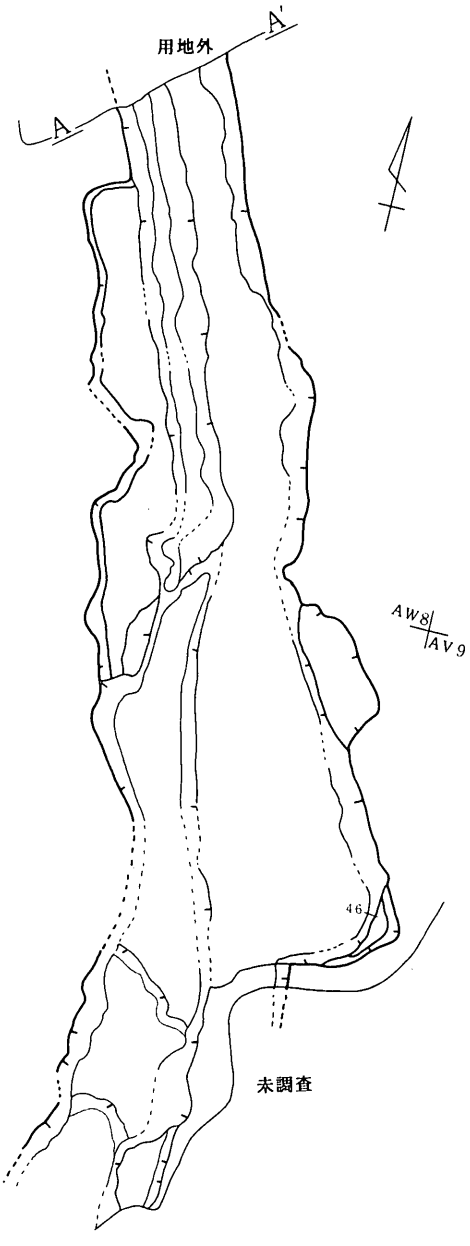
挿図74　SD05・06

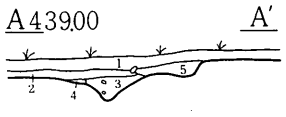




1．暗褐色土
2．黄白色砂質土
3．黄褐色砂質土
4．黒褐色土
5．明褐色砂質土
6．黄褐色土

SD 03



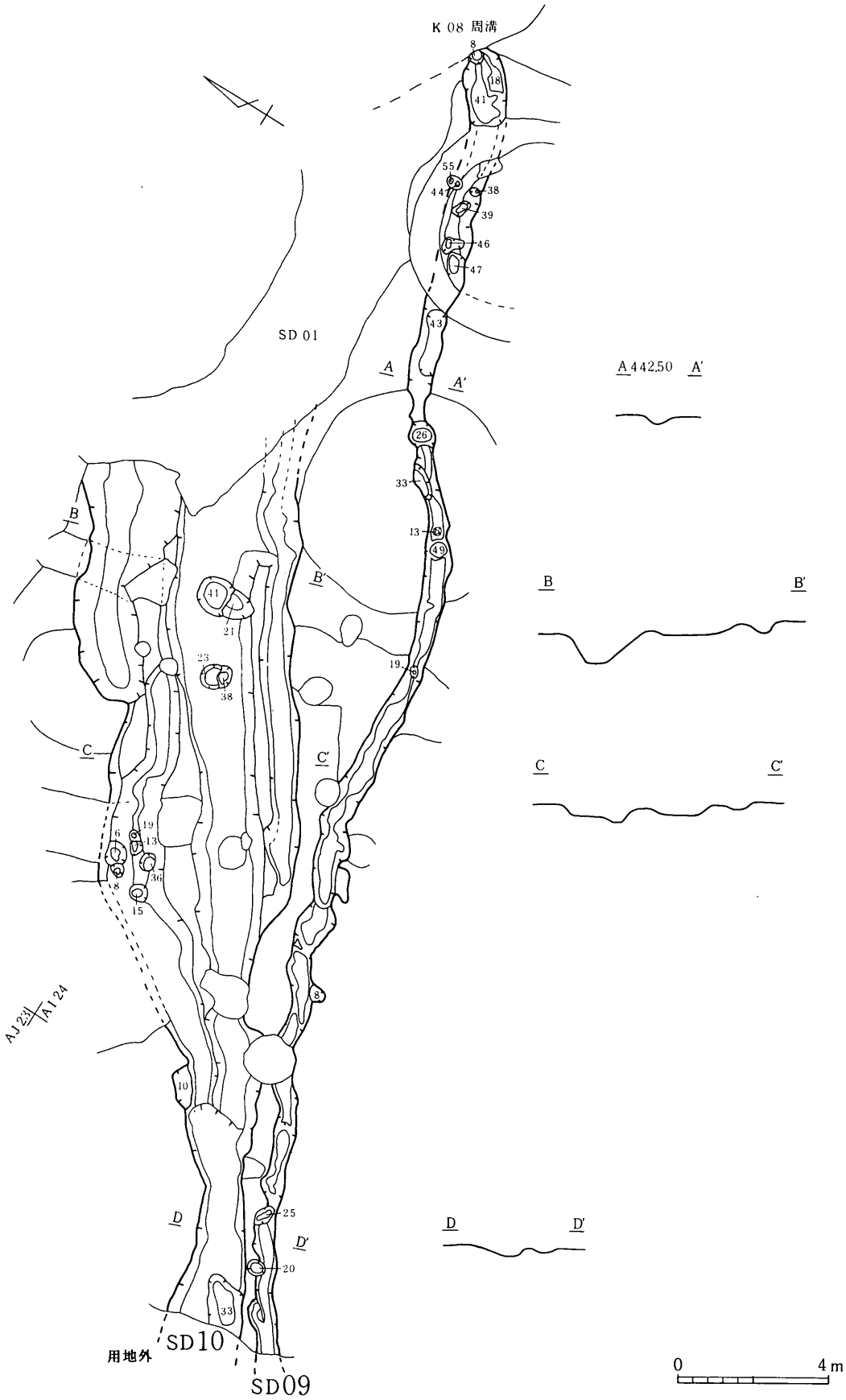


1．耕土
2．灰褐色土
3．黄色土泥褐色土
4．褐色土泥灰褐色土
5．暗褐色土
6．褐色土
7．黄色土泥灰色土

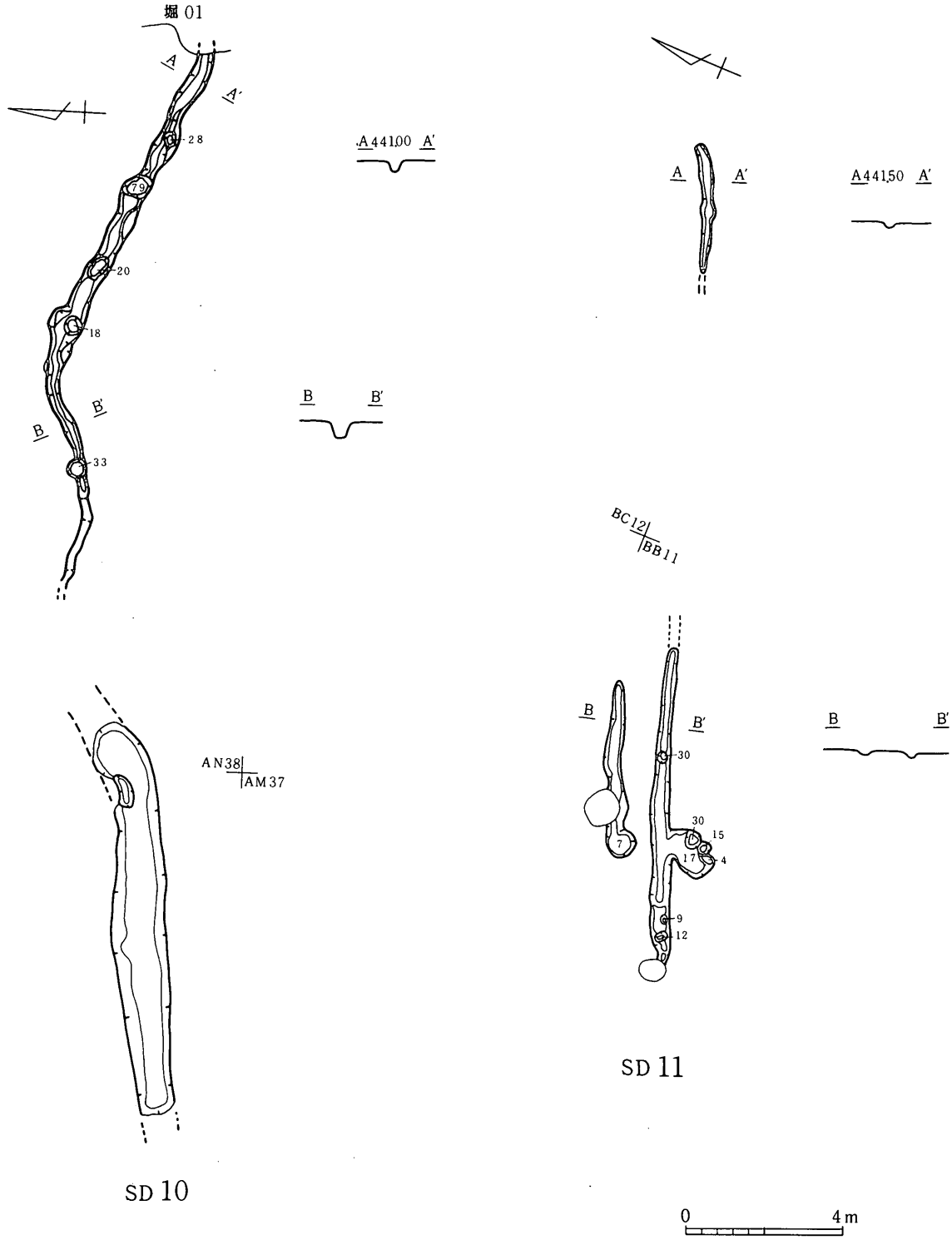
SD 07

0　4m

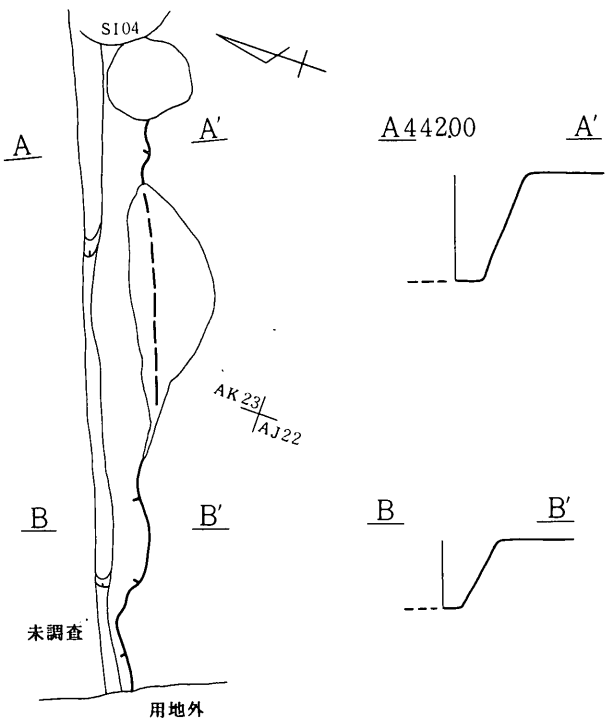
挿図75　SD03・07



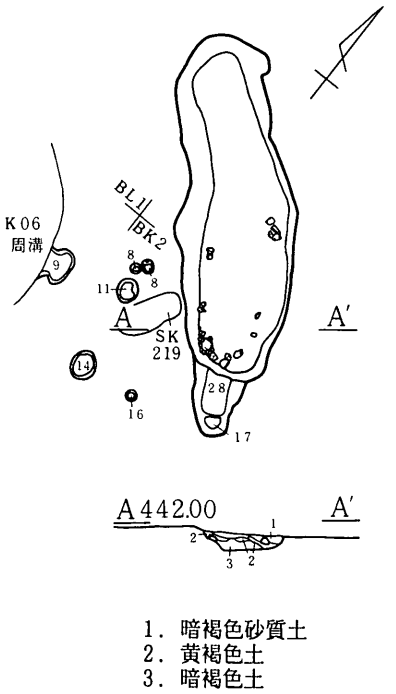
挿図76　S D09・10


堀01
A
A'
28
79
20
18
B
B'
33
A441.00 A'
B B'
A A'
A441.50 A'
BC12
BB11
AN38
AM37
SD 10
B
B'
30
30
15
7
17
4
9
12
B B'
SD 11
0
4m

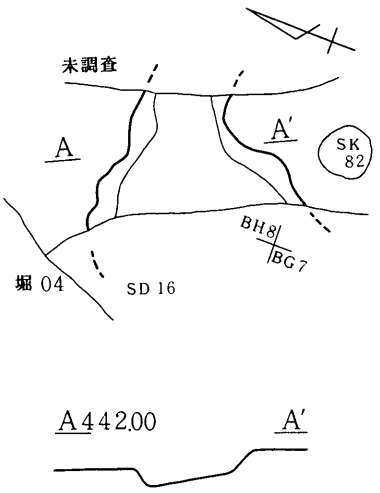
挿図77　SD10・11



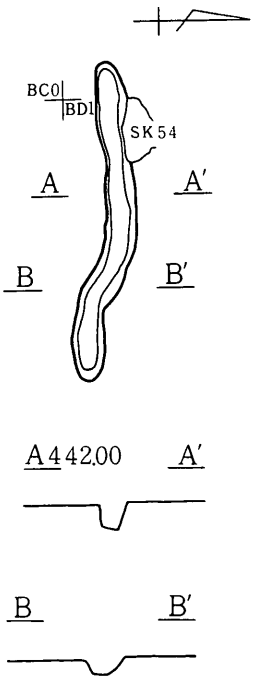
SD 12



SD 13



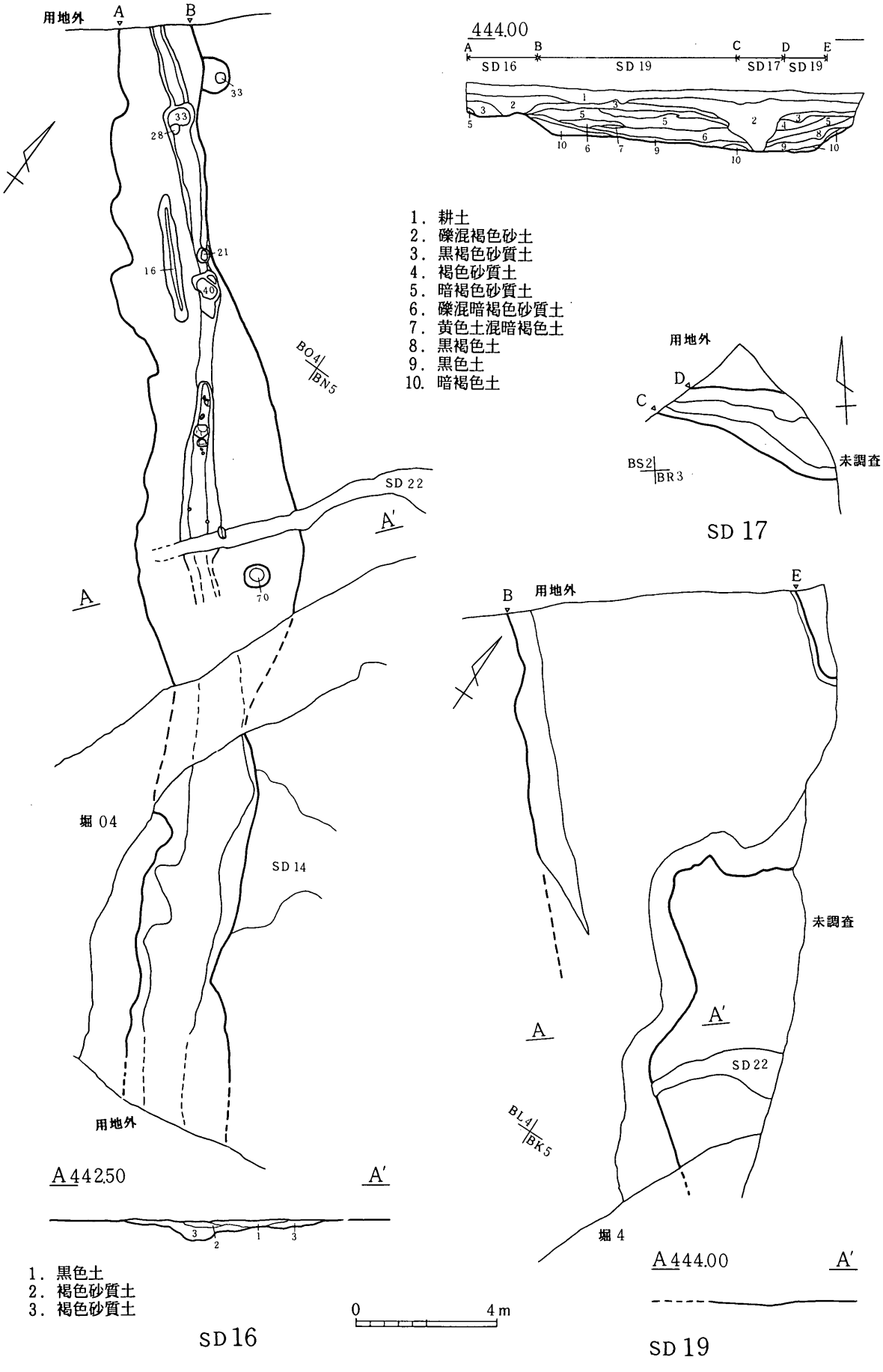
SD 14



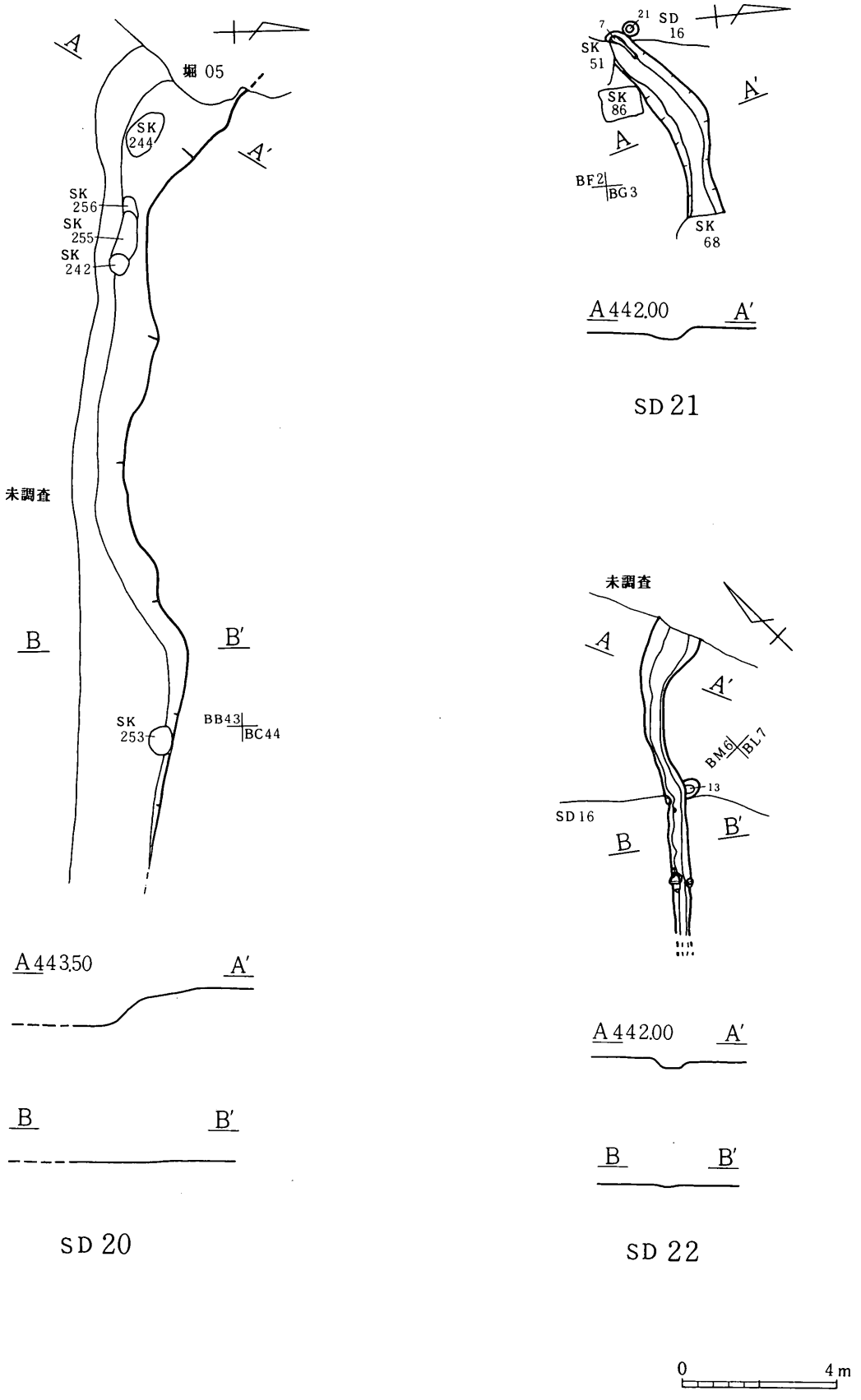
SD 15

0 4m

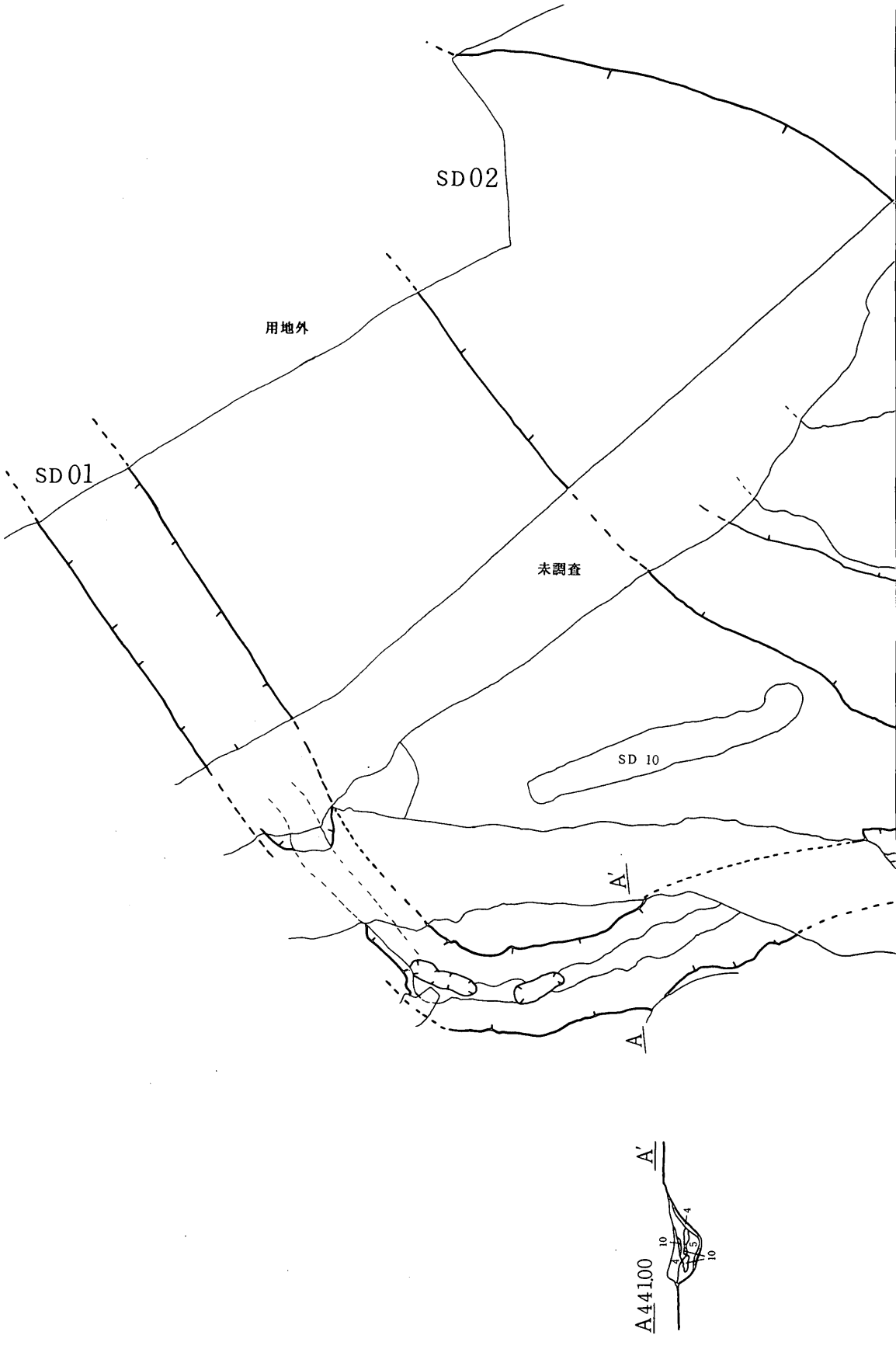
挿図78　S D12・13・14・15



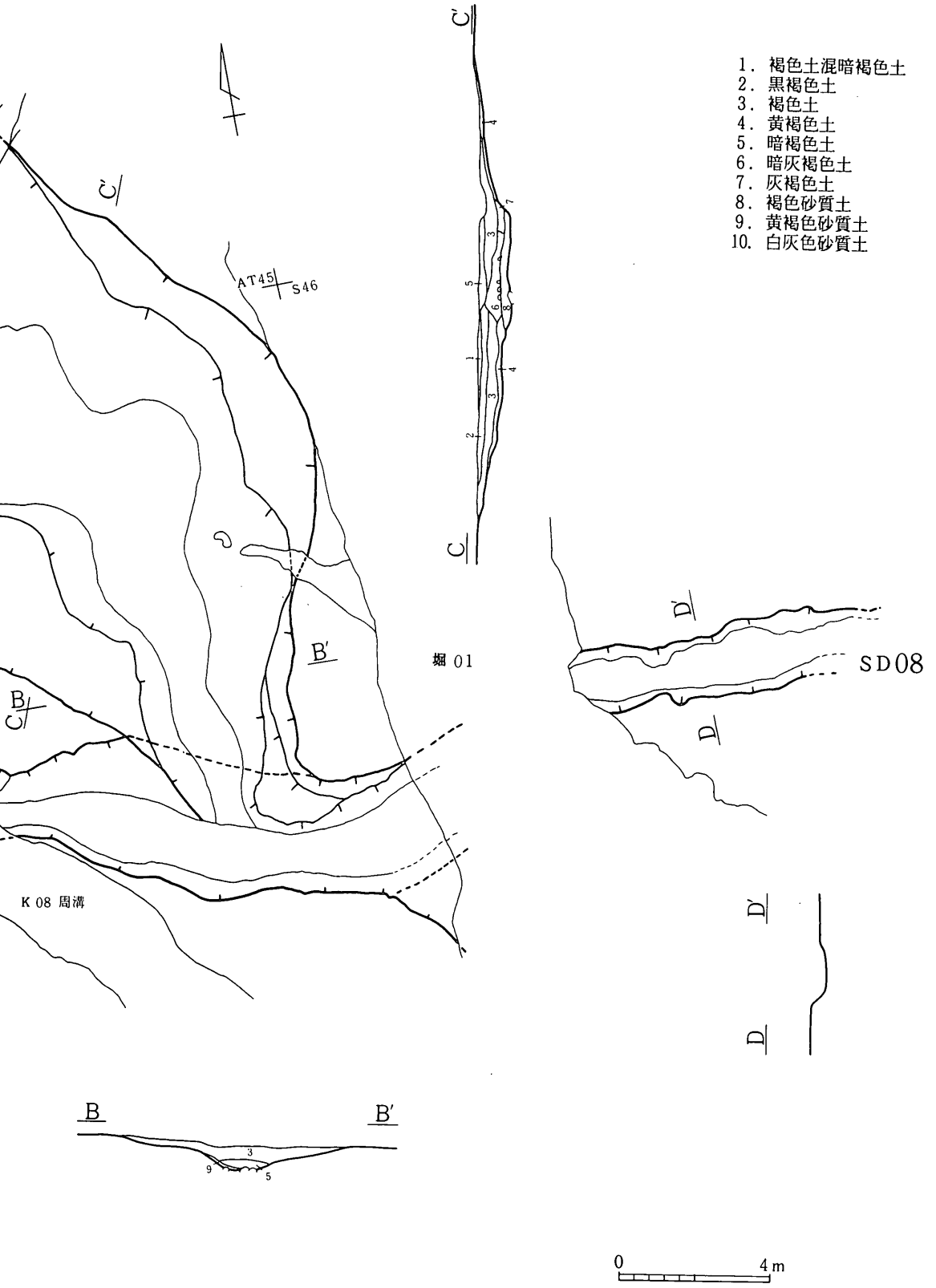
挿図79　ＳＤ16・17・19



挿図80　ＳＤ20・21・22



挿図81　ＳＤ01･02･08


1．褐色土混暗褐色土
2．黒褐色土
3．褐色土
4．黄褐色土
5．暗褐色土
6．暗灰褐色土
7．灰褐色土
8．褐色砂質土
9．黄褐色砂質土
10．白灰色砂質土
AT45
S46
堀 01
SD08
K 08 周溝
0
4 m

Ⅳ まとめ

北の原遺跡をその確認できた遺構・遺物から時代ごとに総括してみる。

縄文時代

当該時期の遺構としては落し穴1基が確認されたのみで他にはまったく確認できなかった。出土した遺物としては、硬砂岩製の打製石斧が古墳の葺石に混入していた。また、中期のものと見られる土器片は旧河道と見られる溝からの出土であり、調査区外から流れてきたものと見られる。後期の土器が上の城地籍から出土しているが、遺構ではなく包含層であった。この地には、いくつかの生活の跡は見えるものの、居住域ではないことははっきりした。

周囲では猿小場遺跡・八幡原遺跡に住居址が確認されているものの多少時期が異なるため、直接この地と関係はないと言える。

弥生時代

確認できた遺構は、後期終末に近い時期の住居址である。調査地内では3軒のみであるが、北の原遺跡全体ではもう数軒は確認できるものと見られる。しかし、大集落とは考えにくい。

また、弥生時代末から古墳時代にかけての周溝墓を確認した。これらの周溝墓は大きな盛土を持つ古墳に先行して造られたものであるが、古墳の前段階の墓の形態とは考えにくい。（八幡原遺跡　飯田市教育委員会）

古墳時代

この遺跡の中心をなす時代である。段丘縁部に古墳群が広がっている。詳しくは、茶柄山古墳群編を参照

中世

時期でいえば中世後期と見られる。遺構としては、墓（集石墓・土壙墓）が多数確認されている。古墳時代から連続して、墓域として意識されていたものと見られる。

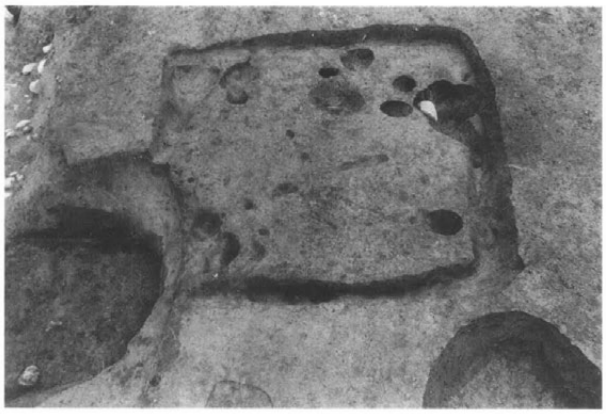
この地には小規模ではあるが城が築かれたことが確認されている。詳しくは上の城跡編を参照

近世

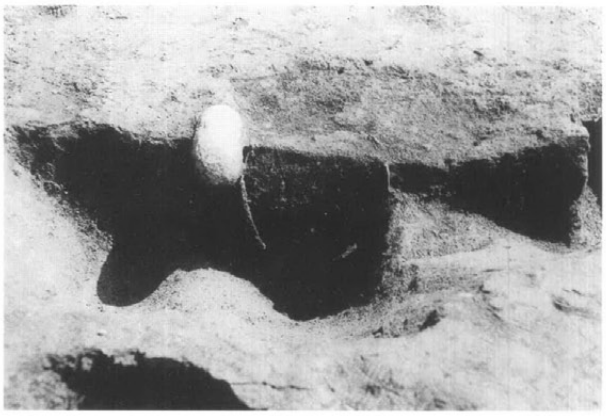
中世に城があったにもかかわらず、それ以前と同じ墓域として意識されていた。それは近世に止どまらず、現代まで引き継がれていた。しかし、近世墓が発生するまでには城がその機能を失ってから多少時間がある。堀・土塁は耕作のため削平されたものと見られる。

かぎられた調査範囲であり、遺跡の全容を把握することはできなかった。しかし、今回の調査地点である。段丘縁部は古墳群が形成されて以来、墓域として意識され、墓地が造られてきた。言い換えれば人が住むには段丘の傾斜に近すぎるのと生活に不可欠の水がないために墓地以外に使用できなかったとも言える。

写 真 図 版



SB01



SB01 炉

SB02

SB03

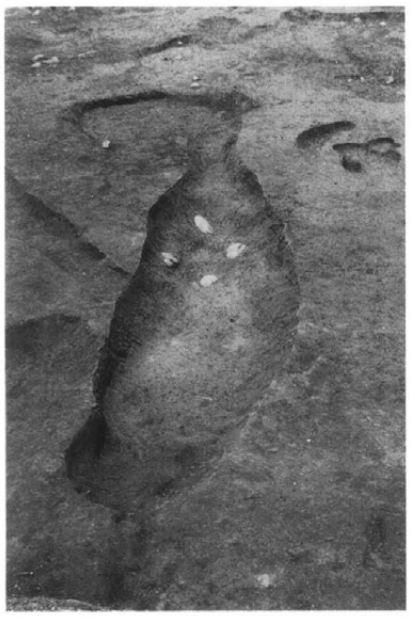
SM02・03

遺物出土

図版 2

ＭＫＨ地籍　全景（南から）

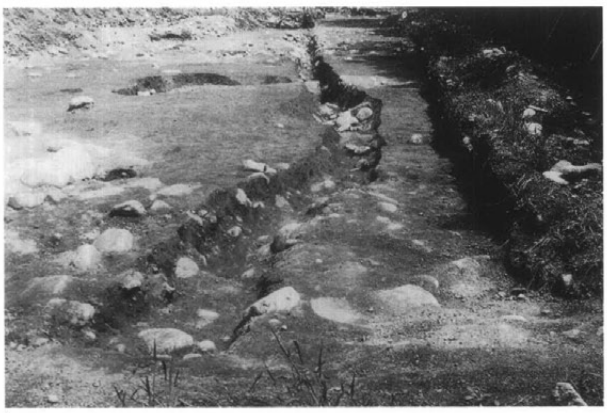
ＭＫＨ地籍　全景（北から）



ＳＤ０１

ＳＤ０６

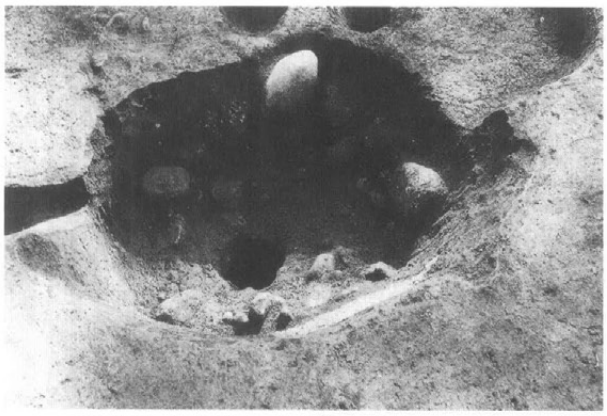
ＳＤ１３



ＳＤ７

ＳＫ０１

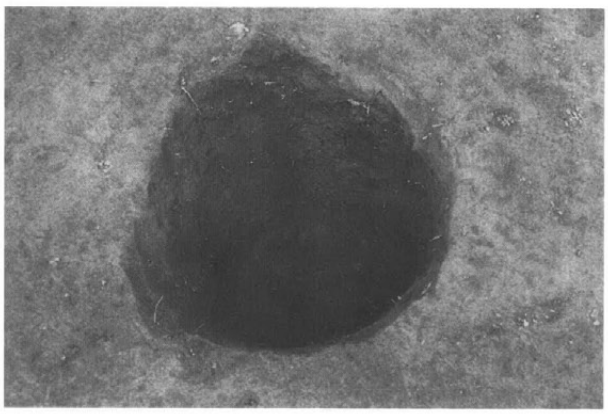
CGY



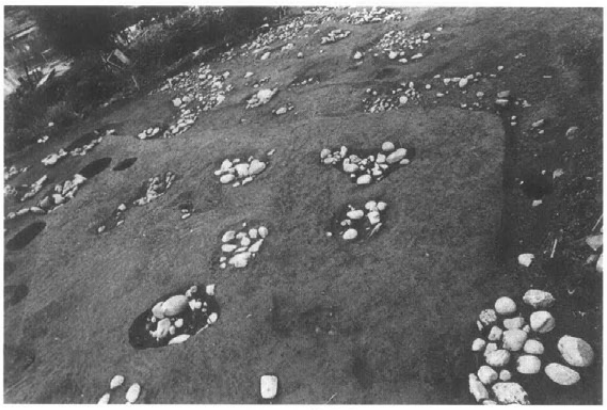
SK04落し穴

SK13

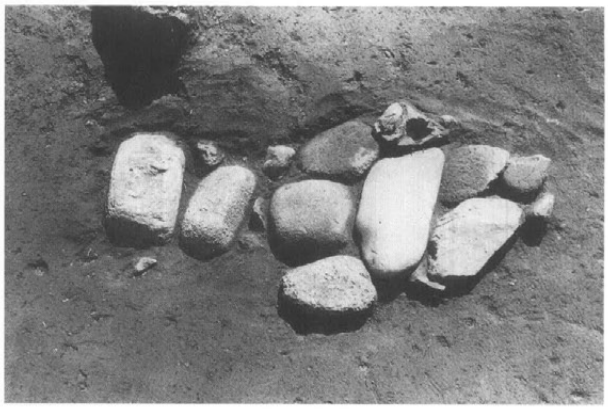
SK　全景



SK18

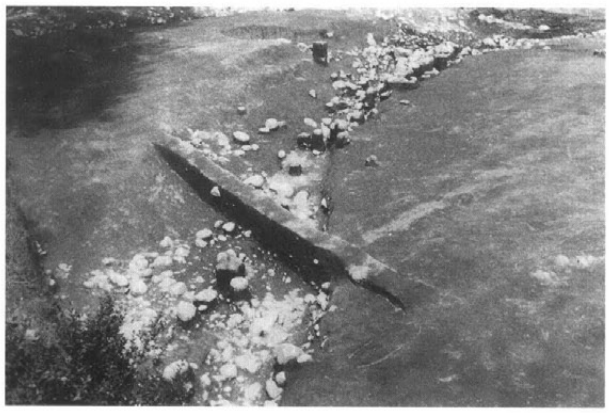


SI全景



SI05

SD03



SD11

図版 4

UNJ

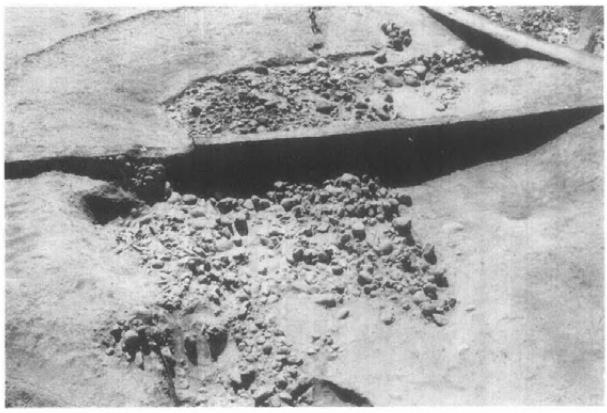
SK30～39　全景

SK93

SI08

SI06

SD04



SD01

SD03

作業風景

作業風景

作業風景

報告書抄録

ふりがな	きたのはらいせき
書　　名	北の原遺跡　（遺構編）
副書名	一般国道１５３号飯田バイパス（３工区）建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼３１４５番地　☎０２６５－５３－４５４５
発行年月日	西暦１９９６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きたのはら 北の原遺跡	飯田市松尾					平成４年～ 平成７年	24,000	一般国道 153号 飯田ＢＰ 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北の原遺跡	集落址 墓域	弥生時代 古墳時代 中世 近世	住居址 方形周溝墓 墓（火葬墓） 墓（土壙墓）	弥生式土器 六道銭・蔵骨器 六道銭・煙管	古墳時代以降からは墓域として継続的に使用されたた土地である。

北の原遺跡
（遺構編）

調査報告書
1996年３月発行

印刷・発行　長野県飯田市上郷3145番
長野県飯田市教育委員会
印　　刷　飯田共同印刷株式会社